
戴邦物語

騎馬裕一郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

戴邦物語

【Nコード】

N0241L

【作者名】

騎馬裕一郎

【あらすじ】

海中有三神山、名曰蓬萊、方丈、瀛州、仙人居之。ある日、千里は美しい芳園にいる夢を見る。その夢に毎晩現れる少女。彼女は静かに佇み千里を親しげに呼ぶ。そして、行方不明になっていた親友、翔を偶然見かけたことから千里は日本とは異なる別の世界があることを知る。そんな中、千里の住む町では、人が行方不明になる事件が頻発し、謎の凶獣が人々を襲う。人が堕ちるとは、人々が憬れる憧苑とは。そして美に憧れ、ある將軍との出会いにより彰国の争いに巻き込まれてゆく雛龍 子琳。我々の世界とは異なる、戴邦と

いう古代中国のような異世界を舞台に、千里の壮大な戦いが始まる。

子琳回顧編 彰と成との国境間の緊張は過去の戦から徐々に苛烈さを増し始め、ついに成は東璃の平定に魏素という無名の將軍を任命し彰攻略にあたらせた。一方彰の守将瀑？は、王宮を牛耳る司馬氏との軋轢によって妨害を受けながらも、自らの理想の為 国政を正す為に国境を守りつつ子琳を使つての謀反を企てた。次第に子琳は両者の政争に巻き込まれていくも、虐殺で親を失った女の子瓊凜や武官の趙駿らとともにこの困難を乗り越えてゆく（予定）。不定期更新です。まとめ次第あげてゆきます。

東璃争乱

景安十七年、

彰王桂岱、東璃邦十余州を統べ、

其の威甚だしく、英声天を突かんが如し。

天下に号令し諸侯是に伏して、天下安寧せしむ。

賛の宵鳳、之を惡みて自ら鳳師を率いて彰を討たんとするも

玩州楚驍にて桂岱是を討ち、此に賛滅ぶ。

賛の西苾王倒れて後、凡そ五十余年に及ぶ争乱遂に結し万庶安樂す。

彰王桂岱、帝冠を戴きて名を東彰師君、昂竜と称し、元号を章初と為す。

是を以て、畿禁城太極殿に至り、龍廟の御前にて古龍尊に天下安寧の詔を奏し、功政を敷く。

昂竜、諸邦を徳を以て治る。

章初八年、

昂竜、殿中にて乱心し、侍従数多扼殺す。

諫臣あるも、此を磔刑に処し、一族皆絞首に処して宮門に晒す。

近臣慄きて、皆閉口す。

迄に昂竜疾みて、懷郷の禽する所と為り、顛狂して墮つ。

乃ち諸侯叛きて、各々東璃邦の城府に籠りて抗ふ。

昂竜の仔、漢竜立つも、卒に諸侯を鎮めること能はず。

天下悉く乱れ、群雄興亡し、戦火竜が渦を巻くが如し。

貴賤老少皆嘆息し、墮つ者日に日に多し。

墮つ者、儚獣と為りて民を喰らい、民嘆きて更に儚獣殖ふる也。

東璃邦、以て再び乱世と為る、況や戴邦をや

綺麗。

〈?〉

月が綺麗な夜だった。

群青色を少し足したような黒々とした天には、いつもよりも少し大きく見える黄月と、その月を中心にして散りばめられた星々が微かな色を帯びてからからと輝き、

大地に佇むゴツゴツとした褐色の岩肌を静かに照らして、淡い影を作っている。

そして深夜の気持ちのよい冷たい風が彼の白い肌を優しく撫で、長めの後ろ手に結った黒髪と山吹色に染め上げられた絹の装束を靡かせた。

その風が、彼がいる岩山の眼下に広がる木々の梢を揺らし、暗緑のさざ波を幾重にも起こして、葉の擦れる音を辺り一面に響かせている。

この場所から眺めるとまるで緑の海のような。

彼はここからの眺めをとても気に入っていた。

稜線^{りやうせん}が連なる山に囲まれた盆地に鬱蒼と広がる森のほぼ中央、そこに切り立った岩山が三つほど隆々と聳^{そび}え、

その頂上からはどこかへと繋がる山道に、地平線まで敷き詰められた森と空との境、さらには小高い山の斜面にへばりつくように造られた山城までを一望することができる。

この辺りに住む人は、この岩山を三豊山^{みつほうさん}と呼んでいるが彼は知らない。

三豊山の岩壁には樹齢五十年ほどの若い松が何本もがっしりと幹を伸ばし、

僅かにある平らな場所にはふっくらとした芝が所狭しと生い茂っている。

雲がない日にはそこに寝転がって、星と星を結んでいろいろなものを描いてみたり

山城の中に見える外灯の光の数を指折りして数えながら、あの街の中にはどのくらいの人が住んでいるのだろう、とか
どんな生活をしているのだろうと考えるのが最近の楽しみになっていた。

この城の名を建恭けんきょうというがこれもまた彼は知らない。

街は山の麓から二重になって中腹まで連なる城壁に堅く囲まれ、城壁と城壁の間からは大きな建物の煌びやかな屋根や尖塔の頭が飛び出しており、

その高低差を利用して内壁を隔てて二段の階層に分かれ、外壁には東西南に鉄の門扉を構えている。

そして商店や家屋が建ち並ぶ街路は綺麗に区画され、さながら二段重ねた碁盤のようであった。

上の階層には、政庁らしき豪壮な建物が立ち並び、城牆じょうきょうに旗幟きしを何本もはためかせて重々しい威厳を放っている。

比較的大きな街であることは彼にも理解できた。

いつもは、細い指を使って街灯の数を三百くらいまでは数えてみるのだが、その数の多さに途中で混乱してわからなくなり、ついには飽きて仰向けになって星で絵を描くのが常であった。

だから今日こそは数え上げてやろうと意気込んでいたのだが、この場所に降り立った時、その意気込みは握りこぶしと共に解けてしまった。

幾つもの大きな火柱が凄まじい噴煙をあげて街を覆い青黒い空を紅に染め上げていたのだ。

少しばかり街から視線をずらせば、街へと続く山路には点々と松明と思われる光が列をなして右往左往している。彼がここに来た時にはすでに街の半分以上が火焰に吞まれ、

燃える城を囲む影の群から沸き起こる鬨の声や、鼓角こかくの軍声が風の空を切る音を掻き消すほどに月下に響き渡っていた。

たくさんの人がいたのに。

彼はそう呟くとさびしげに煌々と炎上する街並みをじっと見下ろしていた。

すると、思いもよらない言葉が口から出た。

綺麗。

はっとして思わず出した言葉を呑みこもうとした。

そして、そんな言葉を発してしまった自分を少し恥じ、目を瞑って首を横に振る。

暗黒の中に煌めく焰の群は、彼に美を感じさせるほど家屋を種火に綺麗に燃え盛っていた。煌々と、粛々と。

彼はあの街で起こっているだろう惨劇を想像し、ここは感動ではなく悲哀を感じねばならないと何度も心に念を打ちつけて、再び瞼を開く。

だが、やはり彼の眼に映る光景は彼に悲しみではなく感動を心に呼び起こさせるのだった。

情景としての美しさと言うよりも、むしろ滅びの美と言うべきなのだろうか、なんとも形容し難い感情が彼の心を強く打ち、胸がいっぱいになりそうだった。そして涙が頬をつたう。

そんな自分に小さな苛立ちと驚きを覚えながら数えそびれた手で軽く鼻を摩り、ぼーっと感慨に浸っていると突然噴煙の矛先がこちらの方に変わり、突風が森全体を吹き抜けた。

先ほどもまでの木々のさざ波は途端に荒れ狂う大波へと変貌し、彼は吹き飛ばされないよう足を踏みしめ、煙が目に入らないよう顔を長い袖で覆いどうにか街を見ようとした。彼はその街の最期を見てお

きたかった。

突風は街の火柱を一層燃えあがらせ、ついに街の一番大きな建物までもが炎上し始め瓦解した。

盛隆を極めると思われていた彰王朝が衰退し、各地で諸侯が自らの領分の拡大を狙って争う戦乱の時代、このような光景は決して珍しいものではない。建恭もまた他国の侵略を受け戦火に巻き込まれたのであった。彼にもそれはわかつていた。だが分かっていながらも、どうしてもか美しかった。

長い突風が止み、顔を覆っていた腕を力なく落とす。強風で街の火はその火種を殆ど消費し尽くし微かなものとなっていた。

そしてこの岩山の頂まで生き物の焼けたような臭いが届き、彼は思わず鼻をおおってしまふ。焦げ臭く、血生臭い。一瞬にして醜惡な現実の惨さに引き戻され、彼の滅びゆく街に対する憧憬は薄れてしまった、興が冷めたと言ってもいい。とにかく今までの感情の昂りは抑え込まれ、人並み以上の嗅覚をもつ彼は、すぐにでもこの場を離れたい気持ちが強くなった。

そして小さな溜息をつき、この場所に訪れることはもうないだろう、と最後の一瞥をくれて彼が踵を返そうとしたとき、一瞬間に針先が刺さるような刺激を覚えた。

刺激の原因を確かめようと首に手を伸ばすが、触れる前に手は意思に反してピタリと止まり突然の痺れが身体を縛り付け、同時に手足の感覚が遠くなった。

彼は街の方角を向いたまま直立不動となり、わずかに動く目を瞬かせる。

一体自分の身に何が起こっているのか状況が掴めない。動揺が呼吸を荒くし、思い通りに動こうとしない脚に意識を集中させるにも手間取った。

すると、後ろから聞いたことのない男の声がした。

「やった、効いた！」

続いて何人かのどよめきにも似た声があがる。彼はさらに狼狽し、ここへ来たことを酷く後悔した。

「捕えたぞ！」

襟を掴まれて地面に引き倒され、そのまま仰向けにされた。そして頸には月の影を端に写しとるほどにギラギラとした短刀が突き付けられ、完全に動きを封じられてしまった。

彼はもつと後悔する。さつきとは違う涙が目に溜まり頬を零れた。そして、針先のような痛みがこの痺れを引き起こしたのだと混乱した頭の中でなんとか悟り、解を得る。

吹矢の毒。

麻痺薬を仕込んだ毒矢を首に撃ち込まれたのだろう。しかし、この風の中で当てるとは恐ろしい命中力である。彼は少し感心してしまった。

さらに彼を麻痺させるほどの毒となれば、そこらの毒では役不足である。となると、彼に対して用意されたことは明白であった。雛龍すいりゅうである彼を。

何をされたかがわかってても、手足が思うように動かせない彼にはすでにどうしようもなく、恐る恐る天を見やると、六人の赤黒い甲冑を着込んだ男達がまるで彼を狩った獲物の取り分を相談しているかのように見下ろし会話している。

顔は光源である月を背にしているためよくはわからない。内一人が隣の長髪の男に言う。

「本当にこんなガキが雛龍なのか？俺達にビビって泣いちゃってるぞ」

その長髪の男は赤い羽根をあしらった兜^{かぶと}を脱ぎ、片膝について彼の顔を覗き込んだ。

「確かに雛龍だ。この紋様の装束と、左中指にある？^{ばい}塊^{かい}が埋められた指輪、そして右腕の銀の臂環^{しうがね ひかん}、まさしく伝承にある通りだ」

？塊とは赤い珠^{たま}、臂環は腕輪^{うでわ}のことである。月光^{げっこう}がその男の顔を半分照らした。肩まで届く黒髪に鋭い鷹のような眼^{まなこ}、整った髭鬚^{しじゅう}、比較的若く見えたが今の彼にはそんなことはどうでもよく、一刻も早くこの危機的な状況を打開できる情報が欲しかった。

彼の頸に刀を突き付けている男が弱気な声で長髪の男に言う。

「瀑^{はくあ}？、やはり不味いのではないか。いくら国のためとはいえ仙獣である雛龍を利用するというのは」

どうやらこの瀑^{はくあ}？という男がこの六人の長らしい。瀑^{はくあ}？は怒気をこもらせて言う、

「建恭も陥落した。彼奴^{きやつ}らの城民に対する凌辱を見ただろう。最早我々に残された時間は少ない、手段など選んではいられないのだ」
瀑^{はくあ}？が目を離している隙に強張った頸を傾け全員を見渡すと瀑^{はくあ}？を含めた三人の甲冑は所々破損して血のようなものが付着し、それぞれの顔は月光で陰影が現れるほどに瘦けているようだった。

しかし、と瀑^{はくあ}？の後ろで腕を組み顎鬚^{あごひげ}を蓄えた大男が快活な声を出して笑った。

「まさか本当に雛龍がこの地に降^{くだ}邦^{ほう}しているとは思ってもよらなかったぞ。俺達は悪運が強いようだ。まったく、一月森を探し回った甲斐があつたというものだ」

「ああ、この地を離れる前に捕えることができてよかった。匡鉄^{きやうてつ}、大手柄だ」

どうやらこの者達は以前から彼を狙っていたようで、あの街に何らかの関わりを持つものようだ。

瀑^{はくあ}？は彼に向き直り胸の前で手を組み合わせて拱手^{こうしゅ}した。

「事態は急を要す故に、正礼は御赦免下され。神祖しんその御子みこに対しこのような無礼、本来ならば赦されるものではないことは重々に承知している。だが今の我々にはあなたの力がどうしても必要なのだ」

どこか高圧的な声と態度に彼はお願いされているのにも関わらず怖気づいてしまった。無礼も何も彼にとってこの男達は単なる野蛮な人間である。力を貸すどころかこの場から逃げたい一心であり、頼まれごとなど請け負うはずもなく必死に目を逸らそうとした。

答えない彼に対し瀑？はさらに、

「……雛龍ならば、あの毒程度なら声ぐらいは出せるはずだ。そうだな、名は何と申されるか。私は彰国第三軍将帥しょうこく だいさん ぐん しょう、瀑？はくと申す。これらの者は私の配下と私と志を等しくする者達だ」

優しさの裏に押し迫るような気迫を孕む声は、狼狽した彼に強迫観念を植え付けるのに十分な威力を有していた。そして沈黙が続く。瀑？は無理に笑んだような表情を全く崩さずに彼の返答を静かに待っているようだった。

睨み合ってどれくらいの時間が経っただろうか。恐らくちよつとした間なのだろうが、彼にはとてもその張り詰めた間を耐えられそうになく、ついに折れてしまった。

なんとか目を逸らし、震える小さな声で、

「……子琳しりん」

と、精いっぱい力を振り絞って答えた。

瀑？はそれを聞いてわずかに口角を押し上げ微笑をつくり、再び拱手した。

「あいわかった。では一先ず、我々と共に高鮮こうせんまで来てもらうがよろしいな」

高鮮とはここから一番近い城塞のある地名であるが、彼 子琳は知る由もない。

そんな所へ行きたくはないと首を横に振ろうにも、瀑？の冷たい目がそれを制した。

子琳は彼等の甲冑に染みついた血の臭いが怖かった。そしてこれから何をさせられるのかという不安から手足が痙攣したように震える。さっきまで安全な場所で傍観者でいた自分が、一転して頸元に刃先迫る被害者になってしまう事にある種の無常を感じたことだろう。

頸元に揺らめく切れ味の良さそうな短刀。斬られれば痛いはずだ。自分を利用して用が済めば殺すだろうか。ここで拒めば殺すだろうか。あの冷徹な笑みは何か裏があるのか。

などと、あらゆる不安が走馬灯のように頭を巡る傍らで、ある一つの事実に気付く。手足に感覚が戻り始めてきたのだ。元々龍は、毒というものにある程度の耐性がついている。その生物を超越した肉体は、毒を体内で無毒化してしまうからだと言われているが定かではない。龍自身すらよくは知らないのだから人の知る限りではないだろう。

動かなかった指を彼等に気付かれぬように屈伸し、次の行動への精度を確かめた。

いける。

脱出への希望が湧く。だがその為には彼等の隙が必要となったが、いずれも歴戦の熟練者と見え一向に隙を見せる様子がないどころか、要らぬ行動をとれば女子供でも容赦なく殺してしまいそうな、そんな殺気に漂っていた。それは彼等の追い詰められたような表情からも窺い知ることができ^{うかが}る。

子琳は思うように動かない身体で隙など作りようもなく、ただ外界からの奇跡を願うしかなかった。

瀑？はすつくと立ち上がり脇の男に、

「よし、長居は無用だ。発つぞ、雛龍を縛れ」

と、さっきの笑みなどなかったかのように命じ、

そしてそのまま導かれるように突出した崖の先端に向かって、眼下に広がる建恭の惨憺たる光景を見下ろした。

軍声は止み城外には勝利の歓呼がこだましている。

突然、瀑？は息を大きく吸い、どこからそんな大声が出せるのかというぐらいの大きな怒声で叫んだ。

「見ている！成^{せい}の畜生ども！建恭の民の無念はこの瀑？が必ず晴らす！この屈辱、決して忘れはしないぞ！建恭の民よ、これが誓いの印だ！」

声は憎悪に染まり、暗黒の山間に何度も響く。そして、短刀で髪を切ると、それを紐で括り城邑へ向かって放った。髪は風に乗って森へと落ちてゆく。

あつけにとられた子琳がほかの男達の顔をよく凝らして見ると、大人げなく泣きながらこれに頷いていた。

ある者は唇を噛み千切らんばかりに齒を食いしぼり口元から涙と血を垂らしている。

その時、子琳はその泣いている男達を見て、心にふつと判別し難い感情が沸き起こった。状況はよくは呑み込めないが、彼らは今必死に抗おうとしている。憎しみに燃えている。滅びようとしている。ただそれだけなのに、全く関係のない者たちなのにどうしてこんなに心が揺れ動くのだろう。

だが、腕を後ろに回され縛られそうになって、はっと我に帰った。こんな奴らに関心など寄せてはいいけない、早くなんとかしなければ脱出が困難になってしまう。

その時、崖の近くにいた男達の一人が崖下を指さし声を荒らげて叫んだ。

「成軍が森に入ってきたぞ！」

男達が一斉にその指さす方向を見ると、城から少し離れた場所から、暗黒の森の中に揺らめく松明の群がこの岩山へ蛇のように列をなして向かってきているではないか。おそらく千はくだらない大人数である。予想外のことであったのか男達は見るからに動揺し、慌ただしく立ち上がってこの事態にどう対処するのかを半ば怒声混じりに話し合い、ついには激しい口論となった。

聞くと、こんなに早く敵が動くとは思っていなかったようで、そしてなぜ自分たちの場所が知られたのかわからず、誰かがこの中に内通者がいるのではないかと言った。しかし、瀑？がそれはないと叱咤する。

次第に男達の意識はこの小さな子供から岩山の下に迫りくる松明へと移り、子琳に突き付けられていた短刀はすでにその刃先を見失い空を揺らめいていた。

子琳はこの機を見逃さなかった。隙を見計らって縄が縛りかかった腕を振りほどき前に右肩から倒れこむと、感触の薄い左腕を必死に動かし填めた指輪の珠を汗ばんだ額につけた。縛ろうとしていた男を除き、男達は議論に熱中してその動きへの認識が一瞬遅れる。男達の心の中でわずかに子供と油断していたことが災いを招いた。この少年はただの子供ではない、龍なのである。だがその行動を視界の端に捉えた瀑？だけが、何が起ころうとしているのかを瞬時に悟る。最悪の事態が起ころうとしていることを。

先に叫んだのは瀑？ それは瀑？の将帥としての本能が最善の行動を直感的に導き出し、舌を弾いたのだらう。大喝の如き一声。

目を閉じる！！

それは命令であつた。

そしてほぼ同時に子琳が恐怖でワナワナと震えてうまく出ない声を必死に絞り出して、地面に吐き捨てるように術句を唱える。

「汝、コリン憧苑を求むるか。汝、天啓に應えるか。龍の名の下に於いて其の真理を問わん。

こころをたずねる
「微憬招来！」

言い終わるや否や、子琳の周りの地面に青く太い光線が現れ円となり、内側に四字の象形文字が浮かび上がった。そして円を中心に空気が巻き込まれ渦を起し、円から漏れる青い光線が束となって螺旋状に子琳の身体を柔らかく包みこんでゆく。

まばゆく、かつ温もりに満ちたその光は岩山の頂を青く染め、街の高所で紅く燃え猛る炎と対照的な色合いを醸し出し、光が混じりあう天空に淡い赤紫を浮かび上がらせた。

次の瞬間、子琳の周りにいた男達は温い湯に浸かっているかのような感触を覚える。心地の良い温もりが、甲冑と皮膚を突きぬけ心まで染み渡るようにじんわりと包み込み、どこからか立ち込めた百花の艶やかな薫りが彼等の心の緊迫を優しく解きほぐす。

瀑？の言う通り彼等は目を閉じていた。瀑？の日ごろの統率のおかげとも言つべきか。彼等は周囲を視認できないものの、自分達の周りが一瞬にして今までとは違う空間に変わったということはなんとなくわかった。いや、変わったというより自分の精神がその空間を五感ではないもので知覚しているような感覚に陥り始めたといふべきだろう。

青白いような光が辺りを取り巻いている。次第に互いの声は遠くなり、個々人の気配すらついにはなくなった。まるで一人がぽつんと知らない場所で無防備に立っているような感覚だ。聞こえるのは小川のせせらぎと、聞いたこともないような美声で鳴く歌鳥の囀り。

孤独感、焦燥感は微塵も感じない、むしろ充足感で心身ともに高揚していた。

何度も目を開けて眼前に広がる情景を見たい衝動に駆られはしたものの、武人である彼等は必死に歯を食い縛って耐えた。見れば、取り返しのつかないことになりそうな気がした。

数十秒の永遠とも思える誘惑の時が過ぎ、周りの音が段々と青い光に混じって離れてゆく。そして離れゆく音に反して近づいてくる雑音、最初はなんなのか瀑？を含め誰も分からなかったが、次第に雑音が人間の唸り声のようなものになった時、瀑？は軽く舌打ちをする。その奇声はさっきまで隣にいた仲間の悲鳴にも似た絶叫だった。

立ち込める花の香りが風に掻き消されて、皆が恐る恐る目を開けると、さっきまでそこにいた仲間の一人が屈みこんで身体を震わせ悲鳴をあげていた。

「黄起！」

「待て！」

近寄ろうとする他の者を瀑？は制す。そして、

「孔淵、早く雛龍の身動きを封じろ！雛龍は堕とした人間を操ることができる！」

その言葉は、子琳に短刀を突き付けていた男に向けられていた。孔淵と呼ばれるその者は即座に事態を把握し子琳の結った黒髪を掴んで無理やり引き起こした。

僕を……助けてっ！

うづくまる男の絶叫はうなり声へと変わり、頭部からは黒い角が頭皮を突き破ってその尖端を露わにしていた。この時点で、黄起と呼ばれていた男は四肢で地面に立ち、一本の角と五つの尾を生やして、破り捨てた服の隙間から赤黒い体毛が皮膚を覆っていた。耳まで裂

けた口元からは血で赤濡れた牙がはみ出している。最早この生き物を人間というには些か無理があった。

「??だ!」

と、誰かが叫ぶ。？とは豹に似た、一角と五本の尾もつ獣である。かつて人間だったものは雄叫びをあげると、筋肉が委縮し限界まで膨らんだ後ろ脚で芝の地面を蹴りあげ、甲冑をつけたまま一直線に子琳を押さえようとする男の方へと突進し、その頸に鋭い牙をたてて食らいついた。

抗う術なく、孔淵は口と頸から血を噴き出し声にもならぬ声をあげて、どうと後ろに押し倒される。

鮮やかに噴出した血液は側にいた子琳の白い肌と装束を真っ赤に染め、黒髪を濡らした。初めて見る他人の血に子琳は酷く狼狽^{うろた}える。が、悲鳴をあげようにも声は喉もとで停止し言葉にならなかった。そして血独特の鉄のような臭いが彼の思考と理性を減摩し、すぐさま孔淵の頸を齧^{かじ}る獣に他の男達を襲うよう心の中で命じた。

もう自分の助かることしか考えることができず、息を乱し結われた髪を振りほどいてただこの惨劇が早々に終わることを切に願った。元はと言えば彼等が無理やり自分を捕えようとしたからこうなったのだ、非は相手にある。自分は間違っていない。そうだ彼等が悪いんだ。そう心に言い聞かせるのに精いっぱい、瀑?がすでに脇から剣を抜いていることなど見えていなかった。

そして?が腰を抜かして動けない男に飛びかかるうとした瞬間横から飛び出した瀑?の剣が一閃の半円を宙に描く。その一閃でかつての人間は空中で頭から真っ二つになり、残骸が地面に散乱した。ついに子琳の脱出の手段はここに断たれた。

全身を使つて呼吸をし、空気を吸おうとするが上手く吸えない。しかも腰が抜けて膝を立たせようにもうまくいかず、まだ感覚の確かでない腕で地面を這つて逃げようとした。

彼等の仲間を間接的にも殺したのだから、どんな仕打ちが待っているのかは想像に難くない。

殺される。

逃げなければ殺されてしまう。どうにか、どうにかして。

一方、瀑？は血の滴る剣を持ったまま立ち尽くし、痙攣した残骸を見るわけでも頸から血を流して事切れている者を見るわけでもなく、ただ視点が定かでない目で俯いていた。

匡鉄きやうてつはそんな瀑ばく？を後目に剣を勢いよく引き抜き、怒髪天どはつてんの形相を露わにして叫ぶ。

「小童、よくも黄起と孔淵を！八つ裂きにしてくれるわ！」

匡鉄がたじろぐ子琳に向かつて飛びかかろうとした矢先、またしても瀑？がそれを制した。今度はより恐ろしく冷たい眼で。

匡鉄はその威圧に気圧され、やがて深い溜息を吐くと空くうに浮いてやり場のない剣を遣る瀬無くおろした。

子琳はその間にも血で濡れた髪をかき上げ、肩まで肌蹴た装束もそのままに必死に這つてどうにか子供一人通れそうな岩窟に身体を放り込もうとする。

しかし、瀑？の血に塗れた剣先がその眼前を遮った。血の滴る間の刃に自分の恐怖でひきつった顔が映る。今まで見たこともないような強張った表情をしていた。

瀑？は怯えて前方の一点を見たまま硬直する子供の目線まで腰を落

とした。否応なく目が合う。瀑？の顔は怒りを必死に押さえているようであった。眉間に寄った皺がさつきよりも深くなり増えている。

「子琳……非は我々にあるとはいえ、再びこのような行いをすれば神祖の御子でも私は斬らねばならぬ。そのような事を私にさせないでいただきたい」

子琳は頷くしかなかった。心臓の鼓動は嗚咽のような呼吸と同調し、今までにないくらい早く打っている。どうすることもできなくなつた時、人 いや、言葉をもつ生き物ならば、ただ情に訴え謝ることをする。彼はそうだった。

「ごめんなさい……！ごめんなさいっ！」

子琳は謝った。謝って済むものならと、瀑？の顔を直視せずひたすら助命を請うた。涙と鼻水と血でべとべとになった顔を動かし、泣きじゃくって言葉の体を成していないような声で謝った。だが最期まで頭を下げなかったのは雛龍としての残された僅かな自尊心によるものだろう。

瀑？はその様子を見て少し困つたような顔をし、小さな溜息を一つ吐くと血濡れていないほうの手を子琳の頭に優しく乗せた。

「我々が手荒過ぎた。こちらこそすまない。だが今の我々にはこのような手段しかなかったのだ、申し訳ない」

謝罪の言葉を聞き、自分を殺すことはいらないということがわかつた瞬間、ふっと緊張が解け、安堵からさつきより増してぼろぼろと涙が止めどなく溢れた。そして、必死にしゃくりみたい呼吸を平常に戻そうとして鼻水を拭い、瀑？の顔を涙で霞む目で一瞥した。涙で腫げた顔には、さっきまでの威圧感は無かった。だがまだ何か厳しいものを感じさせる。

「ぼっ……僕を……どう、どうするんですか……」

やっと呼吸を整えて喋れたのがそれだけだった。そう、まだ聞いていなかった。これから何をさせられるのか、なぜ雛龍を使うのか、と。

「瀑?!来るぞ!」

匡鉄が急かすように岩山の下を見て叫ぶ。松明の群は今にも三豊山の麓に迫りそうな勢いでゆらゆらと近づいている。もう一刻の猶予も許されない状況、取り囲まれれば脱出は非常に困難になるだろうことは明白である。

「すぐに終わる。韓泰は黄起と孔淵の屍をその岩陰に隠し血痕には砂をかける。匡鉄は先に降りて馬を整えてくれ」

匡鉄が渋く頷き縄梯子を勢いよく降りてゆくのを確認すると、瀑?は向き直り息を正して、建恭の街を目を細めて見やって言った。

「……見ての通り、彰はこの体たらくだ。他国の侵入を許すほどに国の威信は衰え、度重なる戦による徴兵と輜重の徴発で彰の民は疲れ果てている。徴発で冬の食糧すら満足に賄えない者がほとんどだ。政に絶望し、墮ちる者も日に日に増えていると聞く。戸籍を捨て他国に逃亡する者も多い。だが今の彰王、顕竜王は登極間もないのだが国も民も顧みず、毎晩後宮に入り浸り酒色に更け登庁もほとんどしていない」

子琳は、とりあえず頷く。瀑?は少し急ぐように続ける。

「拳句に、王に寵愛を受ける奸臣が王宮にのさばり、自らの私腹を肥えさせるためだけの専横を行っている。要するに、彰はこのままではこの建恭のような惨劇が国中に広がることになりかねんだ。かつて天下を手中におさめたこの国がそうなるのはあまりに不憫で耐えがたい。だから私は決意した。宮中に跋扈する魑魅魍魎と諸悪の根源を取り除き、新たな王を据え再びこの東璃に彰の名を轟かせ

ると」

よくはわからないが、自分を使って彰をよくしようと思っていることがなんとなくわかった。だが、龍を人間の揉め事に利用するなどあまり聞いたことがない。

「しかし、今の我々では反乱を起こしたところで鎮圧されるだけだろう。……悔しいが我々は非力なのだ、だからどうか」

そなたの力を貸してほしい　と瀑？が頭を垂れようとした時、

突然地上を青い閃光が一瞬照らし、巨大な轟音と共に天空から青い円筒状の光が麓の森に落ちた。

青天の霹靂、一瞬の稲光。光は地上にぶつかりと四方八方に拡散し、森の四半を呑んだ。その間も青い円筒はその円周を維持したまま天空から伸びている。

瀑？と側にいた男は啞然としてその異常な光景を見ていた。そして側の男が、空へ問うように叫ぶ。

「こんな場所に^{shock}激恍が落ちるとは……！建恭の民の願望が招いたか……！」

紫色の雲の割れ目から青白い光が地上に降り注いでいる光景は、男達だけではなく子琳の心すら奪った。

民の願望が招いた、確かにそれもあるかもしれない。しかし、子琳の見解は違った。

予兆　そう、これから起こるであろうことを暗示しているのだと思えてならない。誰が？いや、誰でもない。しかし、示している。この場所から何かが、光の幕を開けて始まるうとしているのだと思った。いや、むしろ信じ込もうとした。

綺麗。

何の省みもなくするりと言葉が口が出る。涙で濡れた眼はひたす

らその情景を取り込もうとし、彼の意識に反して瞼を開け続けた。感情は昂り、喜びで心は満ち溢れ、枯渴を知らない涙腺からは涙が湯水の如く湧き上がる。瀑？らも同じであった。悦びで胸が張り裂けそうになりながら涙が無意識に溢れる。

「美しい……」

瀑？は呟く。さきほどまでの憎悪の中にまだこんな感動を起こせる感情が残っているとは思ってもみなかった。

森からは悲鳴と歓喜の雄叫びが合唱し、共鳴し、交響した。阿鼻叫喚は光に包まれ、遂にはピタリと失せる。

子琳は次第に消失してゆく意識にすら気付かず、目を見開いたまま座し、そのままぐらりと頭を揺らすと前のめりに倒れ気を失った。最後に眼に映ったものは、光から飛び立つ数匹の羽の生えた生き物。

そして、子琳は微かに笑んだ。

綺麗。

《?》

（後書き）

> i 6 4 5 2
— 1 0 4 2 <

兌を抜けて　　〈？〉

綺麗な場所だ。

体中がぽかぽかと温かい。

ふと、どうして自分がこんな所にいるのかと疑問に思おうとする。しかし、すぐにそれは頭からふわりと融解し消えていった。

夢であれ現実であれ、ここはきっと知っている場所だ。そう、なぜならとても懐かしい気持ちができるから。

しかし、不鮮明な記憶を巡らしてもこんな風景見たことがあるとは思えない。少なくとも、この風景が現実には存在するとは到底思えなかった。それほど浮世離れた風景だったのである。

ここはどこだろう。

辺りに意識を集中してみると、^{おぼろ}朧な風景の枠線が鮮明になってきた。地平線まで続く地面にはパレットをそのまま置いたかのような色とりどりの花が隙間などないようにその花卉を見せびらかし、高山にありそうな白い雲霧^{うんむ}の塊りが、風に乗って地上を揺らいでいる。そして発色が鮮やかな青の翅^{はね}をもつ手のひらほどの大きさをした蝶が、何匹もゆらゆらと花園の上を思うがままにはためき、ときに花卉に止まっては花の内側に溜まる甘蜜を吸っていた。

そして、視界に入ったあるものを見て少し違和感を覚える。花の中に点々と間隔をあけて根を張る、大樹。それらは太い根が大蛇のように地面でうねり、どれも濃い緑をした葉を存分に繁らせている。

だが、不思議なことにその大樹の空^{うつろ}から水が滾々（こんこん）と湧き出て、根の下の空間に小さな池を作っていた。

池から溢れ出た水は小さな川となり、やがて他の大樹からの水とも合わさり川となって花の間をさらさらとどこかへ流れてゆく。それを見て、いよいよここが現実ではないなと思った。しかし、それもすぐに溶け出してゆく。なぜかすんなり受け入れてしまうのだった。

ふと、蝶の中に一匹、紫色の翅をもつ蝶がいるのに気付く。その

まるで誘うように優雅に羽ばたく蝶をぼんやりと目で追ってゆくと、何もない平坦な花畑の間に隠れた石畳の小道が、向こうでこんもりと盛り上がっている丘までうねうねと敷かれているのを見つけた。丘の上には小さな森ができており、梢の間から尖った建物らしき屋根の先端がとび出ている。

蝶は、そのまま高度をあげてゆく。天には地平線に沿って茜色の夕空がじんわりと真つ青な空に染み出し、その淡い色をした紫の境界を見たこともないような青い鳥が編隊を組んで遠くの空へ飛んでいった。

さらにまばらに散らばる綿雲が陽の光を取り込み、淡い明暗を浮かび上がりせ神々しい荘厳さを醸し出している。

蝶は、自分の気に入った花でも見つけたのだろうか、ゆっくりと下降し雄しべの垂れさがる黄色の花にとりついた。穏やかな風が吹いて、蝶と一緒に花の頭（うぶ）が大きく揺れる。

風は、吹く度に風向きを変え、様々な花の香りを運ぶ。今の風は、甘いミントのような香りだ。

とりあえず、あの丘の建物のほうへ行こうと思い、花を掻き分け石の小道に乗った。そして、乗ったところで自分が純白の衣（ころも）を纏い裸足であることに気付く。が、これもまたなぜかすんなり受け入れた。

小学校の廊下のような幅の小道を歩き始め、少し経たところでいつの間にか歩幅は広がり、歩みも早くなる。身体があそこに行きたがっている。無論、心もだ。そうやって自分の行動を客観的に見てしまっている自分が少し可笑しかった。

近づくにつれて懐かしさで胸が詰まりそうになる。見たこともない景色なのに、何故なのだろう。それを知りたいという好奇心も歩みの速さに拍車をかけた。

そして、いつしか丘の下に辿り着く。白石の階段がなだらかな傾斜で坂に敷かれ、階段の脇の溝には上から水が流れており、水の弾ける音がとても心地よい。

一つ呼吸を整え、丘の上目指し一步一步、段を登ってゆく。その一段の度に心が昂っているようだった。丘の上に着くと小さな門があった。中国にありそうな装飾の門には扁額へんがくがかけられ、「華池」とある。気にせず頭を少し下げて門をくぐると中には庭園が広がり、その中央に花畑に生える樹とは少し違った大樹が大きな園池えんちの周りを取り囲んで、これまた空から水を流し池に注いでいた。池の真上には天を覆い隠さんばかりにその手を伸ばす枝に若葉が茂り、その葉の隙間から空の光がやわらかく差し込んで、水底に乱反射して仄かに明るくし幻想的な雰囲気を作り一層引き立てている。

その池の真ん中には、美しい朱の塗装が施された東屋あずまやが孤島を土台に建っており、門から向かって右の岸から石の橋が渡されこの孤島へと繋がっていた。池の水は驚くほど澄み、水底にはみ出す大樹の根が複雑に絡み合っているのがはっきりと見てとれる。

その根の間を紅色べにいろをした鯉のような池魚ちぎょが住処にし、紫の甲羅をもつ亀が手足を器用に動かし水底を這う。池の側まで近寄り、この愛嬌のある生き物達の動きをぼんやりと眺めていた。

大樹から湧く清水の流れる音と、枝にとまり囀さえずる鳥の美しい鳴き声は昂った心を平穏にし、現実のことを忘却させ、もはやこの住人であるような錯覚と帰りたくないという願望を心にわき起こす。

永遠にここにいらればいいのに、と時間も忘れこの素晴らしい環境にゆったり浸っていると、ふと耳に自然音とは違うものが入った。最初は気にせずにいたが、だんだんとはっきりと聞こえてくる。その音がなんなのか、蕩とろけそうな頭は少し間を置いて理解する。

人の声。わかった瞬間垂れていた頭をあげ、辺りを見回した。すると、さっきまで誰もいなかったはずの東屋に人影があるのに気付く。人がいるということの驚きと、ここがどこなのか教えてほしいという欲求が混じり合った気持ちで、その人影を注視した。人影は女の子だった。線が細くほっそりとし、自分と同じような衣を纏って肩まで伸びた黒髪が風にふわりと靡いている。横を向いているので顔はよくわからないが、静かに佇む姿はとても佳麗で、心

惹かれるものだった。

千里^{せんり}……。

自分の名を呼んでいる。この声色は女性だ、あの女の子だろうか。しかし彼女はこちらを向いていない。空を見つめるようにただ一点だけを静かに、寂しそうに見ている。

千里……こ。

何かを自分に言っているようだがうまく聞き取れない。とにかくこちらの方を向いてもらおうと手を振った。しかし一向に気付く気配がない。仕方なく声を出そうとした時、突然辺りが急激に暗くなった。空は照明を落としたかのように暗くなり、星すらない全くの闇になってしまった。女の子の気配も消えた。流水の音も、鳥の声も消えた。

途端、地面の感覚がなくなった。一瞬にしてさっきまで足元に茂っていた草木と土が消えたのだ。そのままどうすることもできず闇へと転落してゆく。闇の中へ……闇の底へ……。落ちてゆく刹那、この濃厚な闇の中に、さきほどの紫の蝶が小さな光を発しながらひらひらと舞っているのが見えた。

でももう手の届かないところにいる。手を伸ばしても、光に触れることすらできない。

意識は遠くなつてゆく。だんだんと、闇に溶けてゆく。

兌を抜けて へ？へ（後書き）

お疲れ様でした。

もしかしたらわからない言葉があったかもしれないので、簡単に解説します。

扁額

門の上に飾る看板のようなもの。建物の名前や、地名をこれに記す。

空^{うつろ}

木の幹に空いた窪み。鳥などがこの穴に入って巣を作ったりする。

東屋

庭園などに設けられた、休憩用の建物。写真を見るとわかりやすい

題の兌は、あなと読みます。

落ちてゆく感覚がなくなり、温もりの感触が身体を包みこんだ。重たくべた付いた瞼を静かにあげると、ぼやけた視界に広がるのは見慣れた場所、自分の部屋だ。温もりの正体は自分の布団ゆめまほうし。気付くまでもなくここは現実だと悟り、同時にあの情景は夢幻ゆめまほうしだったと思ひ知らされ、深い喪失感に心をぎゅっと締めつけられた。まだ花の残り香があるような気がして布団にもぐりこむ。しかし、何の甘い香りもしない。

紺色のカーテンからは朝の陽が差し込んで、まだ新しい小さな壁掛け時計を照らしている。針は光に浮かび、ちょうど七時を指していた。しばらくじっとしていたが、やがて小さな溜息をつき目をこすりながらカーテンを開けた。瞼に焼きついたあの情景が窓の向こうにも広がっているのではないかという期待を抱いていたが、外にあるのは隣の家の薄汚れた壁と室外機だけだった。ここでまたわざとらしい溜息をつきながら、窓を開ける。新鮮な空気が部屋に入ってくる。しかし、夢のものとは全く非なるものだった。

階下からの朝食の匂いが部屋に入ってきて空腹感を呼び起こした、そして今日が登校日であることを千里に思い出させる。

制服に着替えて、学校へいく支度をいそいそと始めた。制服のネクタイを締め、鞆に教科書を詰めると、半開きの引き出しに服が無造作にかけられたタンスに飾ってある日に焼けた写真を見た。昔に遊園地で撮った家族の写真、笑顔で映るこの四人のうち、もう二人はこの世にいない。

「母さん……いつてくるよ」

いるはずの人がいないガランとしたリビングには、年の割に少し老けてしまった父がテーブルに座って静かに朝食を食べていた。三つ空いた椅子のうち家族で決めた自分の席に座る。

ご飯と、味噌汁と、ありあわせのおかず。父の料理は以前よりうまくなったが、まだ母の腕には及ばない。しかし、毎日休むことなく朝食もさらには学校への弁当も作ってくれる父には感謝していた。その父が今日は無言で朝食をとっている。新聞を読みながらいつもは食べているのに、それを脇に置いて黙々と箸を動かしている。何か嫌なことでもあったのかと、少し変に思いながら箸をとり、まずご飯に手をつけようと茶碗を手にしたとき、父がぱしりと箸を置いた。しんとした空気が食卓に流れる。

「……どうしたの？父さん」

父は渋るような面持ちのまま俯き、やがて小さな決意をしたかのようになり出した。

「千里……、もう母さんが亡くなって五年だ。そろそろ、新しい家族をもってもいいと思うんだ」

何事かと、目を見開いて父を見つめる。眼鏡を軽く押し上げ呟くように言う父は、どこかいつもと違う雰囲気を感じていた。

「なんなの？藪から棒に」

「お前ももう十六だ、母親の助けもいるようになるだろう」

「……父さん、それってどういうこと？」

突然の話に、千里は持ちかけた碗を手から落としそうになった。母は五年前、癌で家族を残しこの世を去った。そのあとしばらく父と妹と三人だったが、その妹も二年前に交通事故で死んでしまった。それから今まで、父と二人だけでこの広くなった家に住んできたのだ。それから今日まで、そんな話は一回も出たことはなかった。できるだけ、その部分には触れないように生活してきたのだ。父は深い溜息をつく。

「千里……父さんもな、ずっと一人身でいるわけにもいかないんだ。今、会社で籍を入れようかと思っている女性がいる。父さんより八つ年下で、子供がいてもいいそうだ」

父は今三八だったはずだ。それより八つ年下ということは相手は三十歳、母さんは三十歳で死んだ。何か体中に不自然な違和感が走る。

持った箸は無意識な手からこぼれ落ち、食卓に転がった。

「そんなの……聞いてないよ！」

バンと立ち上がって父をにらみつける。父は目をわずかに逸らした。

「千里……！座りなさい！」

「母さんがいるのに……、なんでそんなの勝手に決めるんだよ！」

「母さんはもういない！」

「……っ！」

父はまた溜息をついた。

「……いいか、千里。お前に話さなかったのはすまないと思ってる。お前が怒るのも無理はない。……でもな、父さんはその女性^{ひと}を愛しているんだ。その女性^{ひと}と新しい家庭を築いていきたいと切実に思っている」

今更新しい継母なんて思ってもみなかった。いや、自分を産んだ母に取って代わる母なんていない、例え手の届かないところへ行ってしまったとしても、他の人間にその場所に居座られるのに強い拒絶感があつた。母さんは母さんだ、絶対無二の存在。なのに、父は他人をこの家族の中に勝手に組み込むのか。急に父が遠い存在になったような気がした。

それで、言いくいんだが　と、父は目を落とした。

「実はな、その女性^{ひと}との間で……子供ができたんだ」

耳を疑った。全身から血の気がひき、背筋の温度が一気に下がったかと思うと、すぐに熱い血が蘇って全身を巡る。死んだ母さんと妹にこのことをなんと釈明すればいいのだろうかと、動揺して真っ白になった頭で必死に考え始める。時が止まったのではないかというような沈黙をリビングの時計は無常な針音とともに押し進ませる。そして、父は手を組んで、再び眼鏡を押しあげた。

「……妊娠四ヶ月だそうだ」

この目の前にいる人間を侮蔑の目で見始めた自分がいた。父は家族を裏切った。そして怒りで脚がぐくぐくと揺れだす。それと同時にある不安が憤怒の心を覆った。自分の居場所がなくなるのではない

か。

「……どうなるの？僕はどうなるの？」

裏切りへの怒りから声が震えた。本当に人は怒りに満ちると身体が震えるのだ。食卓に並べられた食事が急に不味いものに思えた。こんな自分勝手な人間の作った飯なんて、食べられるわけがない。

「もちろん、一緒にこの家に住めばいい。お前はこの家の住人だ、なんの遠慮をすることはないさ。新しい継母かあさんを本当の母さんだと思えばいい。大丈夫、あの女性ひとは優しい人だ。お前を本当の子供として接してくれるよ」

そうじゃない　と言いたかった。母を奪われ、妹を奪われ、父まで奪われるのか。と深い失望感が怒りの坩堝るつぼに注がれる。できるならこのままでよかったのに。これ以上奪われるのなら、父と二人だけでよかった。

「今日、その女性ひとが家にくるんだ。会ってくれないか？たぶんお前もわかってくれるはずだ」

何を　と叫ぼうとしたが、急に体中の力が抜けていった。大きく息を吐き、頭を垂れる。味噌汁の湯気が悲痛で歪む顔に当たった。鼻の頭が激情でつんとしてきた。その湯気のなかであの夢での情景がふっと思いだされた。

あまりに違いすぎる、現実と夢幻との格差ギャップ。あのままあの夢の中にいらればよかったのに。醒めなければよかったのに。なんなのだろうここは。

途端、机を握り拳で叩くと、そのまま半開きの鞆をもって駆け出した。呼び止める父の声も聞かず、玄関の戸を強引にあけて、走り出す。涙で、青天の下に広がる視界は曇り空のごとく淀んでいた。最悪な朝だった。

兌を抜けて　　〈？〉

学校の授業中もずっと、無造作にノートが広げられた机を見つめたままうわの空だった。

朝から胸がどきどきして苦しい。妙な圧迫感が体を締め付けているような感じた。

黒板に書かれている文字も目でなぞって眺めているだけで、認識なんてとてもじゃないができる状態ではなかった。ひどく精神が重たい。陽光差し込む教室では中年の古典の先生が、教卓の前でポケットに片手をつ込み漢文の書き下し文を少し眠たそうに読み上げていた。しかし、先生の太い声も千里の耳に入ってはすうっと通り抜けていって、ほとんど聞こえてはいない状態だった。

「……どうして……」

俯きながら隣の人に聞こえないよう声を籠らせ、吐くように呟く。父は、一体何を考えているのだろうか。彼にとって母は代りがきくような存在だったのだろうか。あんな優しくかった母に代りなんてきくものか。しかも、その女との間で子供まで作っていると、母や妹だけでなく今いる自分まで裏切ったということだ。自分勝手に、欲望のままに、家族のことなんて何も考えずに。大人のくせに、いつも我慢しろと叱るくせに。子供なんて生まれたら自分は必ず蚊帳の外になるだろう。家に居ながら、一人だけ居候のようになる。そのうちまるで自分が家族とは他人のようになるのだ。そんなこと、絶対に嫌だ。母さん達と過ごした家を他の奴にとられるわけにはいかない。どうしよう、どうしてやろう。行き過ぎた使命感のような感情が跳躍力となり、まだそうとは決まっていない未来に対して臆測で怒っている自分にはその時気がついてはいなかった。

机に広げられた真っ白なノートに、口からでた鬱憤がもくもくと降り積もる。ふと、凝視していた白いノートにあの夢の風景がぼん

やりと浮かんだ。肩で驚き、顔をごしごし擦って強く瞼を閉じ再び眺める。今度は湖に浮かぶ園亭おすまやがうつすらと浮かび上がり湖面に蝶が舞う様子が見える。どうやら、今朝からの激情で精神的に疲れてしまったようだと頭を抱え、まだ新しい紙の香りがするノートの上に腕を枕にして突っ伏す。だが少し期待していた花の甘い香りはどこにもしなかった。首を横に動かし、腕の隙間から窓の外を覗いた。三階までその枝をぐんと伸ばす檜の木が陽の光を浴び濃い緑を呈して風に揺らめいている。あの園池の周りの樹の葉も光に当たって濃い緑だった。

そういえば、あの女の子……。

今朝の夢に出てきた女の子。顔こそはちゃんと見えなかったが、一体彼女はあそこで何をしていたのだろう。自分の夢の中なのだからそんなことを問うてもおかしいことだが、今の千里にはとても不思議で、興味があつた。だがその好奇心の源泉は現実から目を背けたい衝動からなのかもしれない。

とかく、あの女の子はあの美しい世界の住人なのである。あの世界の住人でいられる彼女に憧憬どうけいを抱いた。

天女だろうか、はたまた天使か女神か。さてよ、ふつうの女の子だつてこともある。だとしたらなんであんなところにいるのだろう。どこを見つめているのか、そして何故自分の名を呼んだのだろう。あの花園は彼女の庭園にわか。空想は空想を構築し、妄想が頭の中で次々と夢の世界を築き上げていった。空想は段々と理想となり都合のよい美しいものへとその実体を鮮明にしてゆく。想像している間は心が自然と落ち付いていた。

「瀧本君」

名前を呼ばれてびくつと首を戻した。

「は、はい」

驚いて声が少し裏返り、静かな教室の小さな笑いを招く。

「気分でも悪いのか。保健室いくか」

先生はうつ伏せになつてる自分を寝ていると勘違いし半ば冗談のつ

もりで言ったのだろが、事実、気分は最低であることは間違いない。妙な恥ずかしさと今朝からの怒りも相まってきつぱりと即答する。

「はい、いきます」

先生は少し驚いた様子だった。反抗しているとられても、もうどうでもよかった。鞆をもつてすつくと立ち上がり、とことと教室から出てゆく。ざわめく教室の中で、静かにしなさいという先生の声が静かな廊下に響いた。

クラスでは目立たないほう、というのが自己の見解だ。母さんが死ぬまではクラスでもだいたい三番目に明るく活発であったことを覚えている。運動もできたし、毎日外に遊びに出て日が沈むまでみんなとわいわいやつて、母さんに叱られていた。しかし、突然の母親の死は、自分を深く黒い殻の中へと追い落とすものであった。しばらくは気丈に振舞ってはいたが、段々と母親がいなかったことの被害や他への妬みが自らも気づかぬうちに降り積もっていったのだろう。他人と関わるのがとても億劫になりはじめていた。そして、妹の事故死。かつての活発な少年は、どこかへと消えてしまった。目立たない方とは言ったが、友達もそれなりにいるし、付き合いもある。しかし、自分の中で何か薄っぺらいもののように感じていたのだ。た。

保健室へは行かず、そのまま靴を履き替え学校を出た。とてもじゃないが、学校にあのまま居たい気分ではなかったし、この怒りと悲しみで歪んでいる顔を他人に見せるのにも抵抗があった。といっても、女が来るという家に帰るわけにもいかず、初夏に入ろうかという青天の下に広がる広大な街をただ宛てもなく歩き始めるしかなかった。だがこの行動が、後の自分の運命を大きく変えることなど今は知る由もない。

日光がじんわりと肌に照りつくのとは対照に街を流れる風は爽やかな涼しさを街路に供給し、割と過ごしやすい気候であったので街をふらふらと歩きまわるのはさほど苦ではなかった。戦火を逃れたこの街はまだ古い街並みを所々残しており、少し歩くだけでも迷ってしまいそうな小路が幾つもあった。古民家のある街路とは別に、近くの山の中腹ほどには数年前から開発が行われている新興住宅地が立ち並び、いわば新旧交わる独特の雰囲気を作り上げていた。それはかつての市長が新故融合の街ということで計画していたらしい。その住宅地の一角に千里は住んでいる。街には高い建物はほとんどないし、交通の便もよく住宅地からは街が一望できるのですぐに土地は完売したと聞いた。学校はその新興住宅地の中に建てられており、築三年ほどしか経っていないまだ新築の臭いのする新校舎である。

千里はその住宅地を抜け、古い街路のほうへと歩いていった。目的地などない。強いて言えば、落ちつけるような場所に行きたかった。青い空に白い雲、木々の新緑に溝を流れる小川、まだ正午に至ってはおらず街を歩くのは年配の人か宅配便のおじさんだけ。その中を制服を着て歩くのは普通なら人目をはばかりたいのだが、なぜかその時は開放的で気分がよかった。

街の奥に入ってゆくにつれて次第に昔忘れて錆ついた冒険心が研磨されてゆく。好奇心の命じるままにわざと迷路のような小路に入っていきこうとした。時間はある、この先に何かがあるか確かめてやろう、という気持ちでわざと複雑そうな路へと意気高く進んでゆく。確か幼い頃は、この辺りの路地で鬼ごっこをしていたのを覚えている。あまりに路が複雑なため、何人かは途中ではぐれてしまい結局鬼ごっこを中断してみんなで迷った子の搜索隊を結成して遊んでいた。だが、そのうち鬼ごっこにも飽きてこの辺りには滅多に来なくなってしまった。

歩きながら過去の自分を路になぞってしみじみと思い出した。あ

の頃は無邪気だった。母がいたから無邪気でいられた。温かく守ってくれるものがいなければ子供は無邪気でいられないのかもしれない。と、一人で深い感慨に耽っていると、楽しかった思い出の端にある事件があつたのをふと思い出した。瑣末なことではないはずだが、何故か今まですっかり忘れていた。小学生のとき、親友がここで行方不明になった。行方不明とは言つても不思議なことだらけで、小学校では彼は神隠しにあつたのではと実しやかに囁かれていた。その理由の一つに、彼の履いていた靴が行方不明になった二日後に彼の家の玄関に綺麗に揃えて置いてあつたということが挙げられる。それだけではないのだが、それを聞いて当時は背中がぞくつとした。それから鬼ごっこはあまりしなくなったのかもしれない。

そうこう思い出していると、彼と最期にあつた場所に行きついた。標識も何もない民家の塀が囲む丁字路、ここで彼を見失つた。この先には行つたことがない、でも今は時間もあるし、仮に行方不明になつても心配する者なんてほとんどいないだろうと自嘲気味に思う。小さく頷き覚悟を決めて丁字路を彼が進んでいった右に曲がつた。ここから先は完全な未知なる路。

少し行つた狭い通路の脇には猫が気持ちよさそうに日向ぼっこをし、放置されている物干しざおには雀が羽を休めていて、かつて誰かが神隠しにあつたような暗い感じは全くしない。左右は民家なのだから人がいるのは当たり前だ、怖いはずはない。しかし、歩き回つた所為なのか背筋に汗が一筋流れる。

一方通行の路地を右に曲がり、左に曲がりしところで、少し開けた道に出た。そこは住宅地のある山を古民家群を挟んで反対側の山のふもとを横切る道であつた。こちらは全く開発が及んでおらず、古い民家が街で最も多く残る場所である。かつては街道であつたらしく、その面影がどこかしこに見受けられたが人影はほとんどなかった。山の裾であるため街道の脇には田園風景が広がり、道には木々の枝葉が屋根のように覆つてまばらな影を落としている。

こんな場所があつたなんて。と、冒険の結果が得られたことに一

応の満足をした。中心街の喧騒からは離れ、とても穏やかな雰囲気であるからか、千里の荒れた心に深く感銘を与えた。

そして、冒険に浸り意気揚々と進んでゆく。すると、街道に沿う小川を隔てた山の中に朽ちて苔むした鳥居が見えた。神社だろうか？中が見える位置までゆくと鳥居の奥には十段ほどのでこぼこした石段があり、その先には、錆びたジャングルジムとブランコが遊びにくる子供を待っているかのように静かに佇んでいる。無意識に、小川に渡された小さな石橋を渡り鳥居をくぐった。まるで何かに曳かれるかのようにだった。

兌を抜けて　　〈？〉

神社は山の斜面の窪んだ場所に建てられ、注連縄しめなわが捲かれた巨大な杉とともに本殿の裏からは神社を囲む高木の雑木林が急な崖に沿って天を覆うように枝葉を繁らせているため境内全体がぼんやりと薄暗くなっており、神を祭るに相応しい鎮守の森といえる神秘的な空間を作りだしていた。

青いペンキが所々禿げたブランコに腰かけて、辺りをぼーっと眺めた。竹林の葉の隙間から日光が差し込み少し大きな手水舎ちよつすやに溜まる水をきらきらと光らせ、境内に響き渡るくらいに可愛らしい声の野鳥が甲高く鳴き合っていた。この場所がどこか夢で見た風景と通じるような気がして、なんとなく嬉しくなり静かに目を瞑り夢の風景を頭の中で重ね合わせる。風が頬を優しく撫で、空間に穏やかな時間が流れる。誰も来るものはいない。俯いてブランコの下のすり減った地面を視点定まらぬ目で見つめた。そして大きく溜まりに溜まった息を吐く。朝から張り詰めていたものがゆっくりと解れてゆくような感じがした。

だがその時間もつかの間、突然石段をばたばたと上る足音が林のざわめきに混じって聞こえた。誰かが来る。階段を上りながら息を切らせる声は男の子のものだ。ここに遊びにきたのだろうかと考えると同時に、こんなところ見られたくないなという小心な心配を抱いてちらりとその姿を見た。

投げかけた眼の動作はそのまま停止する。

それと同時にカチリと思考が止まった。はあはあと汗を拭いながら石畳を小走りに駆ける少年の顔に千里は見覚えがあった。やがて止まった思考はすぐこの状況の把握のため急激に働きます。

そして見覚えがある記憶の行方をこちゃこちゃになった頭から探し当てた。

行方不明になった……

途端、頭の中に一緒に遊んでいた頃の忘れかけていた記憶が一気にフラッシュバックする。

一緒に鬼ごっこをして遊んだ、一緒にゲームをしていた、学校でいつも一緒にいた、そしてふざけて先生に怒られて一緒に泣いた、あの。

「翔しょう」

よく呼んでいた名前まで思い出して、ブランコに腰かけたまま目の前を駆けてゆく少年を眼を動かさず首で追った。

しかし、ありえない。もしこの少年が翔だとしたら自分と同じくらいの背丈であるはずなのに、翔と思われる少年は神隠しにあった当時の身長と顔つきのままだった。しかも、細かな刺繍かんさしが施された山吹色の装束を纏って右腕に腕輪をし、頭に髪を留める簪かんざしをつけている。今の日本でこんな格好をするとしたら祭事ぐらいだろうが、今日この辺りでお祭りなどはなかったはずであり、装束も日本にあるようなものとは少し違っていた。どちらかと言えば中国にありそうな衣装である。どちらにせよ、この少年がかつての親友と瓜二つであることに間違いはなかった。

少年はこちらを見ずに、本殿の裏へと駆けて行って見えなくなつた。千里はしばらく茫然としていた。眼の前でありえないことが起こったのだ。かつて一緒に遊んでいた親友が、そのまま彼の時間だけが止まっているような出で立ちで現れた。だが、他人のそら似である可能性も拭えない。急激に加速した思考は、その処理能力を超えたようで一気にこんがらがってまた停止してしまった。

しばらく前を見たまま自失していると、差し込む光に照らされさつき少年が通った石畳の上に何かがきらりと光っているものがあるのに気がついた。

ふらふらと腰をあげ、拾い上げて見てみると血がべっとりついた指

輪であつた。細かな銀の龍の彫刻が施され赤色の珠が填められている。さつきまではなかったということはあの少年の持ち物である可能性が高い。さらに、石畳の上の常緑樹の落ち葉に血が点々と続いていた。血のせいで填めていた指輪がいつのまにか抜け落ちたようである。

「大変だ、怪我をしているかもしれない」

鞆をそのままに、血の跡を追った。血は本殿の裏の雑木林に続いていた。

「おーい！怪我してるのか」

呼びかけてみたが向こうで小さく草木を掻き分ける音が聞こえるだけで返答はない。仕方なく、入って行つたと思われる細く傾斜が急な小道を上り少年の後を追った。

眺めのよい場所にある小さな墓石の前を過ぎ、誰かの小さな畑を通り抜け、ぶくぶくと空気が湧き上がる沼の側を通つて少年を必死に追った。何故か追いかけているうちに、少年の安否を心配するよりもこの機会を逃さんがために追いかけているような気がしてきた。あれはきつと翔だ、という気持ちが次第に心の躍動を大きくしてゆく。

やがて、五分かかつて周りに桃の花が咲き乱れる小さな滝壺の前についた。何故季節外れの桃の花が咲いているのか、という疑問は息をぜいぜいと切らす千里の頭に浮かぶはずもない。甘い花の香りがする。夢でも同じような香りを嗅いでいたような気がした。

血の跡は、入ってきた神社を見下ろすような場所にある滝壺の脇にぼうぼうと繁っている草木でできた小穴の前で途切れていた。枝葉がまるでそこに道を作っているかのように円筒状になって奥の方へとつづいている。高揚していた千里は咳を一つして喉を整えて意を決し、指輪を握った手について穴に入り込んだ。まるで長いこと忘れていた童心に還つたような心地で、迷いなくどんどん奥深くへと入ってゆく。

人一人やつと通れる小さな穴の先には光が見える。一体この先には

何があるのだろうか、という逸る好奇心で少年のことなど忘れそうになっている自分を顧みずひたすら進んでゆくと、中間あたりで穴の中の温度が少し上がった。不思議に思いながらも、解を導き出せそうにないので、気にせず進む。

ついに長い穴を抜けた。しかし、

出口に広がるものに淡い期待を抱いていた千里が、あな兄を抜けて最初にみたもの、それは

地面に無数に散らばる人骨だった。

やっと抜け出た穴の先は、木々に囲まれたなだらかな傾斜のある広場のような空間。刺すような太陽の光に思わず目を細めて掌で光を遮る。

細めた眼で何があるのか見ると、まず扇形のように切り開かれた広場の中央には微風に揺らめく桃の木が可憐にその優美な花を咲かせているのが目に付いた。空は穴に入る前より青く、どこか高く感じ、風は生温い。千里は穴の先に新しい未開拓の世界を想像していた。と言っても、あくまで現実的な想像のうちであり、現実離れたものは想定の外であった。心のどこかでは望んでいても、現実を思い知らされてきた千里はどこかでそんなものを否定していたのだ。だが想定外のものがそこには横たわっていたのである。桃の木の周りに散乱する白いもの、

人の骨。

開けた広場には倒木が何本もその巨体を横たえ、その隙間から新たな命を宿している。その傍らで土でくすんだ骨が、半分土に埋もれてその白い部分を草が生えた地面に晒していた。そして、肋骨と思われる骨が指のように突出して埋もれた地面に突き立っており、その尖端にどこかで見たような蝶が止まって翅を休めている。一匹ではない、何匹もいる。なんとも異様な光景である。骨は傍から見て十人以上はくだらない数であった。

ふつうに生活していれば見ることはないこの大量の人骨を見て千里は言葉を失う。一体この街で何が起こっているのだろうか、案外冷静な思考ができている自分に少し驚くも、すぐに警察に連絡しようとする手で携帯電話を探った。しかし無かった。鞆に置いてきてしまったようだ。

戻ろつかと少し躊躇うが、こっちから山を下りて警察を呼んだ方が早いと判断し、少し高い場所にある穴から枯れ木のツタを頼りに自

分の身長ほどの段差を降りる。すると、広場の先の少し遠くの方でがさりと音がした。動きのある音から察するにどうやら少年はそのまま山を下りているようである。

「翔！」

思わず名前を大声で呼ぶが、返答なく茂みを掻き分ける音は遠くなくなつてゆく。無視されているのかはたまた聞こえていないのか。ともかくにも、急いで山を下りてどこか民家を探さなくては。

千里は、膝についた土埃を軽く掃い、小走りで広場を抜けた。途中頭蓋骨のようなものを思い切り踏んだ気がしたが、何も考えないようにして走った。考えたら走れなくなってしまうそうだったからだ。だがその一踏みで高揚感は一気に体から汗とともに蒸発してしまつた。

整備されていない林を何回か滑つて転びつつも、先で枝葉を掻き分ける音を頼りに山を下りてゆく。途中、鬱蒼とした葉の隙間から麓が見えたが民家らしきものは見えず、ただ不規則な形をした田園が盆地の川に沿って広がっているだけだった。こんな田舎のような場所が街にあつたなんて、と不安定な足元に注意を払いながら思うやがて、山の雑木林を抜けて、黄土の道らしきものが敷かれた道路に出た。舗装されていないようで、大きな砂利や雑草がびっしりしており、誰も整備していないようであった。辺りを見回しても人っ子一人、民家の一軒、人の気配がするものが一つもなく閑散とし、ただ見たこともないような巨大な切り立った岩山が真正面にのつぺりとその稜線を青空にせり出して白い雲を引っかけ垂れ幕のように塞いでいる。母さんがいたころ色んな場所へ旅行をしたことがあるが、こんなでかくて切り立った山を千里は見たことがなかった。少なくとも日本ではありそうにない。しょうがなく、人気のある場所までいこうと道みたいな道をやや小走りに歩いた。遮るものがないほど開けた風景にも関わらず前をいつていたはずの少年の姿はなく、千里の脳裏に瑣末な不安が過る。そもそも、あれが翔という確証はな

いのである。人違い、いや、でも例えそうだろうが怪我をしている。さらに追いかける過程で大量の人骨まで見つけてしまった。単なる思い込みでは引くに引けない状況になってしまったのである。

どれくらい歩いただろうか、道を辿ってゆけば民家に行きつくだろうと予想していたが、全くそんな気配はない。道沿いにある田圃^{たんぼ}も、畝^{うね}の形が不均一で植えられた稲も小さくまばらであり、土も乾燥してひび割れていた。そしてさらに二十分ほど、小高い丘を越えたところでそれまで小走りにしていた足をとめる。今日はおかしなものをよく見る日のようなのだ。

「……城？」

か細い道の先には、大きな山の斜面に土色の壁で囲まれた巨大な建造物があった。しかし、遠目に見てもその城と思われる建造物は朽ち果て、瓦礫の山と中身を失った城牆のみが寂しくそれを囲んでいた。その城牆もところどころ破壊され、守る能力はなさそうである。

「どうして……」

潰れたレジャー施設にしては、あまりに規模がでかく、人が観光するような場所にはない。駐車場も見当たらないし、近代らしきものはどこにも見えなかった。城だとしても日本にあるようなものではない。じゃああの朽ちた城は一体何なのか。

確かめるため　いや、あつてほしくないという思いで半ば走っているような歩きをして、城の近くまでいくことにした。途中の道には錆びた槍や、折れた剣、鏃のついていない矢などが散乱していた。なにがなんだかわからず、ただその道を駆け抜けた。走りの速度に比例して、頭が徐々に混乱してゆく。小道は大きな道と合流し、落ちているものの量も増えてきた。道の脇にたまる骨、木製の何かよくわからない玩具、銅製の盾。千里はだんだん眉間が熱くなるのを感じた。軽い走りはついに全力疾走となり、目からはなぜか涙がこぼれ、息が苦しくなる。なにがなんだかわからない。城のようなも

のに近づくとつれ、その壁の大きさはとてつもなく大きいものだとわかった。

そしてついに、開け放たれ散々に朽ちきった城門の前に着く。壁はところどころ剥がれ落ち、黒ずんだ液体のようなものが吹きつけられた壁の跡が生々しく模様を描いているかのようだ。

ぜいぜいと肩で息をし、やがて首を持ち上げて、辺りを見まわした。すると、見覚えのあるものがある。漢字だ。それが書かれた城門の上に傾いて掛かっている扁額を見た。

「……建……恭？」

外から破られたと思われる鉄の門扉の隙間から黒焦げに焼け落ちた家屋と瓦礫と化した楼閣が見えた。

急に脚の力が抜け、その場に崩れ落ちる。そして、悟る。ここは日本ではない、と。

兌を抜けて へ？

一体何がどうなっているのか。問える人もおらず、ただただ空回りする自問を頭の中で繰り返し、状況を整理しようとするが、途中でおかしい違和感が詰まってまた自問は振り出しに戻ってしまう。しばらくして、まだ熱が残る頭をゆっくり稼働させて眼の前の現状をあるがままに呑み込もうとした。これはおそらく城である、しかもいつだったかテレビで見た中国の城に似ている。中国では街を城壁で囲んで外敵から街を守るのだ。では、なぜこんな場所に城が？いや、自分のほうがなぜこんな場所にいるのか、と言った方が辻褃が合う。翔に似た少年を追いかけて、草穴を抜けた。それはもしかしたら違う世界へ繋がる穴なのかもしれない。馬鹿な、そんなことがあるはずがない。と、砂利のついた手で顔を覆う。

しかし、そうとしか考えられない。慌てていたので意識しなかったが穴を抜けてからの風景は全く今までのそれと異なり、日本の自然風景のものとは明らかに違っていた。地形であったり、生えている植物であったり。夢か、あの夢の続きか。だが、皮膚から伝わる太陽の光熱と外気の感触は現実そのものであった。

しばらく座り込んだまま、ぼうつと心ここにあらずな夢心地で目の前の建造物を眺めていた。そしてやがて、頭をひと掻きすると、ゆっくり腰をあげてふらふらと金具が外れかけた門扉のほうへと歩きます。抜けてきた穴に戻ることも少し考えたが、まだ日も高い。冒険はまだ続いている、一体あの中に何があるのかということを確認めることにした。この楽観的な考えは、千里の元来の性によるものようだ。ところどころなだれた城壁の下には深い壕ほりが掘り巡らされ、木製の尖った杭が溝にいくつも植えこまれており、その隙間に無数の白骨と朽ちた甲冑が散乱していた。千里は下をなるべく見ないように壕に渡された木橋を渡り、10mほどの長い門道をくぐ

った。

千里は再び言葉を失った。火事だろうか、整備されていたと思われる街路に沿った家屋はほとんどが黒く焼け焦げて半壊または全壊し、炭になった家の柱がまるで墓標のようにいくつも立ち並んでさながら墓場の様相を呈していた。木造の建物は焼け落ち、石造りの建物は周道に瓦礫を晒し、焼け残った比較的大きな建物だけが焼け野原となった城内で目立っていた。

隙間から多種多様な雑草がぐんと生えた、主要道と思われる石畳を千里はとぼとぼと歩く。夢の情景とはあまりにかけ離れた殺風景な風景は、千里にある種の無常感を植え付け、異邦に一人佇む自分がひどく孤独に思えた。破裂し地面の盛り上がった十字路を4つほど抜けたところで矩形に伸びた広場に出る。城のほぼ中央にあると思われるその大きな広場からは、四方にある城門が見え、市でもあったのか焼け残った屋台がいくつが無造作に並んでいた。そして、千里はおぞましいものを見る。広場のほぼ真ん中に黒ずんだ山があった。近くまでいってみないとわからなかったがそれは、何百もの人骨であった。脇には頭蓋骨だけがいくつも山になってあり、想像したくないことがここで行われていたことを思わせる。

そしてようやく思い知らされる。

戦争。

戦争があつたのだ、ここで。そして、行われた　虐殺が。何百もの人の首が落とされ、その屍体がここで焼かれた。想像と同時に吐き気がこみ上げ、ここから逃げだしたくなった。

戻ろうと顔を背けたその時、一定のリズムを刻む鉄の音が千里の耳に入る。そして、この軽快なリズムは馬の蹄の音だと瞬時に理解した。段々とこちらへ近づいているようである。

冷や汗が体から一気に滲み出る。咄嗟に、どこか隠れる場所がないかを見回し、すぐに広場に面した崩れかけの商店のような堂の

影に飛び込んで、今いた場所の様子を窺った。もしこんな場所で誰かに見つければ有無を言わず殺されるかもしれないという恐怖感があつた。

少しして、広場に白い馬が入り込んできた。それを自らの足のように御すは、甲冑を着込んだまだ幼さの残る女性だつた。長い髪を後ろで結び、脇には煌びやかな剣を携えている。千里の喉がなつた。この遠目に見ても顔立ちのよさそうな女性は、馬を降りるとさっきの骨の山を寂しそうな面持ちで見つめ、そして無言のまま、崩れた家屋ばかりの周辺を見回した。千里と年は同じくらいか少し上だろうが、じつとその女性に魅入つた。だが夢で見た少女とはどこか違う。

しばらく辺りを見回すと、ゆっくりこつちに向かつて歩いてきた。千里の心臓の鼓動がびんと早くなる。顔を伏せ、見つからないようにするが、どんどんこちらに近づいてくる。

逃げようか、それとも戦うか。相手は女だ、力づくなら　だが、相手は剣を持つている。もし失敗すれば擦り傷では済まないだろう。武器をもっているだけで人はこんなに脅威に映るものなのかと、改めて思ってしまった。あと自分の隠れている場所まで数歩というところで、別の馬の音が聞こえてきた。女性は足を止め、その音の方向を振り向いた。

騎乗し槍を片手に持った屈強そうな男が四人広場に入ってきて、その男のうちの一人が女性を見つけると大声をあげて叫ぶ。だが、千里には何を言っているのかさっぱりわからない。日本語ではないことは確かであつた。女性は踵を返し、男達のほうへと歩きながら何か大声で叫んでいる。口論しているようだが、内容がさっぱり掴めない。ただなんとなくわかつたのは、女性のほうが男達よりも身分が高いのではないかということであつた。身に付けた装飾や、男の論すような口ぶりは女性の高貴さをうかがわせる。

かれこれ数分話し合ったところで、千里の緊張の糸がぷつんと切れてしまったのか、変な体勢で隠れていたのがまずかったのか、乗っていた不安定な木片が体重を支えきれず急に折れおもしろ横にこけてしまい、男達から見える位置に体を晒してしまう。

これに気付かぬ男達ではなく、少し驚いた表情をするとすぐに隊長らしき男が脇に指示をして二騎こちらに向かってきた。

もつと驚いたのは千里だった。すぐに体を起こし、声にもならぬ声で叫ぶと、瓦礫にぶつけた足の痛みも置いて、一目散に堂の崩れた壁から出て逃げようとした。

見つければ殺されるかもしれない。恐怖と焦燥と激痛が全身を駆け巡って吐きそうだった。随分手入れがされていない庭院^{ていゐん}を抜け、邸宅を囲む薄い壁を越えて死に物狂いで走って小さな通りに出ると、また見つからないように隠れながら走った。どうやらこの城内は傾斜にあるためか階段や段差がかなりあり、至る所で坂になっていた。

遠くで男の叫ぶ声と、蹄の音がする。わけもわからずその音から遠ざかるように走った。しかし、闇雲に走った結果、道に不慣れな千里は努力虚しく四方壁に囲まれた行き止まりに当たってしまう。後ろからは蹄の音が迫ってきている。心臓が口から出そうなほど脈打ち、鞭打って動かした足と腕がぶるぶると痙攣する。わけもわからない場所で、わけもわからず、わけもわからない人達に捕まるのかと、絶望で目の前の光景が黒ずんで沈む。

だが、霧中の闇の中を照らす灯のように、零れる涙を拭こうとする手を優しく掴む小さな手が千里を引っ張った。温かなその手は、千里の土まみれの手をぎゅっと掴んで、瓦礫の僅かな隙間に引き入れる。人一人が抜けれるのがやっとのその隙間を抜け、自分を導くものが何なのかを見たとき、千里は零れる涙と脚の痛みを忘れてしまった。見覚えのある顔。

翔
！

兎を抜けて 〈？〉

「じゃあ千ちゃんはこっちね、僕はこっちのほうに逃げるから」

これがあの日、翔と最期に交わした会話だった。古民家の路地裏でみんなと鬼ごっこをしていたとき、あの丁字路で二人は別々の方向へ逃げることにした。手を振り一目散に走ってゆく二人。そして、翔はそのまま行方不明となり、あの澁刺はつらつとした笑顔を見ることはもう叶わないと思っていた。

千里の腰ぐらゐの高さの位置にある手を握って、崩れかけた家屋の間をまるで道順を知っているかのように止まることなく抜ける少年は、ただひたすらにぐいぐいと千里の腕を引く張る。しかし、片方の腕からは鮮血がばたばたと滴り、来た路に点々と道標を落としていた。山吹色の衣をはためかせ、簪かんざしに施された小鈴が軽快な瓊音けいおんを鳴らし少年はこちらを振り向かず走りながら言う。

「あちらの人間だな。どうしてこちらにきた！？」

そのそっけないような声色もかつての全く翔と同じであった。堪え切れなくなった千里は思わず名を呼ぶ。

「翔、なあお前翔だよな！？」

その瞬間、少年はピタリと止まってこちらを振り仰いだ。幼げな表情はどこか愛らしく、眼は澄み、透き通るような白い肌をしている。見目形は翔と同じなのだが、不思議と畏怖のような感情が千里の興奮した心にそっと影を落とす。少年はじつと千里の顔を見上げ、やがていつもと同じようなそっけない表情で言う。

「千ちゃん……？」

「そうだよ！どうしたんだよ、その格好！あのときから全然変わってないじゃないか、どうして……」

どうやらこの少年は翔に間違いなさそうである。翔は目を落とし軽く俯くと髪をもしゃもしゃと搔いた。

「もしかして、あの穴を通ってきたのか」

「うん、そしたらこんな場所に出ちゃって。翔、一体ここはどこなの？あの骨は？この焼け焦げた城は？」

わけのわからないことだらけの千里は捲し立てるかのようにいくつかの質問を翔にぶつけた。翔は困ったなという顔で、目を泳がせる。この行動は困ったときにする昔からの翔の癖であった。

「ここは千ちゃんの来るような世界じゃないんだ。僕の手違いで千ちゃんがこちらに来てしまったようだね。すぐに元の世界へ帰れるようあの穴の場所まで送るよ」

全く問いに対しての解になっていない翔の言葉に千里はやきもきし握った手をぎゅっと握りしめた。翔の掌は温かく、脚の痛みも繋いでいる間はまだか和らいでいるような気がする。

「何があつたのか教えてくれたっていいじゃないか、心配したんだよ！？翔が行方不明になってから、翔のお母さんと一緒に色んな場所探して……」

お母さんという言葉聞いて翔はさらに目を泳がせて、俯いてしまった。

まだ屋根の残る堂の中で、割れた屋根木の隙間から日の光が差し込んで翔の身体を半分照らしている。馬の蹄の音は遠くでけたたましく響いていた。

「せっかく久しぶりに会えたのに……、何があつたかくらい」

「……ここは戴邦^{たいほう}という寰宇^{かんう}、日本とは違う世界なんだ」

翔は小さく溜息をつき、またそつけない表情で言った。その口ぶりは子供のそれではなく、千里よりも幾つか年を経ているかのような語り口である。

「……たいほう？」

聞いたことがない名だ、どこかの国の名だろうか。

「そしてここが、戴四邦たいしほうのうち東にある璃邦りほう、その中の彰けんという国が治めていた建恭けんきょうという地だよ」

「ま、まって。戴邦たいほうってなに？ここは中国なの？」

翔はまた頭をもしやもしやと搔いて、困ったような面持ちで言う。

「どこから言えばいいのかな……。搔い摘んで言うと、ここは仙人の世界さ。かつては蓬萊と呼ばれ今は戴邦と呼ばれている。千ちゃんのいる世界とは一線を画した場所にあるんだ」

「……仙人？じゃ、じゃあどうして翔がここにいるんだよ。こんなところにいる必要はないって、早く一緒に帰ろう」

「どこに？」

「どこって……一緒に住んでた街にさ」

「……」

「帰れない」

「どうして!？」

「僕にはやらなければならないことがたくさんある。使命があるんだ」

「使命って……」

その決意に満ちた喋りは、傍から見て、千里のほうが子供のように映ってしまうほどであった。

「怪我もしているじゃないか、早く手当てをしなきゃ」

「大丈夫……こんなくらいで死にはしないよ。それより……」

翔は手を握り返して、辛そうに千里の目を見つめて言った。

「千ちゃんの街、いやそれだけじゃないいろんな場所で、もしかしたら大変なことが起こるかもしれない。僕があちらへ行つてなんとかやめさせようとしたんだけど、返り討ちに遭っちゃって……」

「……一体誰に？」

翔は寂しそうに目を瞑り、血の染み込んだ衣で汗をぬぐった。

その刹那、翔は何かを察知したかのように瞬時に後ろを振り向くと、千里の腰を掴んでその場に引き倒す。千里は尻からどつと倒れこんだ。

「伏せるんだ！」

途端、千里が立っていた空間に一閃の矢が空を切る音を放ちながら通り抜け、堂の柱に深く突き刺さった。

「まずい、見つかった！」

蹄はまだ遠くで音がする。どうやら敵は馬を降りてこちらまで来たようだ。相手は堂の向こうの崩れかかった楼閣からこちらを狙って射ったらしい。

「姿勢を低くして、あの扉から外へ出るんだ」

小さな指がさす先には、戸板が外れた小さな戸口があった。

「あいつらは一体何なんだよ！？」

恐怖で声が翻る。翔はまた頭を掻いてそっけなく言った。

「……彰国の兵士だよ」

兌を抜けて 〈？〉

天辺にあつた日はすでに西に傾きつつあり、その白光は朱の色を帯び始め丹青の背景を空に描いていた。黄昏とは言わないまでも、地上の影は伸び、濃さを増し始めている。

千里と翔の二人は、敵の矢を掻い潜りなんとか二層構造になっている城の上層まで抜け、破損した武器や破れた旗幟が散乱する城牆の上をひた走っていた。城牆はところどころ女牆じょじょうが崩れ足場が悪く、少し油断すれば五階建てのビルのような高さから真つ逆さまに落ちる危険があるようなところである。

足場に注意を払いながら二人は見つからないよう半分だけ焦げて瓦解した小さな箭楼せんろうの中に逃げ込み、ぺたりと座り込んで何度も大きく呼吸をした。城牆の下からは呼応し合っているさっきの兵士の声が聞こえるが、翔は見つかるわけではないというような涼しい表情をしている。まるで、鬼ごっこで鬼から逃げ切った子供のような達成感に満ちた顔だ。

千里は息をなんとか整え、さっきの話の続きをしようと口を開けた。だが、翔がわずかに早く口を開く。

「千ちゃんが最初に見た白骨は、逃げる途中に殺された官吏や貴族達のものだよ」

さらりと言う翔は、疲労の色など見せずあっけらかんとしていた。

「……翔、いい加減何が起こっているのか説明してくれないか。これは夢なのか？」

翔は壁に空いた大きな穴から外を窺っている。千里は汗が滝の如く肌を濡らしているのに対し翔はというとあれだけ走ったのに汗はひとつもかいてはいない。

「残念だけどこれは夢なんかじゃない、全部現実だよ。戴邦は今戦乱の真つただ中で、こんなことはいろんなところで起こっているんだ。さすがに城邑じょういの人間を城ごと焼くなんてのは稀だけだね」

千里は首をもたげた。

「へえ……、でも馬にのって弓を使って殺し合いをやってる場所が世界のどこにあるっていうんだ。聞いたことがないよ」

翔は背中小さく溜息をつく。

「……かつてはここも戦乱を嫌って仙界に憧れ、現実から逃れたもののたちの楽園になるはずだったんだ。でも」

ふと、座り込む千里からは、太陽の眩しい日光が穴の前にたつ翔の輪郭を形作って光っているように見えた。その眩しい背中には寂しさがかすれて見えるような気がする。

「でも……？」

「いや、いいんだ。こんな話を千ちゃんにしてみようがないから」

翔が少し笑った、いや光の輪郭がそう見えさせたのかもしれない。その笑顔は昔の翔そのままだった、変わらず、翔だけの時間が止まっているような。あれだけ親しかったのに、とても遠い。いや、大きな隔たりを感じざるを負えない。

「……翔、お前は何者なんだ。消えちゃった間に何になっちゃったんだよ!？」

翔はゆっくり振り向き、頭を掻きながら言った。

「僕は天命を受けたんだ」

「てんめい?」

反応はそつけない。

「雛龍ひなりゅうになれてね。いわば龍ひなの雛だよ」

「龍……? 龍って、ドラゴン?」

千里は、さすがにそんな解答がくるとは思ってもみなかった。

「定義はあちらと異なる。要は高位の獣、神獣さ。人の形を為しているけどね」

さつきから翔の言っていることは突飛なものばかりである。混乱した頭でゆっくりとこの尋常じゃない大きさの疑問をゆっくり噛み砕

いて受け入れてゆくが、千里の頭の許容範囲はとうに超えていた。困ったように頭を掻きたいのはむしろこちらだ。だが、この状況を愉しんでいる自分がどこかにいるのであった。それが少し不思議で、気持ち昂る。

その時、壁の下で声が絶叫にも似た悲鳴があがり、次に馬の嘶いく声があがった。悲痛に怯え助けを求める声であることはすぐにわかった。翔はすぐに穴から下を覗く。千里もすぐに横穴から下を見て、息を呑んだ。

なんと人面の頭をもち、虎の身体をもつ獣がどこからかやってきて、子供のような無邪気な笑い声をあげながら、さっきの兵士を貪り食っているではないか。脇には腹を抉られ、肋骨が剥き出しになった馬が虫の息で横たわっている。もう一人いた若い騎兵はそれを見るや否や、金切り声をあげてどこかへ逃げて行った。

「馬腹ばはらか」

翔は冷静に言う。

「どうしてこの辺りに人が住んでいないのかわかった。たぶんあれのせいだよ」

千里はあまりのことに声が打ち震えてうまく出せない。

「あ、あ、あれは……何」

この子供の度胸は一体どれほどのものなのだろうか、恐怖にひきつる千里に対し全く怯える様子なく静かに答える。

「馬腹という人食いの獣だ。数年前の戦争中に微ちひ愴じやうがこの辺りに落ちて、その影響を受けた人間のなれの果てだよ。今もこの辺りに巣食って、人間を食らっているみたいだね」

「こ、ここはあんな化け物がいるのか！？どうして顔が人間なんだよ！？」

翔は少し渋ったあと小さな首を横に振った。

「よほど強い憧憬を抱かされたんだろう。人体の一部が残っているということとはそういうことさ」

「……？」

なんのことやら全く解することができそうにない。ただ、一つの疑問が過った。それは、

「あれは……人間なの？」

千里の問いに翔は一瞬なにやら寂しそうな表情を見せた。広い口元がきゅつと締まる。

「……そう、あれはただの人間だった。崇高な理想に溺れた結果、畜生に堕ちたんだ」

「そ、そんな……」

この世界は異常だと声高く叫びたくなった。なんの冗談かと翔を見るが、その顔は真面目そのものである。何の曇りもない澄んだ目は全く泳いではなく、ただ人間を貪る哀れな畜生に向けられていた。ケラケラと無邪気に笑う声の主は、辺りを見回しながら肉塊に顔を突っ込み内臓を喰らっている。

千里は堪え切れず、その場で吐いた。人が人を喰うなんて、それが目の前で起きている。燃やされた屍体、白骨、食われる人。ここは地獄だろうか。

「千ちゃん、まずい……！」

翔がいきなり身を伏せた。馬腹がこちらを見ているようだ。能面のような顔には伸びびっぱなしの髭が生えそろう、筆先のような先端から血を滴らせている。

「見つかったかもしれない」

千里はおそろおそろ、見つからないよう握り拳のような大きさの穴から下を覗いた。

見た瞬間、背筋に悪寒が走る、見なきゃよかったと後悔した。馬腹と言われるその異形の動物は、皺を顔全体に作って満面の笑みでこちらのほうを見ながら、幼い子供の笑い声をあげていた。

ケラケラ、キャツキャ。

「今の僕には手に負えないかもしれない」

だが弱音を吐きながらも、なぜか微笑を浮かべている。これは何か
いたずらを考えている時の顔だ。

「千ちゃん、鬼ごっこの続きをしよう。まだ決着ついてなかったよ
ね」

兌を抜けて へ？（後書き）

女牆：城牆に取り付けられた凹凸の窪み。間から攻撃する。

箭楼：城壁の上に建てられた建物。武具や弓矢を備蓄する。

兎を抜けて 〈？〉

翔はいきなり脇にある手頃な瓦礫をむんずと掴むと、こちらを仰ぐ馬腹めがけて思い切り投げた。弧を描いたそれは、もちろん馬腹に当たることなくかわされて地面に当たって碎け散る。

「翔、なにをつ……！？」

翔の腕からはまだ血が出ているようだが、痛みを堪えるような表情もせずどんどん投げている。

「挑発だよ。さ、千ちゃんも投げて」

「なんでわざわざ挑発なんかするんだよ！？まだ見つかったわけじゃないかったのにどうして相手に気付かれるようなことなんか！？」

「いや、もう僕達は奴の獲物と認識されたよ。僕達が降りるまで奴はずっと待ち続ける。獲物が自分にとって捕え易くなるまで執念深く待つんだ。馬腹はそういう習性なんだよ」

「そんな……」

確かに、下にいる馬腹は、すでに今まで貪っていた獲物などなかったかのように無視し、ただこちらの方を見つめて、不気味な笑みを浮かべている。

「そうなったら僕らが不利だ。奴を挑発してここまで登らせて、そこで返り討ちにする」

千里は石を投げる翔の腕を掴んだ。細い腕は弱く脈打っている。

「龍だかなんだか知らないけれど、こんな怪我をしていてどうやってあんな化け物と戦うんだ！ここにいれば少なくとも襲われないなら、もう少し落ちついて作戦を考えるべきだよ！」

翔は、また困ったように頭を掻いて千里の顔をじつと見た。

「千ちゃん……、実は君が帰れるのは日が昇っているうちなんだ」「……！？」

昔からそうだ。翔は大切なことを後で言うことが多かった。昔、

千里が学校を欠席している時に宿題が出ていたのだが、翔はそれを締め切り当日に思い出したように言う。おかげで、千里が知っていたものだと思っている先生に怒られるということがしばしばあった。あのときから言っていたのに全然治っていないみたいだ。

「それを逃せば半月後になる。僕は奴の領域にわざわざ飛び込んで逃げ切るほどの力はおちあわせてないよ。千ちゃんがかちやんに来てしまったのは僕のせいだから、責任をとってなんとか千ちゃんを元の世界に帰さなきゃならない。のんびり奴がどつかへ行くのを待っている暇はないんだ」

千里は酷く狼狽える。半月もこんな恐ろしい場所にいられるわけがない。今日だけで何回死にそうになったか、片手が埋まりそうだ。

狼狽える千里の一方で翔は楽しそうに瓦礫を投げている。それをうまいこと避ける馬腹はだんだんと笑い声が薄れてきた。笑んだように見える顔の皺は段々と眉間とおでこに寄り始めている。

「それにね、奴は怒りっぱいんだ。一発当てればたちまち」

「……さ、作戦はあるの？」

わたわた震える声で千里は問うた。酷く自分が矮小に感じたが、何とかそれを考えないようにした。翔は脇を指さす。

「あつちのほうに箭楼こやがあるでしょ。その手前に大きな溝があるんだ」

確かに、崩れた壁の隙間から城牆の途中に大きな崩れた部分があるのが見える。その溝には、誰が架けたか細い木板が架けられていた。「あそこまで走って溝を飛び越えて、僕がうまいことあの溝に奴を落とすよ」

なるほど、だから鬼ごっこか。しかし、その溝までここからだいたい200mほどある。追いつかれたらどうするのだろうか。

「魔法でも使うのか……？」

“龍”なのだから、何かしら特殊能力でもあるのだろう。だが翔は笑って、

「龍っていつでもそんなだいそれたものは使えないよ。さ、投げて」

と、一瞥を返す。不安を感じながらも仕方がないので、恐る恐る剣の破片のようなものを掴んで思い切り投げた。もちろん当たらないのだが、なんだか二人でいたずらをしているような気持ちになった。

さすがの馬腹も二方向から来る攻撃にだんだんやきもきしてきたのか、明らかに表情が変わってくる。

二人は片っ端から手当たり次第にものを投げつけた。翔は楽しそうだ。千里もなんだか可笑しくなって、口元が緩む。

そしてついに、千里の投げた錆びた銅片が馬腹の骨張った頭に直撃した。

「やった」

当ててないのに翔がガッツポーズをきめる。そしていつの間にか自分も拳を高くあげて喜んでいた。

しかし、眼下ではあの化け物が子供が怒り狂って叫ぶような雄叫びをあげてこちらを怨恨の目で睨んでいる。顔はみるみる紅潮し、ぼさぼさの毛は思い切り逆立っている。

突然、それを腰を引いて覗く千里の腕を翔は思い切りひいた。

「馬腹がくるよ!」

途端、馬腹は身を起こすと甲高い奇声をあげながら城壁の角にある小さな階段に向かって飛ぶように駆けて行く。それを後目に千里と翔は箭楼から出て思い切り駆け出した。

城牆シロガキの上からはすでに遠くの山の稜線に触れそうな位置に日が降り始めているのが見えた。城下に広がる鬱蒼とした森には三つ、切り立った山が聳え、紅緑の木々の梢に細長い影を落としている。その森を小さな川が二本横断し、山の麓の田畑に注いでいた。走りながら千里はそれを見て思う。

綺麗、と。

絶妙な配置でここから森の全体が隈なく見渡せ、微妙に濃さの違う

葉の緑が濃淡によつて別の風景を地上に描き出しているかのように千里には見えた。千里は反対の方を見た。燃えたと言っても、城の中はまだ建物なら多少残っている。豪華な装飾が施された屋根、色とりどりの邸宅、雑草が伸びきった庭園。この辺りはまだ朽ちたといつても比較的綺麗に残っているようだ。

自分のいた世界とは異なる世界、異なる風景、異なる風俗。人はそういうものに触れたとき強く心を揺り動かされる。それは何故？ 憧れだろうか、それとも見たこともないものに対する好奇心か。前後左右下に注意を向けて全力で走る千里に、そんな哲学めいたことを考える余裕はなかったが、どこかで頭を過っていた。

そして、目の前を走るこの小さな少年にどこか憧れを感じている自分がいるような気がした。

「もつと早く！！」

翔が手招きながら叫ぶ。予想外に馬腹の走行は速く、すでに先ほどまで二人がいた箭楼せんろうに辿り着いていた。さすが四本足で走る獣、崩れかけた足場など意に介さぬような足運びである。

二人は後ろ振り向く暇もなく必死で走り、なんとか溝のある場所まで到着した。溝の幅はだいたい5m、溝の底はそのまま山の側面に切りたつ急な崖となっているため、落ちれば一溜まりもない。木板を渡ると、翔はすぐに足蹴で板を外し、簡単には渡れないようにした。

「千ちゃんはそこで伏せてて！！」

馬腹はあつという間に溝の対岸に至った。紅潮した顔の皺をくしゃくしゃ動かしながら、対岸でどうしてやろうかという風に左右に行ったり来たりしている。

どんな作戦があるのかと息を切らして見守っていると、どうも翔の様子がおかしい。慌てたように装束をぱたぱたと叩き、大きく余った袖を一生懸命探っている。

「千ちゃんまずい!!」

「ど、どうしたんだよ!？」

翔は両手で頭を掻きながら慌てふためいて、

「皇珠こうしゆがない!!」

「こっしゅ……?」

「指輪だよ!!どこかに落としたんだ……どうしよう。あれがないと、また怒られちゃうよ。どうしよう」

あっけらかんとしていた翔の顔がみるみる青ざめていった。

指輪と聞いて千里はとっさにズボンのポケットを押さえた。まだ異物感が残っている。

「翔!!指輪つてもしかして」

とっさにポケットから指輪を出して翔に示そうとしたとき 翔が千里のほうを振り向いたとき、馬腹は見計らったように前屈の姿勢から体軀を曲げ、瞬時に跳躍をしてあの幅広い溝を飛び越えた。

危ない!!

千里が叫ぶ間もなく馬腹は翔の背中に飛びかかり、鋭い爪を立てた。

「翔!!!」

だが翔は、僅かな苦痛の色を見せただけで、千里に向かって叫ぶ。

「千ちゃん!!逃げる!!」

そして、けたけたと笑うこの異形の化け物が血で黒ずんだ牙を出し翔の頸に噛みつくこうとした。

もう駄目だっ

千里は腰を抜かして立てず、思わず目を瞑った。もう終わりだ、こんな場所で死ぬなんて……。

だが、その刹那、馬腹の顔が歪み動きが止まった。そして次に何かが撓しなる音とともに、馬腹の顔を矢が貫通した。その隙をつき翔は思い切り馬腹の腹を蹴り上げる。子供の泣き叫ぶような声をあげなが

ら、馬腹は体勢を崩して溝から転落していった。

翔はぐくりと崩れ落ちた。千里は何が起こったのかよくわからずただ呆然自失し、ふらふらとへたり込む。すると、翔は震える腕で肩を掴み、城牆の下を指さした。

「……誰かが馬腹に矢を射つたみたいだ。おかげで助かった……みたい」

千里は女牆から恐る恐る壁下を覗いた。すると影の中に誰かが、一人馬に乗っている。

「さっきの……」

あの広場で骸むくの山を悲しそうに見つめていた女性が、美しい毛並みの白馬に跨って朱色の長弓を脇に抱えながらこちらを窺っている。しかしなんと凜々しい出で立ちだろうか。そして、女性は馬の手綱を握りながら山の方を指差し叫んでいる。だが千里には何を言っているかわからない。

翔はふらふらと立ちあがって、千里の汚れたシャツの裾を軽く摘まんでひく。

「あの娘は逃げ道を教えてくれているみたいだよ……。ありがたく従おう」

兌を抜けて　　〈？〉

謎の娘の指差す方に従い、崩れて坂になった城墻を降りると、なだらかな斜面に木々が群生する森が壁に迫る勢いで広がっていた。城の真裏のようである。辺りは、さっきの陽当たる場所とは打って変わって暗澹とし、森全体に薄い靄がかかっているようであった。「こつちだ」

翔は急くように、千里の人差し指と中指を掴んで森の奥へと入ってゆこうとする。背には痛々しい引掻き傷が滲んだ赤い線を呈していた。千里はそれを見て心に同じような傷がふつと浮かぶ。どうしてもこんなになっても顔色一つ変えず、ひたすらこの手を引こうとするのか。

「翔」

千里は堪え切れなかった。

「何？」

ほんとうに素っ気ない。

「傷」

翔は頸を回し袍を引つ張って背中を見た。

「ああ、大丈夫だよ。少し痛むけど」

少しどころの傷ではないことは素人の千里でもわかる。血が袍を伝って背から滴っているのだ。

「腕も」

すると翔は左腕も見る。が、今度は微かに笑ってみせた。

「大丈夫だって、どうしたんだよ」

千里は汗でひつついたポケットから指輪を出して翔に示した。

「これ、翔のだよ」

それを見せると翔は、みるみる顔を変え歡喜の声をあげて喜び、指輪をとって元あった指に填めた。わずかに指との間に隙間があり、

すつぱりと填まる。

「よかった！これがなかったら大変なことになってたよ。まさか千ちゃんが持ってたなんて」

翔は指輪を夕陽にかざしてうれしそうに眺める。陽光を浴びて、真紅のような色を放つ指輪。翔はまるで、買ってもらった玩具を手に入れたみたいにはにかんでいる。

「……」

「どうしたの？千ちゃん」

いつの間にか腕が震えていた。鼻が次第にツンとし始め、目に水が溜まる。

「どうして……どうしてそんなに強いんだよ……どうして子供でいられるんだよ……」

「……」

「自分も……戻りたいよ。あの頃に」

「……」

今の現実には絶望していた。優しい母さんも兄思いの妹もない。たった一人残った家族である父さんは違う女と新たな家族になろうとしている。子供の頃の自分はまさかこんな未来がすぐ近くに迫っているなど考えもしなかった。当時は早く大人になりたいと思っていたが、こんな苦痛を背負っていかなければならないのなら子供のままのほうがいい。戻りたい。そう、無垢な、幸福なあの頃に。

「駄目だ！」

翔は声変わりもししていない小高い声で一喝した。

「憧れは敵に心に付け入る隙を与えてしまう」

そのとき千里の何かがぶつんと切れた。拳を振るい、声を荒らげる。「敵ってなんだよ！？龍ってなんだよ！？天命ってなんだよ！？さつきから何を言っているかわからないよ！昔からそうだ！大事なこ

とをいつも言わない！全然何が起こっているのかわからないよ！」
張り上げた声は、声変わりしたてで若干かすれ、静寂の森林に吸い込まれていった。しばらく閑寂が辺りを支配し、やがて翔が頭を掻いて俯くと呟くように言った。

「ごめん」

翔は、畝って突出した木の根に腰かけて静かに喋り出した。陽は着実に傾いている。翔の袍は陽で紅色に染まっていた。

「深く知らないほうが千ちゃんの為だと思ったんだけど……」
と、前置きし、

「……さつき人が獣になったと言ったよね。実はそれが千ちゃんの世界で起ころうとしているらしい」
と、目を落として言った。

「……」

千里の顰^{しか}めた表情は少し緩む。

「人は畜生になる。逆に言えば畜生は人だ。天が定め、それが理^{ことわり}になっている。そして龍は天から与えられた力で人を畜生へ堕とすことができるようにされた。何故かはわからない。そして、先日その力を使って今千ちゃんの世界で人を畜生へと堕とそうとしている奴がいることが僕らは知った。何の目的かは不明だけど。でも、それが本当に起こればあちらの世界は大変なことになる。だから僕はそれを知って千ちゃんの世界、東瀛^{とうえい}に行つて事の真否を確かめに行つたんだけど、そこで敵に先手を打たれてこのザマだよ」

「もしかして……」

翔は小さく頷く。

「そう、どうやら僕とは別の龍がこの件に一枚噛んでいるらしい。偶然何人かの龍が行方不明になっているし、どうやら人間の揉め事に使われているみたいなんだ」

翔は脚を組んで頬杖をした。

「龍つてのは、簡単に言えば人々の偶像物さ。故に、理想であり完全であり象徴である。だから龍は人の心に干渉することが可能なんだ」

千里は湿った鼻を拭い、少し首を傾げた。なんとなくはわかるが、話が急に難しくなった。

「だから、戻ったら気をつけて欲しいんだ。憧れは人の心に隙間を作り、そこに付け込む奴にそいつが望む理想を見せられれば、大抵の人間はそれに屈して獣になってしまう。僕はこれから宮に戻ってことの次第を姉上に奏上しなくちゃならない」

「姉上？」

翔の頬杖がずり落ち、あたふた慌てだした。

「い、いや、今のは言っちゃダメなんだった。ごめん忘れて」

千里は深く追求しようとはしなかった。翔は目を細めて天を見上げると、すつくと立ち上がり辺りを見回す。

「時間がない、歩きながら話そう」

山の中腹辺りになると、人が通るような道も失せ、獣道のような細い道しかなくなってしまった。千里は後ろを振り返った。眼下には夕陽によって巨大な影を帯びる建造物群が、空虚な闇を纏って広大な盆地に畝だけが残る田園地帯に静かに佇んでいる。この都市は滅びたのだ。何千といたであろう都市の発展に勤しんできた城内の人間は殺され焼かれた。そう思うと、これは巨大な棺桶に見えないこともない。寂しさが千里のところに影を残した。

翔は歩きながら話そうといいながら、足場に注意するよう言う以外何も言葉を発しなかった。なので千里もそれに従った。そして歩きながら千里は翔の背中を見ながら思う。

この幼い子供に一体どんな大きなものが背負わされているのだろう。

話を聞くと、龍というものはこちらで言うところの仙人ではないだろうか。どういう仕組みでそんなものが決められているのかわからないが、改めて意識すると、様々な点において元いた世界とこちらは絶対的な隔絶が存在している。

異世界。

そう、自分は異世界に来てしまったのだ。そんなもの、存在するはずがないと思っていた。単なる空想だと思っていた。しかし、現に今、あちらには存在しない場所の土を踏みしめ、ありえない獣に命を狙われ、行方不明になったはずの親友が、いなくなった時のままの姿で前を走っている。

それで、十分だった。あちらにないものがこつちにある。もしかしたら自分の本当の居場所もこちらにあるのではないだろうか。苦痛しかないあちらに自分の居場所などあるのだろうか。どちらが夢で、どちらが現^{うつ}なのだろうか。

そういえば、今朝の夢

ふっと今朝見た夢の一部分が頭を過る。

「ここだ」

激しい水流の川の岸边に差し掛かったとき、翔が向こうを指差した。細い指が差す先には桃の花が咲く木々の間に木造の祠のようなものがぼつんと置かれており、どこかで見たような青い蝶が何匹かひらひらと祠の周辺で舞っていた。

丸太を二本倒しただけの粗末な橋を渡り、翔の背丈ほどの祠の前に二人は並んだ。祠は誰かが手入れしているのか、きちんとお供え物があり、楕円形の石段の上に小さな皿があって褐色の木の実が盛

つてあつた。翔は千里の顔をちらりと仰ぐと、祠に指輪を翳^{かざ}し、目を瞑り深く息を吐く。するとさつきまであたりをひらひら舞っていた蝶が、翔のまわりに集まりだして、ついに背中の傷に群がりだした。千里は驚きながらも、その光景に見とれた。青い蝶は紅い夕陽を浴び、翅をあおぐ度に色が混ざって青紫や赤紫に体色を変える。一時の淡い神々しさ。千里は無意識にその光景を頭に焼き付けていた。

やがて、背中の傷はいつのまに癒え、血も止まると蝶はまた辺りをふわふわと飛び始めた。

翔は何かを唱えると、祠の格子を開いて中を覗き、手を入れ中から蓋のようなものを取り出した。脇から見ると人一人が入れるような小さな穴が祠の中にぽかりと空いている。

「ここでおわかれだ、千ちゃん」

翔は千里の紅くなった顔を笑顔で仰いだ。だが、見せかけの笑みであることは千里には痛いほどわかる。自分も少し笑んだが、果たして笑っていたかはわからない。また鼻が湿りだしてきて、溢れそう

だ。
「……戻らなきゃならないのかな」

「でも、千ちゃんのいなくちゃいけない世界は向こうだ。ここじゃない。待っている人がいるはずだよ」

待っている人と聞いて小さくうつむく。

「実は母さんも、妹ももういないんだ」

翔はそれを聞いて眉を落とし困った顔をした。

「ごめん……、知らなかった。でもお父さんがいるんでしょ、なら帰らなきゃ」

「……でも父さんは、別の女を家に連れてきて、新しい家族を作ろうとしている。女の人は父さんの子供も身籠っているんだ。だからこ

れから一緒にいたって除け者にされるだけだよ。だからもう僕の帰る場所なんか……」

そうだ、もう自分の居場所なんてあそこに存在しないんだ。煙たがれる生活しか待っていないんだ。それなら、いつそ。

そんな千里を見かねてか、翔は空をぼんやり見つめて、呟く。

「……あちらに行ったとき、本当はいけな^いんだけど自分の家を見たんだ」

「……」

翔は紅が青に染み渡りつつある空を仰いだ。そして鼻をすする。

「家、なかったんだ」

そうだった。翔が行方不明になってから二年ぐらいたあと、翔の親は離婚したと風の噂で聞いた。そのあと、父だけがあの家に住んでいたが、いつのまにか蒸発してしまい、家は取り壊され今あの場所は駐車場だ。翔がそれを見た時何を思ったのかは、想像に難くない。

「帰れる場所があるだけ千ちゃんが羨ましいよ」

「でもっ……！」

出そうとした言葉が喉の奥でつかえた。

「なんだか最近だんだんあちらの世界での生活が夢だったんじゃないかって思うようになってきてね、家族の記憶もさ、なくなってるんだ。自分の家を探すのにも手間取っちゃった」

「……」

微かに笑う翔の顔は影を帯び、とても寂しそうだった。どちらの苦労が大きいかなんてこの際比べたってしょうがないことは千里でもなんとなくわかっていた。でも、翔はどこか一歩先に行っている。

自分とはかけ離れた境遇で、強くなっている。千里にはそれが非常に羨ましく、妬ましかった。彼は確固とした居場所があるのだ。

「……また、会えるかな」

千里は尋ねる。翔はこっくりと頷く。

「天がそう望むのなら」

千里は体を曲げて穴に入った。石で固められた穴の奥の方は緩い傾斜の階段になっている。

とても眉間が熱い。翔は穴に入る千里を心配そうにのぞきながら声をかける。

「くれぐれもさっき言ったことを忘れないで。あちらの世界でのことは必ず僕らがなんとかするから」

「……わかった」

光が次第に届かなくなり途方もない闇が辺りを染め、土の湿った臭いが充満している。

「鬼ごっこ、今度こそ決着つけよう」

「……うん」

名残惜しみながら手を振る翔に手を振り返しながら、ふと眼前を見た。まるでこれからのことを暗示するかのように、闇が先を塞いでいる。深淵と呼ぶに相応しい。本当に帰れるのか、帰っていいのか、両挟みの不安に苛まれる。残ればよかったのではないか、という自問が千里の歩を遅くした。

階段を十段ほど降りたところで、千里の耳にどこかで聞いたことのある空を切ったような音が届いた。

「千ちゃん！ いそいそ」

突然、翔の叫び声が空洞の洞内に木霊する。そして、何故か翔に渡した指輪が音を立てて千里の足もとまで転がってきた。暗闇の中でも薄暗い真紅の光を放っている。

それを見た途端千里の頭に嫌なものが過った。指輪を拾い上げ、恐々と後ろを振り返る。

刹那、千里の思考が停止し、一気に激情が頭の中を席卷した。

穴の入口で頸に矢が刺さった翔が穴の縁にもたれて動かなくなっ

いる。手をだらんと落とし、穴の中に血を滴らせていた。

その異常な事態に言葉を失い狼狽する千里。だが、翔はまだ息があった。翔は小さな首をもたげ出せない声を必死に絞り出して穴に向かって叫ぶ。

「走るんだ！！」

言葉になっていなかったが、千里には確かにそう聞こえた。途端、無意識のままに千里は泣きながら闇の方へとつつ走る。振り返らないように、ただ、走るんだという翔の声のままに。

気がつくと、辺りは真っ暗闇であつた。目をあけ、小さく咳きこみ、辺りを見回す。繁った木の葉の間から見慣れた街の夜景が見えた。

手には、真紅の珠が埋め込まれた指輪がしっかりと握られていた。

兌を抜けて へ？へ（後書き）

これで「兌を抜けて」は終わりです。

墮落 〈?〉

不純物が鬱積している。心、身体、頭にどよどよと溜まってゆく。鬱憤の晴らし所がなく、さらに不純物が降り積もってゆく。やがてそれは、掻き取りにくいところで沈着し、固まって底にこびりついてゆく。

その男は喧騒に溢れた街の中心地から、少し離れたところにある深夜のネオン街を、やや俯きながら足早に歩いていた。手には小さな紙袋をもち、よれよれのスーツは畳んで脇にもって、新調したネクタイは首元で不格好に緩んでいた。手元には大学の入学祝いに買った腕時計の指針が0時を示している。

「くそ……どうして」

男はぶつぶつと文句を口にしながら、涙と鼻汁を顎からぼろぼろと滴らせていた。雲がかった暗鬱^{あんうつ}とした空は街が発する膨大な光に照らされ、澱んで赤黒く、今の男の心情をそのまま現わしているかのようである。深夜のネオン街は意外と人の往来は激しく、人々は欲望の赴くままにネオンに染まった店々へと入ってゆく。男は、それを横目で見て深く溜息を吐いた。そして、この世界に深く、深く失望した。

三時間前、男は好意を抱いていた女性にふられてしまった。二四年生きてきて初めて好きになった女性。男は今まで空想に浸る生活ばかりをしていたが、彼女を知ったことで初めて今まで無味だった人生がとても楽しくなったような気がした。毎日彼女と一緒にいられたらと考えるようになった。時には、理想の自分を照らし合わせた。しかし、現実はその彼に甘くはなかった。三時間前、女性に直接会って、生まれて初めて自分の心の内を伝えた。誰にも話したことのない恥の部分の初めて人に打ち明けたのである。だが女性は、他に好意を抱いてる男がいたのだ。男はその女性が好意を抱いてい

る男性を知っていた。とてもその男には及ばない、顔も、容姿も、経済力も。そして自分のつまらなさを改めて思い知らされたのである。そのことは男を深い深い嫉妬と、失望へと誘^つってゆく。

ふと男は店先のショーケースに映る自分を見た。冴えない、地味。

そう彼女に言われた。言われてみれば確かにそうだ。今までそんなことは自分の矮小な自尊心のために考えないようにしていたのだが、人に言われたことで消そうにも頭の中で反響して掻き消すことはできなかった。認めざる負えない自分自身がそこにはあった。大きくプライドを抉られた男は、自失した状態で店の前に佇んでいた。

「邪魔なんだけど、どいてくれない」

化粧の濃い華奢な装飾品で身を固めた女が、男の後ろから毒づいた。いかにもなチンピラ風の若い男を連れて。店の入り口の前に立つ男が邪魔で気に入らないらしい。

「どけよ、気色わりーんだよ」

チンピラ風の男は、気力なさそうに俯く男を強引に突き飛ばした。男は脚に力が入っていないこともあり、そのまま右肩から倒れこんでしまった。それを見て指差し笑う、通りがかりの男女。

男は肩を押さえ落ちた眼鏡を手探りで拾い急いで手元を見ると、男の腰の下には紙袋が無残にも潰れていた。彼女にプレゼントしようとした、駅前の有名菓子店のロールケーキ。しかしすでにその精巧に装飾されたそれはもとの形をなしていない。

その滑稽な光景を見て、おもむろに携帯を取り出し、男に向けて写真を撮り始める群衆。

「あーあ、もつたいねー」

げらげら笑うチンピラ風の男は侮蔑の笑みを浮かべながらそのまま女の肩を抱いて店へと入っていった。

「なーんだ、喧嘩じゃねーのか。つまんねえな」

群衆から声があがる。なんならお望み通りしてやろうか、と男の無気力な心に殺意めいた憎悪が一瞬沸き起ると、わなわなと震える手で側にあった工事用のコーンを掴もうとする。しかしそれは瞬時にあきらめへと変わってしまった。それで自覚する。自分は非力で、自分の尊厳を守る勇氣すら持ち合わせていない。そしてそんな自分がすごく惨めで、とてつもなく虚しかった。

一人残された男は群衆を一睨みすると、そのまま立ちあがって紙袋をそのままにネオン街の暗い路地裏へと逃げるように走っていった。

ネオン街の裏は戦後からの古い工場地帯で、錆着いた倉庫がそこら中に立ち並び工業廃水を流すためのコンクリートで固められた河川が縦横無尽に一帯を流れている。街灯は少なく民家もないため、ほとんど人氣はない。夜ともなれば、誰も買わない自動販売機だけが煌々とひびいった道路を照らすだけで、辺りは真っ暗闇である。ふと、暗雲に隠れて朧になった月光が廃工場の屋根の上に佇む二人の人影を浮かび上がらせた。

「あの男はどうだ」

低い声の男が言う。

「……」

「よもや、約束を忘れたわけではあるまいな」

男は、やや高圧めいた口調でもう一人のほうを見る。

「微^き慄^{れい}を見せれば墮^おちると思います。でも……」

「なんだ」

月光が姿態をほのかに照らす。片方は子供であった。

「あの男の人は酷く心を喪失しています。あれではお望みの儚^{はかない}獣^{けつ}になるとは思えません」

少年のほうは何やら不安そうな面持ちをしている。低い声の男は、少年の小さな顎を掴んで言う。

「やってみなければわからぬ。そもそも助けを求めてきたのはお主

ではないのか」

「……」

少年は目を伏せた。

「それとも……彰国がどうなってもよいと申すのか。我々は一向に構わんが」

「いや……そんな」

「ならばやれ。大王陛下も待つておられる」

少年は静かに目を閉じ、頷いた。

墮落　　〈？〉

理想はあった。

自分の理想像は確かにあった。解れてしまいそうなほどに脆かったが、存在していた。

しかし、今の自分にそれを照らし合わせようとしても、どうしても重なり合わない。こんな自分を過去の自分は想像していただろうか。いや、むしろ蔑んでいただろう。理想の自分の一片でも手に入れることすら叶わない現実。今まで見ていた将来像とのあまりの格差。その格差の尺度のぶんだけ募る嫉妬。

男の心にはさつきまで情熱で煮えたぎっていたが、今ばかりと喪失してしまつたその場所には憎悪という感情がだんだんと埋め合わされていた。それは女に対する嫉妬と、女を手に入れるだけのものを持つものに対する嫉妬。そいつは自分にはないものを持っている。何故だ。どうして自分じゃないんだ。なぜ、あいつがもって自分はもっていないんだ。

どうしようもない現実には男を酷く無力感に苛ませる。そして次第に、現実と向き合うことに消極的になり始めていた。向き合つたところで、格差を見せられる。それは男を失望させる。向き合うことは男の自尊心を傷つける。

ならば、男は甘美で都合のよい空想を見始めるしかない。理想の、なんの柵しがらみもない、きれいな、傷つかない……。

男は足取りも覚束ないようにふらふらと倉庫街を宛てもなく彷徨い、そして摩耗で明りが点滅する自動販売機の脇にある、社名の入ったベンチに崩れるように腰掛けた。

ぐつたりと項垂うなだれ、ほくそ笑み、空を見上げる。街の明るさで星す

ら見えない。月だけが煌々と月下を照らす。目が熱くなり、頬を一筋の涙が伝った。

「いったい……なんなんだろうな。俺……」

そして、ごしごしと目を拭い目を下に戻すと、ほの暗い電燈の下に人影があるのに気付いた。男は音もなく現れた物体に驚き、あつと声をあげた。それは、ぺたぺたとこちらへ近づいてくる。小柄の少年のようだが、こんな時間にこんな場所で子供がいるはずがない。男は背筋が急に寒くなり、恐怖のあまり言葉を失った。すると少年は、あと数歩というところでぴたりと止まり、拳の甲の辺りを額につけた。山吹の衣を纏い、髪はきちんと束ねられ後ろで金細工で結われているようだ。男は仰天し、ただただこの不思議な少年を凝視する。

「ごめんなさい」

と、男の耳の中に声が響いた。少年の口は開かれていない。

「な、なんだ、お前は」

問うが応答はない。少年は見るからに辛そうな表情をしている。そして、少年は何かの呪文を唱えた。一つの音楽のような呪文。すると、少年の額の辺りから青白い光が噴出し一気に周辺を呑むと、男の視界から少年が消え、次いで辺りの風景が光に消えた。

青を含んだ風が吹き荒れる。でも、肌に当たるような感触を覚えるだけで服はゆらめなかった。皮膚にだけ風が当たっているような。

「あ……あ……」

風が止み、周囲の靄が開けると、なんと男は地平線まで延々と広がる花畑の真ん中にぽつんと立っていた。甘く切ない香りが辺りに立ち込めている。そして理由のわからない充足が憎悪と嫉妬に支配

されていた心を満たしてゆくのを感じた。

そして、男は見た。いや体感した。全てを。考えうる全てを。

男は、身体が蕩けていくような感觸を覚える。精神が昂り、感情が高揚する。男が望むものがそこにはあった。理想の全てがそこにはあった。

そこで、男の心の中の何かがガクンと外れた。生への執着か、はたまた壮絶な虚無か。

精神から理性が溶け出し、別の所有物になったかのような身体が歯止めの効かない変化をし始めている。

やがて、青白い光が周囲から消失すると、男はいつの間にか走り始めていた。

点滅する電燈が猛然と駆けるそれを閃きのように照らす。黄色い体に赤い尾を持ち四つの脚で駆けるそれは、すでに人の形をしていなかった。

「あれはなんだ」

肩を落とし、荒い呼吸をする少年の脇で、深衣しんいを纏いやや目のつりあがった男が言う。

「……合あひ？です」

「ほお、やはり畜生に墮ちたか。だが合あひ？の血では不老不死は得られんな。しかし、何故奴なにゆえを支配せぬ。方へ行ってしまったではないか」

男は細い目を更に細めて問うた。

「僕は瀛州の民には知られていません。彼等の心に僕ら、龍はいないからです。それでは墮としても支配することはできません」

少年は肩を落として深い溜息をついた。

「そうか、まあよい。しかし……」

男は天を振り仰いだ。未だ星は見えず、天は淀んで明るい。

「星も見ずしてこの者はいかに吉凶を天に請うのであろうな」

少年は黙ったまま俯いていた。男はそれを気にもせず、黒い笑みを
含みながら歩を進ませる。

「戦もせずに理想だけ一人前とは、瀛州の民はよい獣畜じゅうちくとなること
であろう。のお　子琳よ」

「ねえ、さっきのはやりすぎだったんじゃないのぉ？」

「はぁ？むしろ殴らなかつただけ俺は優しかったぜ」

「きやはは、言えてる」

「あんな気持ち悪いの見てると腹立ってくんだよ。なーんか負の才
ーラっていうの、まわりに迷惑だから排除してやったんだよ、俺い
いことしちゃった」

「さっすが正義の味方。……待って、なにあれ？」

「ん、犬か？いや……違う、豚か？」

「こつちくる！逃げよう、ねえ、逃げようよ！」

「うわっ、顔だ！顔がっ……ぎゃあああああ」

「きゃあああああああ、あっあっ……」

華胥之夢

一羽の蝶がひらひらと朝堂ちやうどうの柱を縫つて舞う。

朱色の柱の間からは穏やかな光が差し込み美しい装飾が施された堂の中を仄かに照らす。その淡い光の中に何人もの正装をした人が玉座に座する人を仰いでいました。

「華胥かしよという国を知っておるか」

王様が左右の臣ものに尋ねました。

「はい、存じております。西瀛せいえいの更に西にあるという国でございます。華胥の国民は慾に囚われず、全てが自然であり、とても満ち足りていると聞いております」

王様の一番近くに並ぶ臣が拱手きんしゅして答えました。

王様は玉座の下に居並ぶ臣下を一通り見渡すと、満足げに言います。
「今日、私は黄帝わうていのように華胥におる夢を見た。素晴らしいところであつた」

臣下は一同に顔を見合わせ、やがて装を正し一人が言います。

「それは大変ようございました。華胥の夢は吉夢であるといえますから、きつとよいことがございましょう」

王様はそうかそうかと言つて蓄えた立派な髭を扱きました。

「戴四邦を統べ早や五年、私は戴の民が充足に満ち足りて毎日が安らかに過ごせるような国を造りたいとかねがね思っていた。仙帝せんていも私にそのような素晴らしい国になるよう華胥の夢を見せたのだらう」

座していた臣下の何人かは顔を曇らせた。それに気付いた王様がどうかしたのかと尋ねます。そして老齡の臣が言いました。

「恐れながら、近年の度重なる公共事業で国の金庫は底を尽きかけております。そしてその徵発で人民は我ら彰に対し怨嗟の声を上げていると、この宮中まで聞き届いております。まだ諸邦を平定し

てわずかです。地方では滅ぼした国の王族が機がないかと虎視眈眈と窺っています。ですから国の礎を固める為にも事業を一旦中止し、時をおいて時勢を考慮して行うのが賢明かと」

王様は見るとに不機嫌な顔をした。その臣は拱手したまま王様の反応を恐々としながら待っていると、王様は怒りを露わにしていきました。

「全ては民の為の事業である。治水も灌漑も城壁の補修も新田の開発も、全て民の為だ。それに不平を言うのであれば我が国の民になる資格などはない。我が意思はちゃんと下々に伝えておるはずだ。それに国庫の金など、慾に塗れた貴族共が溜めこんでおった宝物を強制的に徴収すればいいことだ。元はと言えば民に重圧をかけて得たものだろう。それを民に還元すればよい」

「それでは王族、貴族達を決起させる口実となってしまう！地方で反乱が起こりましょうぞ」

他の臣が横から上申すると、さらに王様は激昂します。

「そのようなものは一人残らず捕えて処刑すればよい。私は臣下に恵まれておる。戴四邦を平定した我が軍に挑むというのなら相手になつてやる」

「昂竜様、ですがそれでは……！」

老齡の臣が声を上げて諫めようとします。しかし、王様は言います。

「私が目指す理想の国は民にとつても理想の国である。民もそれに気付くであろうし、後の史書にも私の功績が称賛されるであろう。華胥のような素晴らしき国にする為には多少のこともやむを得ないのだ、よいな。これ以上言うのであるならば、我が国の臣下と認めぬ。この場で斬る」

臣下は一同に黙りました。参列する臣の中には袖を濡らすものもありました。王様は言い終わるとまた立派な髭を扱き始め、司農に貴族から宝物を徴収するよう命を出します。

その老齡の臣は嘆息して空^{くう}を仰ぎました。

「戦乱が終わってもまだ民は堕ちてしまふのか……」

蝶はひらひらと宙を舞っていました^が、やがて四阿^{しあ}を抜け、国内随一の庭師によつて丹精に施された庭院^{にわ}を穩やかな風に吹かれて優雅に泳ぎ、そして忽然と消えました。

章初元年、彰王昂竜の治世でありました。

華胥之夢（後書き）

西瀛：中国のこと

黄帝：中国の太古の聖王。

始 憶 〈 ？ 〉

視界に広がるは濃霧、取り巻くは香り混じりし風。

千里は、どこかに立っていた。この甘い香りは嗅いだ事がある。やがて眼前から濃霧が晴れ、風景が鮮明になった。聞いたことのある甲高い野鳥の囀り、瓊草けいそう繁る蒼莽そうもうが広がる場所。もちろん千里には見た覚えがある。夢で見た場所。芳園ほうえんの周りには朱色の薨いらかがふかれた堀へいが、先がかすれて見えないほどに遙か向こうへと続き、その中央には綺麗に澄んだ溜池と金銀細工が施された亭あずまやが庭の風景を損なわない適切な位置に建てられている。

千里はじつと目を凝らした。亭にはやはり誰かがいる。赤黒い手摺にか細い手を置き、どこか遠くをおぼろげな表情で見つめる少女。

また同じだ。

千里は少女が一番よく見える池の畔ほとりまでいき、今度こそはと大きく声をあげて呼ぼうとする。だが、声は言葉ではなかった。

唸るような重苦しい声が喉から発せられる。どうしたことが、言葉が出ない。意識では言葉はわかるのに発した途端言葉ではないものになるのである。そして気付いてしまう。自分が四足で地面に立っていることに。千里は驚いて、急いで水面に映る自分を見た。

これは！？

紅い毛並みの狼のような獣が水面をじつと睨んでいる。そんなばかな、と面をあげ亭を見た。少女はこちらを見て愛おしそうな微笑を浮かべている。そこで初めて少女の顔を見た。肩まで伸びた黒髪は陽の光を浴びて光沢を発し、穏やかな微風に靡なびいている。懐かしいような、嬉しいようないろんな感情が心に沸き躍る。やがて、少

女はまた曇った顔をして別の方向を向いてしまった。すると、水面が急激に靄に覆われ辺りは真っ白になる。千里は声をあげて少女を呼ぶが、その声はただの遠吠えにしかならなかった。

長い夢を見たかのような疲労感を抱えながら千里は目を覚ました。体中の所々が動かして伸縮する度に痛む。眠くてしばしばする目を重々しく開けると、まず自分が寝ているベッドが知っているものではないことに気付いた。そして、部屋の内装が知っているものと違う事にも気づく。白いカーテンがベッドの周りを取り囲み、独特な薬品の臭いが鼻をついた。すぐに病院のベッドだとわかった。

「目が覚めたようですよ」

若い女の人の声がすぐ側で聞こえ、次いで、そうですかと言う男の声がした。すぐに父親の声だと理解する。カーテンが開くと、やや疲れたような顔の父と白衣を着た若い看護師の顔が見えた。父はスリッパを脱いで脇に持ちこちらをちらちら見ながら看護師さんの話を聞いている。やがて、父が頭を下げて看護師を見送ると、顔色を変えてベッドの脇の丸椅子に腰かけた。そして、部屋に響き渡るような声で、

「何をしていたんだ、心配したんだぞ！」

と、まだ意識がぼんやりしている千里を叱りつけた。しかし何と弁解すればいいのかわからず、とりあえずしゅんとして父の次の言葉を待った。

「今朝街の裏山で倒れていたと聞いて驚いたぞ。あそこで何をやってたんだ、言ってみなさい。悪いことをしていたのか？」

果たして、何があったかを言っこの父は信じるだろうか。そもそも千里自身もあれが本当にあったのか怪しいぐらいの気持ちである。しかし、悪いことをしていたのかという言葉が千里の心を締め付け

る。一体誰のせいであんなことになっているか。か。

「……父さんのしていることは悪い事じゃないの」

「なに？」

咄嗟にもやもやしていたものと一緒にならずと蟠わだかまっていた感情を父にぶつけた。

「母さんや沙希や僕のことを無視して勝手に女を連れてきて、子供も作るのが悪い事じゃないの？」

同じ部屋にいる人がこちらを訝しそうに覗いている。父は啞然として千里を凝視していたが、やがて肩を落とすと言う。

「千里、前にも言ったが母さんも沙希ももうこの世にはいないんだぞ。いない人の気持ちをいつまでも引きずっているわけにもいかないだろう」

小さな怒り混じりに千里を諭した。

「……僕はどうなるんだよ」

「だから、お前は父さんの列記とした息子だ。お前はちゃんとした家族の一員なんだ、これから。何も心配することはない」

「……どこにそんな保障があるんだ！」

今度は千里の聲が部屋を越え、廊下にまで響いた。これに対し父の顔は次第に紅潮するが、やがて深い溜息を吐くと、上着を持って席を立った。

「父さんはこれから仕事だ。午後から検査をして大丈夫だったら退院してもいいそうだ。着替えはそこにある」

そう言うつと、千里に一瞥もせず部屋を出て行ってしまった。

千里も溜息を吐くと、あの夢の続きを見ようと布団に潜り込む。でも結局寝付くことはできなかった。

千里は目を瞑りながらずっと夢のことと、あの不思議な世界のことを考えていた。果たして、あの世界は本当に現実のものだったのだろうかと頬を白くて硬い枕に擦りながら思う。何年も前に行方不明になった友達が、当時の姿そのまま魔法のようなものを使い、朽ち果てた城で、馬に跨り鎧を着込んだ人達と人面の化け物に出会ったなどと他の人は信じてくれるのだろうか。おそらく真剣に取り合ってはくれないだろう。

そして、懐かしいようなおかしい興奮が身体をやんわりと包み込んでいる。そういえばこんな気持ちは何年も前から感じていなかった。新しいものを見て好奇心と冒険心に溢れるような、そんな。

だが、そんな中でも瞼の裏には翔の苦しそうな表情が見える。血を流し、必死にこちらに叫んでいた。夢でないとしたら、翔は何者かに襲われ死にそうになっているのか。助けなくちゃ、でも。夢であってほしいような、夢であってほしくないようなそんな複雑な気持ちが心を淀ませる。そこではっと思いついて、手の辺りを弄った。

「……指輪が」

翔が落とした指輪。あれが、夢かどうかの証明になる。しかし、探してもどこにもなかった。はねるように起きてベッドの側にある小さな棚も見したが、なかった。だとしたら、あの山に転がっているのかもしれない。

千里は何かを確かめるかのように窓の外を眺めた。三階の窓のすぐ前には青々とした葉を繁らす櫺の梢が陽の光を調節するかのように立ちふさがり、病院特有の真っ白な部屋の中を優しく照らす。今日は快晴だ。

結局貧血で突然気を失ったということで一通りの検査は終了し、看護師さんから待合室で少し待つように言われた。こじやれた洋風テラスのように壁一面がガラス張りの待合室では、病院の敷地内にある手入れされた小坪の庭の景色が一望でき、午後の陽光が室内全体に差し込んでいる。五列ほどに並べられた長椅子にはちらほらと患者であつたり見舞いに来ているような人が座つて、壁に掛けられた大きな薄型テレビを見たり、紙コップのコーヒーを片手に文庫本を熱心に読んでいた。千里も他の人と距離を置いて長椅子に腰かけ、テレビを眺めた。ほんとうはこんなにゆつくりしたい気分ではないのだが、ほんの数分だろうと逸る気持ちを押さえて仕方なく正午のニュースを見た。

どうやら、何か大きな事件があつたらしく、ヘリで空から中継している。その街並みを見て、千里の顔が一瞬強張つた。なんと、自分の住んでいる街ではないか。

「事件の状況を説明してください」

女性のアナウンサーがレポーターに事件の詳細を尋ねる。レポーターが立っているのは、見知っている街の商店街の前だ。千里が周りを見ると待合室の人はみんな顔をあげ、廊下にいる人も足を止めてテレビを訝しそうに見ていた。画面右上のテロップには「真海市しんかいしで男女四人が正体不明の動物に襲われ死傷」とある。

「はい、今日の午前一時頃、真海市中心部の繁華街で男女四人が謎の動物に襲われ三人が死亡、一人が意識不明の重体です。現在、保健所と県警が合同でこの動物の行方を搜索中ですが、まだ見つかっておりません。また保健所からはなるべく外出は控えるよう市民に呼び掛けています」

レポーターの後ろにはブルーシートで塞がれた路地が見え、辺りの壁には血の跡がある。何やら背筋が寒々とするようなものを感じた。そして、一瞬あのときの凄惨な光景が脳裏に鮮明に蘇る。男が獣に食い殺されるあの光景を。

「どのような動物が判明しているのでしょうか」

「いえ、生存している被害者が意識不明でその正体はまだわかっていませんが、ある目撃者によると人面の豚という証言もあり、その真偽については現在も調査中です」

人面の……豚？

千里の頭にもっと嫌なものが現れた。あの不気味な笑みを浮かべた化け物の顔だ。まさか、そんなはずはないと、焦る気持ちをなんとかためようとしてみるも、どうにもあの表情を掻き消すことができない。その中にふと、そこに翔の顔が浮かぶ。

千ちゃんの街、いやそれだけじゃないいろんな場所で、もしかしたら大変なことが起こるかもしれない。

翔が言っていたこと、もしかしたら……。いや、どちらにしろ、まずは現実か幻かを確かめなければならない。そのためにも。

「番号札、108番の方、108番の方、検査が終わりましたので受付までお越しください」

千里は急いで札を見返すと、すつくと立ち上がってテレビを後目に待合室を出た。とりあえず、確かめるのが先決だ。

だが、受付の数歩前で千里の急ぎ足は止まった。何が起こったのか一瞬千里にもわからなかった。千里の立つ場所から見える病院のガラス張りになった正面玄関から、足早に出ていく女の子に目がかちりと固定されてしまったのだ。

「あ……あれ？」

休日で混んだ病院内は人の往来が激しく、すぐに女の子は雑踏の中に紛れた。一人時間が止まったかのように停止した千里の眼には

しつかりとその女の子の陰影が焼きつけられた。白い薄手のワンピースを着て、片手に小さな鞆を持ったその女の子の顔、忘れるはうがない、夢で見たあの儚そうな表情を浮かべた女の子だ。寸分違わぬその顔、だが髪は肩までではなく、前髪をピンで止め夢よりも少し短かった。千里の心臓は急激に鼓動を加速させた。気持ち悪くなるほどに、全身に血液が巡り始める。数十秒間固まったままの千里に看護師さんが声をかけた。

「瀧本千里君ね、異常がなかったからもう退院してもいいわよ。部屋で着替えたらもう一度ここに来てね」

千里は心ここにあらずな顔で頷いた。

始 懂 〈 ？ 〉

千里は父が持つてきてくれた上下が合わない服に少々着替え、近くの神社にあったのを拾ってくれたという学校指定の茶色い鞆を肩にかけてそそくさと病院を出た。すでに父が諸治療費を払っていてくれたようで、そこは父に僅かながらの感謝をしておいた。

外に出ると、病院の門の前には報道関係者と思われる人々が熱心にカメラを撮っているのが見えた。その獣に襲われたという人はこの病院に入院している、とさっきの待合室で誰かが言っているのを思いだす。警察車両も病院の前に何台か止まっているのがその証拠だろう。小高い丘の上にある病院からは、街に高いビルがそれほどないため街の全貌が一望できる。空は先ほど窓からみた快晴からは若干移ろい、細々とした綿雲が西の蒼天に幾重もの白波をつくりだしていた。家屋が立ち並ぶ街の向こうには大型船が停泊している港、そして広大な海、地平線を挟んだその先は青々とした空。

千里は向かって右手のほうをまじまじと見た。眼の前に立ち塞がる灰色の病院の向こうには自分が倒れていた 翔と出会った山があるはずだ。でも、そんなことよりも、今の千里には別のことで心と頭がいっぱいだった。さっきから頭から焼きついて離れない、あの後ろ姿。果たして偶然なのか、錯覚なのか、今は確かめる術はない。あの子の後を追えばよかったと今更ながらに深く後悔する。やがて、そんなもやもやした蟠り^{わたかま}を残しながらも、千里は丘の下の方へと続くならかな坂道を何かを振り切るかのように足早に下っていった。

神社のある場所はすぐに分かるだろうと勇み足で古民家通りを歩いていたが、思ったよりも複雑な街路と根っからの方向音痴でなか

なか見つからず、ほうほうの体で目当ての神社の前に辿り着いた時には、すでに日は山の稜線の上にまで落ちていた。やはりこの辺りは黄昏時ともなると人の往来が全くなくなる。まだ完全に日は落ちていないにも関わらず、うつすらとした闇が辺りを支配していた。千里は空を仰ぐ。社叢しゃそうは以前訪れた昼間の時とは打って変わって、来るものを拒むかのように石段から広い参道までをどんよりと覆っていた。一応確かめるが翔の血の跡はどこにもない。意を決して鳥居をくぐり、翔が入っていた林道を目指した。他にもあそこ自分が倒れていた場所　　までに至る道があるとは心のどこかで思っではいたが、このときはただこの道を通ることしか考えられなかった。

翔を追いかけた道なき道をなんとか思い出しつつ、山の雑木林の中へと分け入ってゆく。お墓、沼、畑、と目印となるような目標を辿りながら山を登ってゆく千里の心境はどこか複雑だった。やがて水が弾ける音がし、やっと開けた場所に着いた。今改めて見ると、この場所も誰かの所有物のようで、一段降りた場所には畝と粗末な農具小屋があり、人の来る場所ではあるらしい。見つけてくれた人に感謝しつつ、辺りに目を凝らした。確かその場所の小さな滝壺の周りには鮮やかな色を帯びた桃の花が咲いていたはずだが、ただ夕焼け色に染まる深緑の木々が立ち並ぶだけで、辺りには桃色などはどこにも見当たらなかった。しかも、前にあつたはずのあちらへ繋がる穴も一切合切跡形もなく消えてしまっており、ますます千里の心は複雑混迷してゆく。

日の円底は街を挟んだ向こうの山の稜線に接し、朱色の空を背景にカラスの群が忙しない鳴き声をあげながらどこかへと飛んでゆく。眼下に広がる家屋の灯がぼつぼつとつき始め、帰宅を促す赤とんぼの曲が千里の耳も入った。ちらりと時計を見るとすでに六時を回っていた。

「暗くなる前に見つけないと。でも……」

跡形もない穴を見て、千里の心は再び不安に苛まれた。あれは夢、あれは幻。別の自分がそう囁く。でも、翔の声が頭にこびり付いて離れない。

ここは千ちゃんの来るような世界じゃないんだ。

いや、行ってみなければわからない。どんな世界だろうと構わない。この世界じゃないのであるならば。

そう、もしここであきらめたら、また同じ苦い日々が続くのかも知れないのだ。

それだけは嫌だと、心を奮い立たせ、千里は弱まる日の光を頼りに草叢を掻き分けあの指輪を探した。見つけなければ何も始まらないような気がした。見つけなければ何かが終わってしまうような気がした。

「あつた!!」

泥だらけの手をあげ千里が腰をあげたとき、すでに辺りは闇に包まれつつあった。

だが、指輪かと思われていたそれは、別の形をしていた。前に握った指輪よりちよつとばかりでかいぐらいの大きさでまぎれもなくあの紅い珠をつけているが、元の形とは程遠い。言うなれば偉い人が使う判子のような四角い形をし、持ち手には薄暗くてよく見えないが何かの象形が形作られている。その象形が天に向かって珠を咥えている。宵の中におぼろげに浮かぶ満月にそれを翳すと、よく真紅を發した。

不思議に思いながらも、これで間違いないと感じた。直感的というより既知からくる確信に近い。あつたのだ、間違いない。自分はこの世界に行っていたのだ。この世界とは異なる世界に。嬉しさに表情を綻ばせながら、泥のついた手で汗に塗れた顔を拭い、目の

前に広がる見知った街の夜景をぼんやりと見た。夕と闇が混じり合い紫の空を描き出すその月下、様々な光の点が天空の星のように眩く輝く。赤であったり、白であったり青であったり様々だ。あの一つ一つに人が生活を営んでいる。当たり前だと思っていたこの光景、千里はとても感動を覚えた。興奮からか、目に映る全てが美しく、輝いているように見えた。

「綺麗……」

そして、千里はものをしっかりと握りしめ、山を後にした。

山を降りる最中もパトカーのサイレンが街のそこら中から聞こえた。まだ、あの謎の動物とやらは捕まっていないのだろうか。身を守るものを持たない千里は、恐々とほの暗く細い道をひたすら歩んでいた。やがて神社の本殿の屋根が見える位置まできて一安心し、参道を通って早く帰ろうと足早に坂道を駆け下りる。しかし、千里の足はある物を見てピタリと止まった。

何かが、参道の石畳の上で横たわっている。木々の隙間から差し月光が僅かに照らすその物体を背筋が凍る思いで見た。渴いた喉が大きく鳴る。どうやら大きな犬か豚のようであるが、どこかがおかしい。そして、そのことに気付くのに時間はかからなかった。

その動物の頭は人の顔をつらしていた。

神社の周りからはパトカーのサイレンが鳴り響き、静寂の社に喧騒を齎^{もたら}している中、千里の荒かった呼吸が一瞬にして止まった。

薄暗い参道の中にぼつりと横たわる物体。淡い月の光がその姿態を照らした。豚のような黄色い体に赤い尾を生やし、顔は赤黒く人間の男性に極めて近い輪郭をしており、腹から血を流して苦しそうに横たわっていた。呼吸はしているようで身体が小刻みに震えている。

「だれか……そこに、いるのか」

千里は咄嗟に辺りを見回した。だが、声を発するようなものは目の前のものしかない。恐る恐る近づき、そのおぞましい姿をした生き物を間近で見た。見ると、痛々しい弾痕のようなものが腹に二つあり、誰かに撃たれたようである。そして内臓を撃たれたらしく酷い臭いが辺りにたちこめており、千里は思わず鼻を押さえた。

あの人を食い殺した獣かもしれないと、直感的に思った。こんな人の顔をした動物がいるはずがないのだ、おそらく間違いないだろう。ならば撃たれて血を流しながらここまできたのだろうか。

「いるんだな……そこに」

人のような血だらけの口が動いている。この豚に似た生き物が言葉を発しているので間違いはなかった。

「俺は……何に見える」

擦れてしまいそうな青年の声が立ち尽くす千里に問いかける。千里は言葉を探した。見たことがない生き物だ、あえて言うなれば豚だが、豚が言葉を発するはずがない。この一体何かわからない生き物が自らが何に見えるかと問うている。これほど奇妙なことはなかった。千里は言葉に詰まったが、震える声で言った。

「人の顔をした……豚……」

一瞬食い殺されるかと思ったが、この獣はそうか、と一言言つと何かをあきらめるかのように首を落とした。そしてすすり泣く様に咳く。

「俺はこんなものを望んじやいなかった……、俺はもっと、もっといいものを望んでいた……。憧れていた、無性に。これはきっと、夢なんだ……。そうだ……。そうに違いないんだ。俺が豚だなんて、そんなことありっこない、俺はもっと、もっと、そう……。見えたはずなのに……。手に入れたと思ったのに……。望んじやいけなかったのかよ……」

この生き物は酷く錯乱しながら、どこかに向かつて話していた。その話しぶりを見て千里の頭にあの馬腹ばふくのことが蘇った。人が墮ちて獣になる、確か翔がそう話していた。

「お前……。もしかかして人間だったのか？」

千里が問うと、豚のような獣は横たえた顔そのままに静かに目だけを動かし、千里を流し目で睨んだ。

「多分そうだった……。気がついたときにはこんな姿をしていた……。はずだ。変な格好をしたこどもが現れたとこまでは覚えてるんだが、もう……。よく思い出せない」

こども？

千里は少し引つかかるものを覚えた。

「……ははっ、でもなんだか自分がもとから化け物だったような気もしてきたんだ……。なんの柵しかいも……。苦しみもない……。自尊心も傷つかない……。俺は、最初からそうだったのかもしれない……。俺をバカにしたやつを食い殺したときは……。とても、とても爽快だった。狂気と憎悪と本能のままに、やつらを食い殺した。酔っていた、なんの責任もない快樂に……。本能のままに生きること」

そう言つと、口から大量の血を吐いた。そして、目を細めて言う。
「……罰……。かな。でも見てしまったんだ。あんな綺麗な場所……」

望むものが全部あったんだ。お前も気をつける、あれを見れば生きるのがばからしくなってしまう」

「……綺麗な場所？」

人語を喋る獣は、問いに答える前に豚の鳴き声のような咳きを三度して再び血を吐いた。もう長くは持たないだろうと素人目にもわかる。

すると光を失いかけていた目を突然カツと見開き力強く千里に向かって言った。

「……きたぞ……逃げろ……！」

何が？と、聞く前に入口から参道へと続く石段にゆらゆらとこちらへ向かってくる人影があるのがすぐに目に入った。

「……わかるんだ……臭いがするんだ」

千里はその獣の言う事に何か嫌な予感がして、慌てて虫の息の獣をそのままに手水舎ていずいの裏に隠れて様子を窺った。

すると月光が及ばない闇の中から二人の人間が現れた。やがて、横たわる獣の側まで来るとほのかな月光に照らされその姿が露わになった。一人は長身の立派な髭を蓄えた男性で、髪を結び纏め何枚かの衣服を重ね着し、腰を締める帯には剣が携えられている。対してもう一人は翔とよく似た山吹色の衣を着ており、同じぐらいの年若の少年であった。明らかに日本人ではない風貌をしているし、だが現代の中国人でもなさそうだ。そう、あの世界の人間のような……。

一気に噴き出した汗で衣服が絡みつくように身体を包み、鼓動が段々と早くなる。そして恐る恐る苔生した水盤と柄杓の間から見つからないようにこの次第を見守った。

長身の男は片膝をつくと、この死にそうな獣を助けるわけでも憐れむわけではなく侮蔑を込めた眼で見下ろしていた。一方脇では少年が顔を背けて、袖で鼻を覆っている。

何かを話しているようだが日本語ではないので千里には全く聞き取

れず、しばらくやきもきしていると、突然ぎやつという悲鳴が境内に響き渡った。男が脇から剣を抜きあの獣の喉を掻っ切ったのだ。鮮血が飛び散る間も少年はずっと鼻を押さえ目を背けたままであった。それが対照的であり、違和感を覚える。

千里はその光景を見て狼狽し、汗腺が全開になったかのように身体中から汗水が垂れた。

見てはいけない何かを見てしまった。そう思わずにいられない一部始終が目の前で繰り広げられたのである。

「誰がいるのか!？」

いきなり本殿の裏から声がし、そこから懐中電灯を持った警官二人が出てきて千里の背後を訝しそうに照らした。千里は声をあげて驚いたが、すぐに知っている制服を着た警官だとわかったので胸を撫で下ろし、警官に獣がいた場所をわなわなと震える手で指差した。

「あそこに、人を襲った動物が倒れて……!」

警官はそれを聞いて驚きながらも、わかったと頷き、警棒片手に参道の辺りを懐中電灯で照らした。

「どこだ、何もいないぞ」

「……そ、そんな」

確かに、目を離れた一瞬の隙にさっきまでいた人や獣はすでに影も形もなく消え失せていた。

残っていたのは、ふわりと降り注ぐ月光の照明と赤黒い血の跡だけであった。

始 懂 〈 ？ 〉

千里が境内にいた警官二人に付き添われて石段を降りると、鳥居の前の道路には3台ほどのパトカーと白いワンボックスカーが電灯の少なく薄暗い道を封鎖していた。赤いランプの点滅が辺りを煌々と照らし、近所の人が怪訝そうに窓や軒先から顔を覗かせている。恐る恐る警官の一人に何事か聞くと、猟友会と警察が深手を負ったあの猛獣をこの辺りまで追い詰めたのだという。それで神社の境内を探していたところ隠れている千里を見つけたのだとか。境内に残る血の跡を見た警官は、すぐに肩の無線でどこかへ連絡し千里を保護した。

「本当にいたのかね、一体やつは何だったんだ？ 犬か、虎か？」
猟銃を背負った初老の人達が経緯いきさつの話を聞くなり千里に詰め寄って尋ねた。みなどこか青ざめたような表情をしている。

それは。千里は言葉に詰まる。本当のことを言っても果たして信じるだろうか。いや、というより、この人達の表情はそうであって欲しくないというような顔だ。知っている、何だったのかを。

「暗くて…よく見えなかったんです。でも、あれは多分…犬でした、おつきな」

あえて嘘をついた。それを聞いて猟友会の人達は安堵したように顔を綻ばせた。

「そうだよなあ。おらあてつきり神様を撃っちまったんじゃないかってひやひやしてんたんだ」

「…神様？」

「そうよ。こいつ、どてっ腹に弾撃ち込んだときに人の声あげたつて言うもんでよ。しかも人のつらだったてさ。おれも…なんとなくそんな気がしてびびってたが、どうやら違うらしいな。ま、あの

怪我じゃ長くはねえだろ。すぐにこの騒動も静まるさ」

「死体はどうします？ いちおう上に報告せにやなんのですが」
後ろから背広を着た警官が無線機片手に尋ねた。

「この神社の真裏は全部山だ。山の所有者も何人かおるしな。もう暗いし死体探しは明日にしよや。それになあ……」

「……何かあるんですか？」

会の長と思われるその人は、帽子をあげて白髪混じりの頭を撫でた。

「何人も消えとるんじゃ、この山は」

断つたのだが警察車両で家まで送ってもらうことになり、事情聴取をうけ家に着いたときにはすでに11時をまわっていた。閑静な住宅街の一角に立つ家の門前には朝に見たシャツを着たままの父が待っていた。そして、へこへこ頭を下げて送ってくれた警察の人を遠くまで見送ると、父はがっくり肩を落とし、何も言わず家の中へ入ってゆく。千里もあえて何も言わず家の中へと入っていった。

しかしなぜか、そのときは怒りの対象である父の自分に対する失望が怖かった。無言の父がひどく恐ろしいものに見えた。その畏怖を必死に怒りで掻き消すのにそのときは必死だった。罪悪感を消そうとしていたのだろう。

急いで部屋へともどった千里は、ドアの前でぐったりとへたり込んだ。そうして何分かじっとしていると今までの事が一枚絵のようになつて眼前に写しだされた。眼を瞑って深呼吸をし興奮する心を落ち着かせると、握りっぱなしで汗ばんだ拳を開いて中を見た。

確かに、ある。

決してまやかしではなかった。非現実の端緒がこの手の中に実在する。それだけで千里の胸は躍った。それと同時に、翔の安否がとてつもなく心配になった。

まじまじとこの小さな金の印を見つめる。持ち手の象形は小さな龍であった。精巧に形作られた金の龍がとぐろを巻き天に向かつて紅い珠を咥え、印判の面には何かの文字が彫られている。印の側面には何かの紋様が刻まれ、龍の体の隙間の穴には紫の組紐くみひもが通されており、いかにも値打ちがしそうな一品である。

だが、これがなぜあの指輪から印になったのか全くわからないし、使い方もよくわからなかった。そうして印を手で弄りながら時が過ぎる。すると、階下から玄関のドアが空く音が聞こえ、聞き知らぬ女性の声が漏れ聞こえた。すでに時計は12時を指している。

「……」

千里は起き上がると、何かを遮断するかのように部屋の鍵を閉め、そのまま耳を塞ぐようにベッドに飛び込んだ。手にはひつしと印を握りながら。

人は夢を見る。夢は人を魅せる。現実と非現実のおぼろげな狭間の一瞬。無意識に記憶から掘り起こされた深層の願望。それが睡眠という生命活動の中で光を当てられ、その閃光のような瞬きで願望というものの影を落とし夢として映し出す。だが、夢は知らないものを時として映す。古来より人は、それで吉凶を占ったり、はたまた未来、もしくは別の世界を見せている。など様々に夢を現実の指針とした。それは、夢が苦痛に満ちた現実とは違い儚くとても美しいものであるから、なのかもしれない。人は夢と書いて願望とした。人は夢に憧れた。

匂いがする。甘く切ない香り。微風が肌に当たる。強くなく包み込むように。霧が晴れる。白い幕が左右に開けるかのように。

気がつくとも花畑の中に顔を埋めうつ伏せになって横たわっていた。

「……また」

ざわざわと木々が空でざわめく。葉の隙間からの日が丁度頼に当たりじんわり温かい。体軀を起こし、霞んだ目をこしこしと擦る。やはり同じ庭園でもどこか様子が違う。

いつも花々の上で優雅に舞っていた蝶がおらず、響く鳥の囀りもない。遠目にいつもあつた東屋を見ると、やはり彼女はそこにいた。しかし東屋の向こうには、以前にはなかった立派な堂が建ち、その朱色の柱の隙間からはその堂の庭院がぼんやりと見えた。そしてそこには幾人かの子供が毬で楽しそうに遊んでいる。

千里はふらふらと起き上がり、導かれるように東屋へ向かった。彼女は千里が近づくのをチラリと見ると、僅かに微笑し、東屋に渡された別の橋から堂の方へ歩いて行つた。何がなんだかわからず、導かれるままに朱の橋を渡り彼女についてゆくと、彼女は堂の真下で膝を軽く折つて子供たちとなにやら話している。それを聞いてこくこくと頷く子供の姿はみな、翔の着ていたような山吹の深衣を纏つて髪を一つに結っていた。

彼女はふいにこちらを向くと、純白の袍と艶やかな黒髪を？風にひらめかせながら千里のほうにゆらゆらと微笑を浮かべながら歩いてくる。その後ろで子供たちはまた堂の中へ入つて毬で遊びだした。千里は緊張と驚きでその場を動けなくなつてしまふ。鼓動がだんだんと早くなり、目が泳ぐ。彼女は千里の前で足を止めると子供たちに接した時のように膝を軽く曲げて 千里の頭を優しく撫でた。一瞬何が起つたかわからなかったが、すぐに悟る。千里の姿態は獣のものであつた。だが、撫でられたことが千里の緊張を一気にとき解し彼女の眼を直視することができた。そして、彼女はその丹唇を開き千里に言う。

「もうすぐ、お会いできます」

そこで千里の視界は白い靄に覆われ意識はまた遠のいた。意識が遠のいたあと頭には優しい手の感触が残っていた。

空谷足音

「残念ですが、もうお子さんは自分の足で歩けないかもしれません」

そう医者に宣告されて2カ月が過ぎた。その時隣にいた母は泣き崩れたが、自分はあまりに突然な現実直面したためか、ただ呆然と泣き崩れる母を不思議そうに眺めていた。

今日も慣れつつある車椅子に乗って施設内を移動する。そんな自らの意思で動けない自分がひどく惨め。そう、毎日が苦痛だ。リハビリによる回復という希望にすがりついて、一か月血反吐を吐くような思いで訓練したが、どうしようもないじれったさに気が狂いそうなほど嫌になって結局あきらめた。それから全ての未来が真っ暗になった。慾を満たすにもこの不自由な脚が邪魔をする。他のみんなが楽しそうに日常生活を謳歌するのを見て尋常ならざる嫉妬を抱いた。劣等感でおかしくなりそうだ。そして心のほとんどが深淵な闇に溶けていった。

二か月前、僕は理不尽な交通事故に遭った。相手が飲酒していたことによる飲酒運転の事故。轢いた相手は僕を轢いたあとにそのまま電柱にぶつかって、死んだ。僕は背骨を損傷し、昏睡状態から気付いた時には足に感覚がなかった。しばらくして怒りが込みあがっても、責める相手はもうこの世にはいない。怒りの矛先がすでになどいときほど苦しいものはない。怒りは内向きになり、やがてどろどろとした憎悪の坩堝に溶解してゆく。やがてそれは嫉妬という刃に鍛錬され、無関係な他人へと向けられる。みな哀れな目で見てくる、とても不快だ。高校の同級生も一か月ほどは同情してか病室に見舞いにきたがそれ以降は音沙汰もない。僕は無気力になった。全てに、現実に絶望した。まさかこんなことが自らに起こるなどと、考えることもなかったのに。そして、いつしか空想の世界へと精神をもつ

ていくことが多くなった。こんな苦痛に満ちた世界など、滅びてしまえばいいと何度も呪いのごとく願った。

そんなある日、病室の窓を開けて月夜を眺めて軽く現実逃避をしていた。涼しい風が室内に入り込み、薄い水色のカーテンが揺らめき頬に掠る。そしていつも考えるのだ。今一度、この自らの脚で歩けるならば…と。思う存分。

その時、半開きの窓がカラカラと開いた。カーテンの影から一人の子供が顔を覗かせる。ここは五階である、人が簡単に登ってこれる場所ではない。あまりのことに驚いて、声を出そうとするが、闇に沈んだ精神はそんなことではすでに微動だにしないほど浮世めいていたためか、すぐに冷静さを取り戻した。そして、これはチャンスだと思った。

少年は、見たことのない衣装を纏い、髪を綺麗な簪^{かんざし}で結っていた。腕輪をし指輪を填めていた。少年がベッドの側に寄ると、頭の中に声が響いた。

「あなたから強い憧れを感じました」

「なっ…!？」

この子供が言っているのか。だが、口は噤^{つぐ}んだままである。テレパシーだろうか。すると少年は申し訳なさそうに軽く頭^{くちく}を垂れた。

「ごめんなさい…僕にはこうするしかないんです」

と、声がし、少年が頭をあげると手の甲を額に当てるような動作をした。その瞬間、目の前が蒼い光に覆われ、何か温かいものに包まれるような感触が体中を覆った。

しばらくして、ゆっくり目を開けた。少年はすでにいなかった。そして月光に照らされる自分の腕を見て驚愕する。白と黒が入り混じった毛が腕にびっしり生え揃っているではないか。しかも、今まで感覚がなかった脚に感覚が戻っている。そこで歓喜する。心躍り、

急いで自らの脚で地面に立った。だが、微妙な体の不均衡に違和感を覚えた。

そうか、前脚で支えればいいのか。

四つの脚で体を支えると、なるほど、とても安定する。そこでさらに全身の毛が喜びに逆立つ。こんなに自分の脚で歩けることが気持ちのいいことだなんて、思いもしなかった。

やがて、とてつもない空腹と慾が空っぽの頭を支配する。そのあとの記憶はない。

ただ　　久しぶりに楽しかったような気はする。

空谷足音（後書き）

クウコクのソクオン
空谷足音

人気がない谷に響く足音。転じて非常に珍しいこと。また予期しない喜び

「莊子 徐無鬼編より」

人の絶叫が深夜の暗闇でまるで洞穴の中のように閑寂の街にこだましている。その中で子琳は一人打ち震えていた。

一方で傍らの人物は不満そうな笑みを浮かべている。そして、子琳の心はかつてないほどに動揺していた。

「あの怪物は何ぞ」

今、僕は何をしているのだろう。

「と、禱とろう？と申します」

どうしてこうなったのだろう。

「奴の血は不老不死か」

「いえ…」

今晚だけで無関係な東瀛の人間を4人も墮とした。

「ふん、またただの蛮獣か」

どうしてこうなってしまったんだろう。

「人の性とは寧猛よの…。かくも醜くなってしまう。人はどこでも変わらぬ」

彰しょうを助けたい。そのために、今こうして人を墮しやうとしている。

「子琳よ、早く不老不死の血をもつ獣を献上せねばならん。こんな
ればあれをやるしかなかろう。早う彰国に出兵してほしいのだから
？」

どうして僕はこんなことをしているのだろう。

「…」

子琳は天を仰いだ。戴邦では綺麗に見晴らせた星空は、ここでは、
淀んで見えない。

思えば、全ての始まりはあの瀑はく？との出会いであつた。

静かに目を閉じ、子琳はあの頃に思いを馳せた。本当にあれをやる
べきなのかを自分に確かめるために。

三年前　　。

頭の鈍痛で目が覚めた。

まず最初に感じたのは藁の匂いと頭に当たる堅い枕　　。

ゆっくりと、長い間閉じられてべたりとくっついた瞼を開き、凝り
固まった首をギョツと捻って辺りを見回した。

霞んだ眼を擦りながら、まず最初に粗末な木の卓子つくえの上に置かれた
自分の装束が目に入った。

数秒間それを見て、自分の服が木綿の薄汚れた衣服に変わっている
事に気づくと

慌てて上体を起こし自分の指を見た。

そこに詰められているはずのものが無い。

敷かれた藁を脇にどけ、まだ痺れが残る身体を気にも止めず
木板を重ねただけの寝床の回りをぐるぐると探し回ってみたが結局
見つからなかった。

あれがないと帰れないのに……

途方に暮れると大きく溜め息をつき、朽ちた木窓の前の一段高くなっている床に腰をかけて冷静に自分の置かれている状況を飲み込もうとした。

所々ひび割れた土塊の壁に囲まれた部屋は湿っぽく、薄暗い。

六畳ほどの部屋にはこの藁の寝床と、卓子つくえと、書簡が詰まれた棚に、簡素な背のない丸椅子、茶褐色の瓶かめだけでありとても質素な様子だった。子琳にとっては全く身にも頭にも覚えのない場所である。

栓で固定されわずかに開いた木窓からは、ほのかに明るいい外からの光が差し込み、ぽたぽたと地面を叩く雨音が聞こえる。

頭を軽く搔いて、どうして自分がこんなところにいるのか、目を覚ます前のおぼろけた記憶を拳を頬に当てながら辿ってみた。

あの場所に降り立ったあと、街が燃えていて……知らない男達に捕らえられて……青い光が森に落ちて……その後の記憶がない。

そうか、あの微恍うしろめを見て気を失ったのか。

今思い出しても心が震える。なんと美しい光景であったことだろう。龍も起こせると言われるが、あの規模となると自然の偶然に頼るしかない。うらうらと記憶を掘り起こして、かの美景に浸っていると突然目の前の立て付けの悪そうな木戸が軋む音をたてて開いた。ひよつと驚いて子琳は少し構える。

「あ、気がついたのか」

入ってきたのは赤黒い皮甲かわよろいを纏った盛壮な青年。子琳を認めると、

ずかずかと部屋に入り、瓶に入った水を柄杓ひしゃくを用いて旨そうに飲みだして、それを子琳にも勧めた。

「飲むか？」

子琳は俯いたまま首を横に振る。喉は渴いていたが、知らない男にいきなり水を勧められて、そんなに易々と飲むわけにはいかない。男は、そうか、と言うと水を欠けた椀に汲み机に置いた。

「毒なんて入ってないさ。うまいぞ、今朝麓の湧き水から汲んできたんだ」

それでも拒む子琳を見て男は訝しそうに首を傾げた。

「大丈夫、何にもしやしない。その証拠にちゃんと床に寝かしてもらってただろ、寝心地はあまりよくないけどな」

男はグラグラと揺れる丸椅子にどっしりと座ると、椀に入った水をガブガブと飲んで、脇に携えた剣を卓子つくえに置いた。

すると、青年は急に顔を暗くして目を据えた。

「建恭の件は残念だったな。だがな安心しろ、仇は必ず俺達が討つ」

「……建恭？」

子琳は思わず聞き直してしまった。

不思議そうな顔をする少年を見て、男もまた不思議そうな顔をした。

「お前、建恭の民だろう。道端に倒れてた所を瀑吾様に助けられたって聞いたぞ。助けられたのは……えーっと、お前と、あと女の子だったかな」

瀑吾という名前を聞いてあの恐ろしい目が頭にちらついた。あの美しい光景が掻き消されてしまいそんな眼光、蛇に睨まれた蛙の気持ちばかりそうだった。

しかしながら何か誤解されているらしい。建恭という名前はどこかで聞いた事があるような気がするが、状況を考慮すると、おそらくあの燃えていた街の名の事言っているのだろう。

「いや、僕は」

と、言おうとしたら、男はその大きな手を子琳の頭に置いて宥めるように

「言つな、建恭であつたことは聞かん。惨い話を子供に言わせるわけにはいけないからな」

完全に青年は自分をその建恭の人間と思っているようだ。

しかし、この男が瀑吾から聞いたという事は、瀑吾がわざと自分の事を伏せているのだろうか。

自分を龍だと言つのも憚られるので、この偽りの設定に合わせた方がよさそうだ、と子琳は判断し、コクリと頷く。男は頭をぶつきらばうに撫でながら卓子にきちんと畳まれて置かれた子琳の服をチラリと見た。

山吹色の絹の装束。あれだけ吹き付けられた血はすでにどこにも見あたらなかつた。

「お前、商人の倅か？それとも、偷児か？」

青年が疑うのも無理はない。

絹の衣服など普通に暮らしている庶民が簡単に手に入るものではなく、極限られた層の人間しか纏う事は許されない。金持ちでなければ、盗むくらいしか手に入らないだろう。当時は絹一反で家族が一年食い扶持に困らないぐらいの価値があつた。

「父は……建恭で塩商と蚕績を営んでいました」

とつさに思いついた嘘の設定を言つた。と言つてもどこかで聞いた誰かの肩書をそのまま受け売ただけであるが。塩商とは、塩を作り売ることを生業とする商人のことで、国によつては政治に口出しできるほどの権力と財力をもつ。蚕績とはそのまま、蚕を飼ひ、その繭から絹糸を紡ぐ職だ。

「へえ凄いな。ところで名乗ってなかつたな。俺は瀑？様の下で衛士をやつてる趙駿、字は廉毅っていうんだ。廉毅って呼んでくれ。」

それで、お前は……子琳だっけ」

名は伏せていなかったようだ。確かに、龍かどうかはこの名前からは分からない。龍には二つ名があり、それならば龍とわかるかもしれないが。子琳はとりあえず頷いておいた。

「実はな、少しの間だがお前を世話するよう瀑はくあ？様から仰せつかったんだ」

「世話？」

「そうだ。と言ってもここからどこにもいかないよう見張ってるってことなんだがな」

要するに、逃がさないように見張りをつけたということだろう。ならば指輪がないのも、逃げないために取り上げたと、想像がつく。

「ここは、どこなんですか」

「高鮮こうせんの山城だ。……まあ、教えても差支えないだろう。建恭が成軍によって陥落してな、瀑？様は当面の対成軍の最前線拠点としてこの高鮮を選んで、今は近隣の城からの援軍を待っているんだ」

子琳に嫌なものが過る。

「ここも……建恭みたいに」

だが廉毅は軽く笑ってこれを否定した。

「安心しろ。この前、成のやつらに俺達が大打撃を与えてやったから、そんな簡単にここは落ちないさ。しかも守将はあの瀑？様だ。知ってるだろ？瀑？様が籠って落ちた城なんて一個もねえ。まあ……今回けんきようはしもうがなかったんだがな」

子琳は、熱く語る廉毅の瀑？に対する信頼を感じ取った。そこで、少しでも情報を聞き出そうと建恭の民になりきった気持ちで少し熱っぽく、

「しもうがなかったってどういうことですか！？」

と、演技の怒りをぶつけてみた。廉毅は少したじろぎ、

「……うん、まあここだけの話なんだが、実はな……」
と、辺りを見回して小声で話そうとしたところ、

「駿！喋りすぎだぞ」

快活な声が土間の入り口から響いた。その瞬間廉毅は顔をぴしゃりと歪めて、急いで立ちあがると入口に向かって恭しく拱手する。廉毅に隠れて見えないが、子琳には声を聞いてすぐにわかった。

「瀑？だ。」

子琳の体は一瞬にして硬直した。

飛龍乗雲 へ？へ（後書き）

禱？：虎に似た体に人の頭を持っており、猪のような長い牙と、長い尻尾を持っている。尊大かつ頑固な性格で、荒野の中を好き勝手に暴れ回り、戦う時は退却することを知らずに死ぬまで戦う。

兪児：こそどろ、すり

瀑？は幾人かの従者を戸口に控えてこの狭い部屋の中に入ってきた。片手に剣を持ち、いつでも危急に対応できるような武装をしている。廉毅れんぎはと言えば、緊張した面持ちで慌てて戸棚からできるだけ綺麗な碗を選び、水を汲んで瀑？の前の卓子つくえにそっと置いた。

「要らん、すぐに出る」

「は、はい、すみません」

廉毅は裏返った声で平謝りし、瀑？の視線を遮つてるとわかるとそそくさと脇に避けた。一方、瀑？は立ったまま、床とこに座って俯く子琳を見据え、一呼吸置くと不似合いな微笑を浮かべた。そして子琳に向かつて言う。

「無事で何よりだ。日が落ちたら私の幕営ばくえいに來い、話がある」

そう言うのと、さっさと羽織った朱の裱衣せきいを翻し部屋から出て行ってしまった。

子琳はぽかんと口を開けて瀑？の背を見送り、そのまま視線を廉毅に向けた。廉毅はふうと溜息をついて汗を拭っている。よほど恐縮していたようだ。

「あの威圧感には毎度肝を冷やされるよ」

そう言いながら碗の水をぐびっと飲み干した。

頃合いを見計らって廉毅に砦の中を見せてもらうことになった。

先ほどまで降っていた雨は止み、雲の隙間からは陽の白光が差し込んで緑と褐色の大地を温かく照らしている。地面は水で濡れ、建物の軒先からは溜まった雨水が滴っていた。子琳は雨後のひんやりした空気と景色が好きだった。

外に出て初めて土間の外観がわかった。さっきまでいた廉毅の部

屋は兵舎の一部分で、外から見ると兵舎は土造の長屋が湾曲したような形をしており、それと同じものがもう一つ正面に立ち並んで間に広場を形成していた。広場には井戸と薄汚れた白い天幕が張ってあって、その中で幾人かの人が盤を囲み真剣な顔をして碁をしている。

廉毅曰く自分の部屋を持てるのは一定以上の位をもつ人間か、将を守る衛士くらいだと言う。確かに、普通ならば何人もの人が狭い宿舍、悪ければ天幕に鮎詰め状態で雑魚寝だろう。自分だけのものが与えられるというのはかなり贅沢なことなのだ。子琳もそれはなんとなくわかっていた。

皆内を順繰りして見回っていると、やけに子琳達に視線が突き刺さる。童が宿营地にいるのは珍しいことではない。子琳ぐらいの年格好の者でも戦地に赴く輩もいる。ほとんどは後方など本戦に関わらない場所に回されるか、士官の雑事の世話。もしくは周辺の村から物売りに来たりして営内を徘徊している童もいる。

だが、兵士達は子琳と廉毅を見るなりひそひそと囁いていた。兵舎に溜まっていた中の一人がこちらに向かって嘲笑めいた声をあげた。

「おい、廉毅。お前瀑？様に童子のお守を任されたんだって？大変だな、はっは」

「嫁さんもまだだつてのに気の毒なこつた」

廉毅はこれらの冷やかしに対して苦虫を噛み潰したような渋面で、軽く手で払った。すると違う方からも、

「あの瀑？様がまさか童子を連れてくるなんてなあ、なんかの前触れじゃねえのか」

「いやいや、あの餓鬼は瀑？様の遠戚らしいぜ」

「違うな、娼婦との間にできた隠し子じゃねえのか」

「ほんとかよ」

勝手な噂が着々と出来上がっているらしい。廉毅は渋面ながらも子琳に教えるように言う。

「気にするな。みんな戦まで誰かの噂でもしてなきや暇で仕方ないんだ。いずれ俺からみんなに言っとくからさ」

子琳は複雑な気分で廉毅の後をついていった。

子琳は初めて砦というものの内部を見た。人が命を懸けてこの砦に籠り、外部からの敵に抗う、壁。だが子琳はあまり美しいものとは思わなかった。見回ってみてわかったのだが、冗談を言うほどの余裕のあるものは全体の極一部なのだ。ほとんどの者は建恭陷落の報を受け、修羅のような形相、または怯え緊張している様子だった。

砦は堅牢と呼ぶに相応しい。牢^{ろう}齊^{せい}山^{ざん}から連なる山々の谷間の斜面に築かれた高鮮砦は、彰の平原へと繋がる谷間の道路のほとんどを塞いでいた。背後に絶壁の断崖を構え、前方は川が横断する台地を望む。地の利によって川を越え斜面を登ってきた敵に対して有利に戦えるのである。砦は建恭までとはいかないが大体3丈（この時代では約5メートル40センチ）ほどの高さの城牆に囲まれ、何重にも木の柵がその周りを囲む。そして砦の櫓からは成^{せい}の広大な領土を眺めることができた。そして山の麓には味方と思われる軍団が彰旗を掲げ陣を張っている。

子琳はとりあえず、瀑？の意に従う事にした。目を盗んで逃げ出そうとしたところで今の子琳の足で逃げられる距離などたかが知れているし、指輪を返して貰わなければ人を墮とすことも臯術も使えない。不服ではあるがどちらにしろ従うしかないのだ。そのうち隙を見て指輪を奪うか、他の龍が助けってくれるだろうとたかをくつており、子琳の中では徐々に楽観的な部分が多数を占めてきていた。

廉毅は見せられないという場所を除いてお願いすれば大抵の場所は見せてくれた。その一つ、練兵場に差し掛かるうとしたところ、そこから喝采が起こった。何事かと廉毅と顔を見合わせ覗いてみたところ、人の群がりの中に大弓より少し小さい小型の弓を引き絞る少女の姿があった。子琳よりも少し年上というくらいか。少女が見つめる先は遠く離れた射侯^{まど}。

ぴりりとした緊張が辺りに張り詰め、少女が弦を離れた瞬間、矢はふわりと宙で弧を描き射侯にぶすりと刺さった。そしてまた喝采が起きる。

「嬢ちゃん、すごいな」

少女は無邪気に喜ぶ表情など見せず、まるで当たり前かのような顔をして結った髪をかき上げた。

「私、もつと練習して成のやつらをみんなやつつけてやるの」

「その意気だ、感心だねえ」

兵士達は少女を煽ててやまない。三つ並んだ射侯には全部矢が刺さっている。

少女は呆然と立っている子琳の方をちらりと見ると、弓を置いて子琳の方へ近づいてきた。まだ幼さの残る顔には小さな傷が幾つかあるが、子琳から見ても比較的可愛らしい出で立ちをしている。

廉毅はそつと子琳に耳打ちした。

「あの子がさつき言ってた、子琳と一緒に瀑？様がここに来る道中で助けた女の子だ。えっと……」

「瓊凜^{けいりん}よ、よろしくね」

瓊凜は透き通るような瞳で子琳を観察するように見下げた。子琳は少したじろいで、廉毅の衣服の裾を掴む。子琳は少し人見知りの気があり、どうにもずいずい迫られるのに慣れてはいない。

すると、瓊凜は目立つような声で子琳に言った。

「あなたのお父様も建恭で塩商と蚕績を営んでいたらしいわね。奇遇ね私もなの」

子琳はもつとたじろいだ。

飛龍乗雲 へ？く（後書き）

襦衣：衣服などの上にはおり、肩にかけて首で結ぶマントのようなもの。

子琳しりんの体はいつのまにか廉毅れんぎの脚の裏に半分隠れていた。

もし、瓊凜けいりんに塩商の詳しいことを聞かれても答えられるわけないし、そもそも相手が建恭内でそんな商売敵を知らないはずがない。問い詰められれば、言い逃れる自信はなかった。

それを察したのかどうなのか、廉毅が顎を撫でながら瓊凜に尋ねる。「もしかして君たちはお互いを知ってるのか？」

子琳はもちろん知るわけがない。一方、瓊凜はどこかツンとしながらこれに答えた。

「いいえ、知らないわ。ただ、もう一人助けられたって聞いてね、気になって少し話を聞かせてもらっただけよ」

どうやらさつきいた部屋のどこかから聞かれていたらしい。

「それで、あなた　子琳だっけ。私、建恭で他に塩商を営んでいた商人がいるなんて聞いたことがないんだけど、それって本当なのかしら？」

ここで嘘がばれたらおそらく面倒くさいことになるだろう、と子琳は直感した。嘘を真実として取り繕うのにまた嘘を塗り固めていくのはあまり賢いことではないことぐらいわかっているのだが、その時の子琳はぐらりと嘘を塗り固めていくほうに揺らいでしまう。

「僕は……えっと、そう。最近建恭に移ってきたばかりで、その……多分あんまり知られてはない……みたい」

ふうんと、瓊凜は疑うように子琳を見つめる。その見つめる目は泣きはらしたのか少し赤い。

「まあいいわ。そうね……ここじゃ人が多いから少し歩きましょう」

瓊凜はそう言うすくと竦んでいる子琳の小さな手を引いて、砦の高台に向かつて歩き出した。強く握りしめる手は、弓弦を引いたばかり

で少し熱っぽい。子琳は戸惑いながらも引かれるままに、この少女の後についてゆく。一瞬困ったような顔をした廉毅も少し距離を置いてこの二人についていった。

「……あなたも両親を亡くしたの？」

高台にある厩へ至る坂を登りながら、瓊凜は尋ねた。それは、同情しているようであり、そうなのだろうという風な口ぶりであった。

子琳は迷いつつ静かに頷く。罪悪感が心をふっとすり抜けた。

すると瓊凜は麓に広がる大地を見やる。ここからは遙か遠くにある成の城と思われる褐色の城壁まで視認できた。

「そう……残念ね。私もなの。城から逃げてる途中でね、運悪く成軍の奴らに捕まって財産を洗いざらい奪われて、拳句に殺されちゃったの」

瓊凜は空に呟くように言う。子琳は静かに相槌を打った。

「私は運よく物陰に隠れてただけど……目の前でね。お父様はとても厳格な人だったの。それはもう立派な人物だった。でも、その時のお父様は莫迦みたいに命乞いしてたの。あんな姿見たことなかったし、見たくなかった。側に兄妹とお母様いたし、必死だったんだろっけど」

子琳は首で相槌をしたまま目を伏せた。

「でも、あれだけ命乞いをしたのに、成軍はその場で家族と下人みんな斬り殺したの。家畜でも殺すように、笑いながら。何かしたわけでもないのに、何もしていないのに。……絶対に許せない。それで誓ったの、絶対に復讐するって」

はきはきと喋りながら、瓊凜の顔はいつのまにか紅潮していた。子琳からは瓊凜の顔は見えない。でも、その心情は察することができた。龍は人の心を感じやすい。直接触れていれば尚更だ。その感情が龍の心情にも影響するのである。

「……いきなりこんな話で、ごめんね。でも、どうしても誰かに言いたかったの。こんなところで話せるような人もいないし……」

子琳の首は次第に落ちてゆく。瓊凜は寂しかったのだろう。同郷にいる人間で助かったのは今のところ自分と、この瓊凜だけあり他には誰もいない。そう、一緒に痛みを分かち合える同じ境遇の人間がいるということがどれだけ励みになるか、それは計り知れない。それが偽りであるなら、自分はこの少女に残酷な嘘をついているということになりはしないだろうか。嘘をついたことで、この少女に虚構の希望を与えてしまったのではないだろうか。後悔と罪悪感が子琳の心に押し掛かる。

元をただせば、どうしてこんな嘘をつかなければならなかったのだろう。何をかばっているのだろうか。子琳はだんだん自分のしていることがわからなくなってきた。

「……あなたも憎いでしょ？成軍が」
「……」

子琳は黙った。確かにそんなことをする奴らなんて憎まれて当然であるが、子琳には元々関係のないことだし、もちろんそんな憎しみはない。だが、彼女は　そうだ、憎いという返答を欲しているのが痛いほどわかった。

「うん……憎い」
それを聞いて瓊凜の顔に少し明るさが戻った。対照的に子琳の表情は曇ってゆく。

「やっぱりそうよね。だから今、少しでも戦えるよう弓の練習をしているの。陸將軍（瀑？の名）に助けてもらったのは天の加護だわ、これは戦えつてことよ、きつとそう」

喜々として話す瓊凜はやはり女の子、まだあどけない可愛げがあった。だがそうしてゆく内に、子琳の心の奥底にもふつつと伝達

した怒りが湧き上がってくるような気がした。 子琳の心の尖端を少し焦がすような。

「子琳も、男なんだから戦わなきゃ」

瓊凜は子琳の手をより強く握った。

「でも……僕は」

「戦わないの？」

と言われても、子琳にとっては誰の為に、何の為に戦うのか理由がないのだ。ただ巻き込まれただけ。それでは戦うといっても、簡単に折れる刃で敵に向かうようなもの。

「……」

「そう、子琳はまだ子供だからわからないのね」

そう言う瓊凜も傍から見れば立派な子供ではないか。と、思ったところで廉毅が慌てて二人を呼びとめた。

「そこから先は行かんほうがいい。実はな……妖獣いようしゆがいるんだ」

「妖獣……!?!」

妖獣とは？いようしゆ獣とほとんど意味的には同じである。違いは、元が人か人でないか。妖獣は主に人語を解する獣のことであり、？獣は人が堕ちた姿のことである。だが、妖獣と同じ姿になることもあるため、判別がし難い。なので、同じ意味として使われることが多いのである。

「俺もあんまり詳しくは知らないんだが、瀑？様が手なずけている妖獣があのだに繋がれているんだよ。下手したら子供なんて簡単に喰われてしまうからな、あそこにや近づかないことだ」

少し渋ってから、あと少しで厩の屋根が見えるというところで三人は踵かかひすを返した。その後も瓊凜に弓を習った方がいいとか、なよなよしていて男らしくないとか散々言われ、ついには兵舎前に来ると手伝いがあると言ってどこかへ行ってしまった。

それを見送ると、子琳と廉毅がほぼ同時にふうと大きな溜息をつく。

「気の強い嬢ちゃんだな。こりゃ子琳もつかつかしてらんないぞ。剣なら俺が見てやれるから練習するか？」
子琳は丁重に断る。

すでに、西日は淡い朱を帯び始めていた。

瀑？の幕営は砦の一番見晴らしのいい高台にある。昏い夕闇の中、瀑？は従者を解散させ、木門をくぐって簡素な石段を登った。その先には砦の中でひと際目立つ、朱の甍が葺かれた二層の楼閣があり、その一階は灯燭の明りが煌々と室内を照らして、ほの暗い。楼閣の周りには彰の国色である朱に染まった幡、旗幟が幾つも立ち並び、重厚な威厳を放っていた。その中では、膝丈ほどの陣卓子を六人の甲冑を着込んだ男達が囲んで布帛に描かれた陣図をじいと睨み、唸りながら談議している。

瀑？は見張りに労わる言葉をかけ、饗饗紋様が彫られた朱の戸を開けて入った。これに気付いた中の全員が立ち上がり、瀑？に向かつて拱手する。室内には磚が敷かれ小さな廟と陣卓子、二階への小さな梯子があるだけでそこまで広くはない。そこへ何人も人間が詰めているのだから外に比べて少し空気が温かった。

「状況は」

上座に座るなり、瀑？が左の者に問う。

「事態の好転はありません。ですが、斥候からの報告では成軍は建恭一帯から退却したようです」

「やはりな」

瀑？は手を組んで顎を乗せた。

「微光が落ち、あの周辺には当分？獣が蔓延っていますから、行軍するには危険と判断したのでしょうか。……不幸中の幸いですな。あのまま侵攻されていたらと思うと」

瀑？は陣図に目を落とした。成から彰へ入るには凡そ五つの街道がある。もし彰の領土に侵寇するならば、王都へ至る最短の道であ

り戦略的要である建恭一帯を押さえることが最善の策といえる。しかしこれが不可能になったならば次の最短の道はこの高鮮を通る道である。残りは険しい牢齊山の谷間を通る栈道か、難攻不落と言われる南方の兎蓮関とれんかんを通るしかない。それでは多大な損害を被ることは避けられない。東瀛の平定を旗印に掲げ大軍を興した成が、そうやすやすと侵攻を取りやめるわけもない。ならば、順次的に考える。この高鮮が次の標的になることは明白である。瀑それ？が微恍を予見して高鮮に退却したわけではないが、結果的に主戦場が建恭から高鮮に移ることにはなった。しかし、要衝高鮮といえども状況は依然劣勢である。

「韓泰かんたい、寿桑じゅそう付近に伏せておいた私の兵を高鮮に呼び戻せ。補強に当てる」

「御意」

寿桑は建恭から西方へ進んだ先にある城邑いむじやうである。成軍がそのまま進軍した時の時間稼ぎの為に伏せておいたのだ。現在、寿桑は邑民の小規模な反乱が起き守軍の備えが万全ではない、そのため急遽瀑それ？が行ったものである。この件が今回の成軍の興軍に繋がったかは不明であるが、それを臭わす情報は瀑？の耳には幾つか入っていた。しかし軍隊ですらない邑民の反乱が国軍の機能を妨げているというのは、彰の国力の衰微を露わにしていると言って差し支えない。常備軍が役に立たないと判断し、瀑？自らの兵を割いて投じたのは仕方のないことであった。だが国からしてみれば瑣末なこととは思えないこの小規模な反乱がのちに新たな火種になることは誰も予想はしていなかったであろう。

「不騎ふき、成軍の新たな情報は」

今度は右手に座し、左目に藍色の眼帯を巻き珍しい茶の眉をした細身の男に問う。不騎は瀑？陣営の帷幄いあくの臣として、情報収集や敵方工作を主な仕事としている。竹馬の友として長年共に戦場を駆け回

った瀑？の信頼は篤い。

「敵軍は凡そ五万五千、それを率いるのは昨年將軍職に就いたばかりの魏素ぎそというものと判明しました。建恭を陥落させたのもこの魏素です。しかし、この人物に關しての情報は今のところほとんどありません」

それを聞いて、燭台の明りの陰影に髭面の男の齒が浮かんだ。

「瀑？様が不在だったとはいえ、建恭は莫迦でも一月は守れる城だ。魏素という奴、なかなか才があるのかもしれない」

「その莫迦が大莫迦だったのかしれんぞ」

「はっはっは、そうかもしれないな」

ひときわでかい図体の匡鉄が豪快な笑い声をあげ、匡鉄の隣に座るものも口を揃えてその通りだと笑った。だが瀑？の眉間には皺が寄っている。

「建恭の民はみなその莫迦と心中した。部下も大勢犬死した。笑えんぞ、匡鉄きやうてつ」

「……すまん」

瀑？の悔恨こもった言葉に場の空気を感じ取った匡鉄はしゅんとしてその大口を閉じた。

元々、建恭の守備を任されたのは瀑？であつた。だが、途中何らかの作為あつてか王命により王都に呼び戻され、その間代理守備を任されたのが瀑？陣営と異なる呉乾こけんという中央から派遣された貴族出の人物であつた。呉乾の傘下に組み込まれた部下達はこぞつて、「敵の情報が掴めていない、援軍を待つてここは敵の出方を窺う為に籠城すべき」と宣べたが、貴族出の為か功を焦つてか呉乾は「成軍は軟弱だと聞いている。先の戦でも成を散々打ち破つたではないか。何を恐れる必要がある」と城を出ての交戦を決断。しかし結果は建恭陥落、瀑？の部下も死に物狂いに戦つた末討ちとられ、呉乾本人は逃走しようとしたところ捕縛され拷問の拳句に縊殺いさつ、そのま

ま城門に吊るされた。

「年は」

「風貌から三十ほどかと」

「私と年端は同じか。しかし、経歴が不明なのは妙だな。兵卒からの抜擢か」

成は実力主義として諸国に知られている。武功をあげれば、それだけ出世できるし、能力があれば抜擢されることもある。それを考えれば、戦歴について情報がなくても納得はできる。だが、いきなりこの規模の大軍を率いるのは合点がいかない。城ごと焼いて皆殺しにするということはよほど彰に対して憎しみでもあるのだろうか。どこか今回の成軍は今までと違う妙な違和感がある。と成軍と幾度も対峙してきている瀑？と不騎ら列席の軍長達はどこか感じていた。「やつかいだな……」

そして一瞬場に沈黙が流れた。

「瀑？様……」

と、声を発したのは、末席にいる衛夏ぎよかという中部隊の長。衛夏は、瀑？に能力を見いだされてその麾下きかに就くことになった元農民の所謂兵卒上がりであった。まだ若いが瀑？陣営の中核を担う部将である。

「黄起殿と孔淵殿の姿が見えませんが」

衛夏は辺りをちらりと見て言う。

「……二人は死んだ」

「そんなっ……誰に!？」

瀑？と韓泰、匡鉄は目を閉じ俯いて重苦しい息を吐いた。黄起も孔淵も瀑？陣営の中核を担う部将である。本来ならばこの談議に参列しているはずだった。

「成との戦闘で」

不騎が気を利かせて言いかけたところで瀑？が、もういいと遮った。

「……龍を擒える途中、反撃に合つて死んだ。黄起が墮ち、？獣になつて孔淵を喰ひ殺した。それを私が斬つた」

衛夏は驚いたのか、椅子から立ち上がり血相を変えて叫ぶ。

「龍を擒える！？何故です！？ただでさえ、味方が死んだというのに……まさか、皆知つていたのですか」

この中で、事を知らないのは衛夏だけであつた。他の者はいたつて冷静である。

「残念だが、大業には犠牲がつきものだ。彼等は彰の為に死んだ」
瀑？は冷めた目で卓上のただ一点だけを見つめている。

「將軍、あなたは何をしようとしているのですか！？」

衛夏の瀑？を見つめる目には厳しさと共に焦燥も含まれていた。

その時、頃合いを見計らつたのように戸の向こうから、参りましたという見張りの甲高い声が上がる。

通せ、と瀑？が言つと、戸が開き外から同伴者と共に小さな少年が怯えた様子で中に入ってきた。衛夏は何事かとその幼気な少年をそのままの厳しい目で見つめる。

「つ、連れて参りました……」

廉毅が拱手し汗を滝のように垂らしながら恐々と言う。

「駿、お前は兵舎に戻つていい。それと、人払いを頼む」

「か、かしこまりました」

廉毅は恭しく了解すると、些細に不思議がる仕草をしながら外へ出て行つた。戸を閉め、少しすると辺りの物音が聞こえなくなった。暗澹たる静寂の中に流れる圧迫された間、子琳の渴いた喉になる。

すると、突然瀑？並びに衛夏以外の部将は地に片膝を付け、手を組んで敬仰の礼をとつた。立つたまま啞然とする衛夏も悟つたのか慌てて地に片膝をついて、この少年に首を垂れた。

そして、瀑？がああ快活な声量をもつて怯える子琳に告げる。

「先ずは、非礼を謹んでお詫び申し上げる」

子琳はこれにどう対応してよいのかわからずうろたえ、敬礼してなお逼迫^{ひっぱく}し、威圧めいたこの集団に若干の恐れを抱いた。龍は人より格上の生き物である。龍と人には決定的な境界があり、超えてはならぬ神聖さがあつた。それはいつ流布したのか遙か古来からの決まり事であり、滅多に市井^{しせい}の人間と交わるものではないというのが常識である。だが、雛龍であるはずの子琳にはそういった扱われ方にはどうにも抵抗感があつた。気恥ずかしいというか、自分にそこまでの価値があるとは思っていないようである。

「頭をあげてください……」

そこで彼らはやつと首をあげた。

「龍よ、我らに助力していただきたい。彰国を常道に正し、ひいては戴邦の安寧の為に」

薄ら闇の中、瀑？の鋭い眼は鈍い朱光を帯びていた。

飛龍乗雲 へ?ゝ（後書き）

> i 1 3 5 0 0 — 1 8 9 0 <

帷幄の臣：参謀

縊殺：首を吊つて殺すこと

麾下：大將に直接命令される部下

戴邦の安寧は無論、雛龍は勿論のこと誰もが心のどこかで望むことであつたであらう。だが、理想の先の先にその平和はあつた。この混迷した時代に、泰平という概念は絵空事のようなものでしかなかった。瀑はくあ？もそれをわかつて言っていた。

少し、雛龍について述べる。

雛龍すひりゆうとは字の通り、龍の雛ひなのことである。

天に近いところに龍がおり、雛龍がいる。それはこの戴邦では誰もが知るところであつた。雛龍はこちらで想像されている大蛇のような猛々しいものとは違い、この寰宇せかいでは手足があり、顔や肢体もその辺りで駆け回つて遊ぶ童とほとんど変わりはない。ただ、雛龍は共通して人目に止まるほどの整つた顔立ちをしているようであり、幼さ特有の愛らしさも生来持つている。それを目的に愛寵の為に欲した権力者もいたということだから、人心を惹く魅力を有していることは確かのようなだ。しかも、年をとらないのである。

龍は、戴邦のほぼ中央から少し離れた場所 嵩邦かうほう に位置する険峻の神山 姑射山こせつざんの頂にある扶桑ふそうと呼ばれる神木にやどるようにして建てられた宮に住まうと言われている。そこでは瓊樹けいじゆという極彩色の玉を枝実えみに結ぶ木々が繁茂はんもし、人々が俗世をすっかり忘れるような金殿玉楼きんでんぎよくろうが立ち並んで、この世の美術と技巧を極めたような煌びやかな宝飾・絵画と言葉をなくすような情景で溢れていると半ば想像が混じつた噂うわさとして巷で語り継がれているのだ。そこを人々は畿禁城ききんじょう、または龍陽宮りゅうようぐうと呼ぶ。憧苑しょうえんがあるとするならばまさに畿禁の龍陽宮である、一生に一度は訪れてみたい、と世の識者や権力者、思想家、果ては平民まで願つてやまないのである。

そして、龍の出生については謎が多い。

ある者は、龍陽宮にある人丈ほどの大玉から生まれると云う。そしてある者は、戴邦に龍が降邦し、よさそうな童を見つけて攫い、その童を雛龍にするのだと云う。伝説については数多ありあまたどれも信憑性に欠けるのだが、しかし地域によってはそれが真であると信じられているところもある。要するに、誰も本当の龍の出生についてはわからないのである。そのあやふやな想像の余地が更に龍の神秘性に拍車をかけた。

「……でも、僕はあなた方のお役に立てるようなことは何もできません」

子琳の薄紅の唇は小刻みに震え、それに伴って口をつく言葉も震えた。

実際、この言葉は逃げ口上だったし、この恐ろしい集団の役に自分が立てるとも思っていなかった。そして、このような扱いを受けたのは龍として久しぶりだった。

薄汚れた木綿の衣服を纏った少年に頭を垂れる屈強な武人、そのおかしな光景がいかにあり得ないことか、この室内の一同は重々わかつていたことだろう。瀑？は拝礼を解いてすつくと立ちあがると断言する。

「いや、できる。我が下にいるだけでいい」

先に子琳は龍を人間同士の揉め事に使うのをあまり聞いた事が無い、と述べた。だが実際は、彼等が知らない書面にも残らないところで行われていることもあった。少なくとも龍は自分達を中道だと考えている。ほとんどの龍は戦があっても干渉する気もないし、政にも大して興味はない一つの物事として興味をもつならば別だが。戦が好きでも嫌いでもなく、戦をする人間を軽蔑することもない。それが当たり前であるからだ。

龍は子琳のようにどこか人の俗世に客観的であり、たまに物見遊山^{さん}で覗きに來る傍觀者という風な気持ちがあつた。つまり、雛龍とは好奇心の赴くままに大地を敖遊^{じゆう}する童^{こども}であるのだ。ならば、なぜ龍は争いに使われることがあるのか。

古代より九軍^{きゅうぐん}（王軍）が龍^{りゅう}？を御旗に掲げていることからわかるように、龍とは正統の象徴であるという慣習が昔からあつた。つまり、龍を擁するものが正義・正統であるという半ば暗黙と化した慣例が存在しているのである。瀑？が主君に対し反旗を翻すつもりであるならば、少々反則ではあるが龍を擁しているという大義名分が何より必要であつた。無論、龍は故意で誰かにつくという真似はしない。大抵が捕えられたり、弱みを握られたりすることによる。龍を捕えたのがばれば、捕えたものの威信を失墜するのは勿論のこと、それは即ち死を意味した。

「將軍！！」

声をあげたのは成り行きを黙って見ていた衛夏。

「やはり謀反を起こすつもりだったのですか！？」

衛夏は昂つた呼吸をして問いつける。瀑？の目は微動だにせず衛夏へと向いていた。

「そつだ。彰がそのまま滅ぶのをただ見ているというのか」

そして横から宥めるように不騎が言う。

「衛夏、落ちつけ。お前に話していなかったのは悪かつた。まだこれを話す段階ではなかったのだ」

と、諭す不騎の面持ちは真摯の中にも和やかさがあり、言葉の聴きざわりがやわらかく滑らかであつた。それだけで、この男のこの集団における役割を子琳は感じた。

「いや、私が信用ならなかったのでしょうか」

衛夏は腰にさげた剣に手を添える素振りをした。

「信用していないわけではない。見ろ、お前は熱しやすい。事が熟していない段階でお前に打ち明けては、大魚が眼前の虫を狙いあまつて自ら水面に波紋を立て、釣人に存在を気付かれてしまうようなこと。それを危惧したのだ」

衛夏の向かいにいる蘇甲そこうが、言葉に毒を含ませて言う。蘇甲は姓を董とうとする名門士族の出自で、瀑？の遠戚にあたる男である。先の成との戦において個人で首級二十をあげ、大いに名をあげた部将である。

「私が皆の足を引っ張ると言うのか！？いつ私が足を引っ張った。

蘇甲殿、聞き捨てならん」

そして、衛夏が剣に手をかけようとした瞬間、瀑？のあの透くような快声が飛ぶ。

「静まれ！！お前に信が置けぬなら最初からこの場には呼ばなかった。衛夏、わかってくれ。お前はまだ若い、国と矛を交えるのは確かに謀反と思うかもしれない。だが、彰の領土が穢され、奸臣の横暴で民がこのまま餓えてゆくのが果たして彰の民の為なのか。否、今こそ我ら忠臣が決起して奸臣を取り除きこの国難を救う事こそが国家の為であると私は思う、どうだ」

衛夏は剣を握んだまま、蘇甲と瀑？の両方を比べるように見た。

「今は仲間で争っている場合ではない。勿論、衛夏も我々の密約を知ったのだから一心同体。共に大事の為に働いてもらう。もし、異議があるならば……この場で斬るまでだ」

瀑？の目がきつと締まった。元から瀑？を慕っていた衛夏も何か含みを持ちながらも、拱手しこれに同意した。だが、衛夏の脳裏には瑣末な疑心という闇が残ることになった。

そして、奥の廟に羊の肉と酒などの供物を備えたと、皆は廟うやひに向かつて拝礼し、彰の為に結束することを改めて誓った。子琳は廟の

側に座らされて、一緒に拝礼を受けた。戴邦での廟とは、祖先を祭るものと、土地の神々を祭るもの、そして龍を祭るものがある。大抵は一緒くたになっているが、彰という国は特に龍廟りゅうびょうを重んじたことで有名である。時の王が領内各地に龍廟を建て、その住人に守をさせ毎年祭らせていた。

しかし同じ室内にいるのに、だんだん子琳はこの共同体化している集団から蚊帳の外のような疎外感を感じた。子供が遊びの輪に入れなくてうずうずしているような、ほんの些細な。

しかし、と拝礼が終わり瀑？は言う。

「まず我々は眼前の国難を取り除かねばならない」

瀑？が卓子を叩いて皆に言い聞かせる。諸将はこれに深く頷いた。

「この高鮮を突破されれば、成は彰領内になだれ込み、建恭での凄惨な悲劇が国内中に広がる恐れがある。国力が疲弊している彰軍ではこれを止めるは不可能。さらにはそれに乗じて周辺諸国が禿鷹の如く彰の領地を筆取り取ってゆくことは明白。これはこの国の興亡の戦である」

だが子琳は瀑？の言葉に漠然とした疑問を抱いた。真つ当な矛盾点である。元から疑問を持つことにいじらしさを感じる質たちの子琳は、思わず口を開いた。

「あの……」

一段高くなつた廟の横に座り、勇気を振り絞つて瀑？の背に向かつてよわよわしい声をあげた。

「そつだ、龍公（龍に対して使う敬称）を忘れていた。何か聞いたことがあるばここで述べるがいい」

これに皆が笑う。

「子琳、でいいです。あ……の、とてもどうでもいいことなのですが、謀反を起こして軍を興せば内乱状態になって、今の話を聞いているとそれで、国が滅ぶんじゃないでしょうか」

ところどころ噛みながらもやつと言えた。ところが、場が一気に静まってしまふ。

「確かに」

と、衛夏は頷く。

「今は内乱を起こしている余裕もないはず。揉め事を起こせばそれだけで他国に呑みこまれるのでは」

「……だから、龍がいる」

瀑？は子琳を一瞥する。

「子琳に顕竜王を堕とさせ、新王を擁立する」

聞かなければよかったと子琳は酷く後悔した。

この男は、一体どんな了見があつて、龍にそんな危険な事を犯させようとするのだらう。龍に取って大事な戒指（ゆびわ指輪）と臂環（ひかん腕輪）を取り上げて脅したとしても、雖龍がそんななんの益もない命懸けの謀（はかりごと）に領くと本当に思っているのか。そんな義理が何処にある。この男に対し、恐怖以外に落胆と憤りが心に沸々と浮かびだした。

「そんなことが本当に可能なのでしょうか……！？」

韓泰（かんたい）だけでなく、他の者までもが不安を表情に滲ませている。不騎だけが割と涼しい顔をしているところを見ると、この男だけがこの謀を知っていたようだ。

「例え王を潰せたとしても代わりの王なんてどこにいるんだ。有能そうな嫡流はみんなあの糞野郎のせいで他国へ逃げたか、殺されちまっているぞ」

匡鉄が喋るときはいつも口から飛沫が飛ぶ。

「そうだ。殿は王を挿げ替えれば、宮中の奸臣共を一掃できると考えていらつしやるようだが、国内にいる王族は皆あの者の息がかかっているか、怯えて何もできないだらう」

「やるならばここは一旦息のかかつていない者を代王に立てて」

「いや、ここは殿に一旦王位に就いていただくのが」

「それは難しい。国民の期待がそこまで高まっではない」

議論が再熱した。どうやら、察するに彰の内部では匡鉄の云う“糞野郎”が専制を敷いているように聞こえた。しかし新参（しんざん無理やりだが）の子琳には、所々彰の状況がよくわからない。それどころか、自分が何をさせられるのかもよくわからない。そして子琳ありきの計画のはずなのに、頭ごなしに物事が議論されていては、何を

強要されるかわかったものではない。そんなことがあっていいものかと、出来る限り自分に有利に運ぶため議論にできるだけ割り込もうと身を前に乗り出した。

「ちよつと……」

もちろん、この蚊の鳴くような声は皆の耳には入らない。だが、瀑？がすつと右手を上げて議論を止めた。

「龍が申される」

また一気に場が静まった。子琳の白い頬が熱気と緊張で熟れた桃のように赤く染まる。一応、そんな大したことではないのですが、と小さい声で前置きをしておいた。

「え……、その、僕は何をさせられ、いや 何をするんでしょうか」

瀑？に皆の視線が集まる。何を言うかによつては、子琳はきっと断ろうと心に決めた。一国の王を墮とすなど、前代未聞である。別に誰かに咎められるというわけではないのだが、褒められることではないし、むしろ世間の龍に対する見方が変わることを恐れた。謀略の道具として龍が存在すると思われてはたまつたものではない。さらに、王を墮とした龍として名が残るのも嫌だった。

しかし、瀑？の口から出た言葉は完全に子琳の予想外のことであった。少し溜めるような間をおき、緊張して白く細い手足が杖棒のように硬直する子琳をゆっくりとなぞる様に一瞥した。

「あらゆる手を考えたが、この策しか思いつかなかつた」

「……」

「王の寵愛を受けてくれないだろうか」

「……！？」

寵愛！？

驚愕の為か動揺の為か、それを聞いて子琳の口が、顎が外れたかのようにぼつかりと開けたままになってしまい、断る言葉を忘れた。そして、次第にこの男の考えている事がうつすらと読めてきた。一方で卓を囲むものは瀑？の策案に、頷いたり首を傾げたりしている。

中国においては、古代より王や帝が女色だけでなく男色を嗜むという習慣　男寵が当然のことのようであった。無論、戴邦もその習慣を色濃く受けている。現在でも断袖や竜陽君などの様々な代名詞があり、昔から中国では美少年や美青年を好む男寵は女を愛するのと同じく当たり前のものとなっていたのである。日本にもその文化は唐などに留学していた僧侶などによってもたらされて広く伝播し、男寵は先進的なものとされていた。しかし、年を経て容貌が衰えた愛寵の末路は悲惨なものが多い。なので、年を取らない雛龍を寵愛しようという輩が出るのである。

「王の住まう後宮は我々部外者が易々と侵入することは不可能だ」
王は基本的に宮廷の中にある後宮に住まい、后や女官などともに家庭的な生活をそこで送る。政治は主に後宮とは別の施設である朝堂などで行い、そこで諸官と面して国の方針を議論をした上で、軍を興したり政令などを布告するのである。勿論、国家の最高権力者が住まう施設である為警備は厳重であり、信頼されている者しか出入りはできない。だが、王の目掛けを受けたものや寵されるものは別である。

「子琳。王がそなたを寵愛すれば、隙をついて王を墮とすことができるやもしれん」

「なるほど。こいつの面なら王も気に入りそうだ」

匡鉄はからかうような目で子琳を見てくる。しかし、子琳にはたまったものではない。

「ま、ま、待つてください。どうして僕がそんなことを!？」

思わず身を乗り出して問うた。瀑？の目は真剣そのものである。

「理由は三つある。まず一つ、王は前年、目掛けていた少年を病で亡くしている」

「……」

「二つ、王は暗殺されたのではなく、堕ちたという状況がこちらにとつて望ましい」

「どうしてですか」

「突然の王の崩御は国の混乱を招くんだ。しかも暗殺だとわかれば犯人探しで一層それは酷くなる。しかし、王が堕ちたとなればあの慣例が効いてくる」

不騎が子琳の問いに対して優しい口調で補足する。

「そつだ。王が堕ちると、一旦国が所有する剣璽けんじを龍に預けるといふ典例てんれいが昔からある」

子琳も聞いたことがある。龍は中道とされているためか、王が儚獣に堕ちた際に限り、国の権力象徴とも言える剣と璽を預かり、新たな相応しい相続者が現れるまでこれを預かるという。その間、国の政治機能は停止し、相や官のみで最低限の政治を行うことになっている。しかも、不思議な事に新たな王が玉座に坐る前に、その国を他の国が攻めると、必ず攻めた国に天変地異が起こり大きな被害を出した。それがわかつている為か、どこの国もその間だけは領土を一寸も掠めないのである。つまりこの現象を逆手に取れば、困窮する彰はその間他国に攻められず、さらに国を建てなおす猶予も発生するのである。ちなみにこれを、国預こくよという。

「その典例に従い、王が堕ちた際、子琳に一旦国を預かってもらいたい。その間に我々が司馬氏に繋がりのない新たな王を玉座につける」

「そして子琳殿が我々の推す王に剣璽を譲渡すれば、司馬鋼殿じりはこもただ指を啜えているだけで手出しはできないでしょう」

「司馬……鋼？」

「ああ、司馬鋼というのは、彰国の丞相^{じやうしやう}。我らが顕竜王が寵愛する奸臣のことさ。司馬氏一派のせいで政治はまともに機能していない」
「宮廷に巢食う害虫だ。あいつらは今の王をどっかから担ぎあげて権力を握り、我がもの顔で専制を敷いてやがる糞野郎だ」

厚く膨らんだ唇から唾を飛ばしながら匡鉄は、ここぞとばかりにその“糞野郎”を罵る言葉を並べた。

しかし、なんと強引な話である。確かに、龍は国を預かることもあるが、その慣例を謀略に、まして自分を使うというのは。だが、なんとなく彰の情勢が読めてきた。要するに、王の寵臣である司馬鋼という人物が宮中で権勢を振って彰を衰退させており、それを取り除くために、現王を“無関係な”雛龍を使って墮とし、新たな王を据えようと瀑？達は今思案しているということであろう。

「三つ、これは最も大事な理由だ」

「……」

「そなたならやってくれと信じていることだ」

瀑？がまた、作ったような似合わない微笑を子琳に向けた。しかし、この笑みに不自然さを子琳は感じなかった。

「そんな、僕は……！！」

こんな事を言われてどんな表情をしているのかわからない。まだ会って日も浅いものを信じるなどと、この男は本気で言っているのか。期待を掛けるという婉曲な脅しだと最初は思った。だが、子琳は微かに感じ取る。この男は本気で言っていると。しかし、と瀑？が遮った。

「最初から無理な請いだというのは承知している。決断は日を待つからでいい。それまではこの砦内で過ごされるがよからう」

「で……でも……」

そして子琳が、とにかく戒指^{おひぎ}を返して欲しい、と言うか言うまいかに悩んで音のこもった口を開けようとしたとき、幕営の外から甲冑

を激しく揺らす音が聞こえた。

「報！！報！！」

階段を駆け上ってきた兵は肩を揺らして呼吸をしながら戸の前に片膝をついて、申し上げます、と乾燥してへばりついたのだ奥を無理矢理に震わすよう叫んだ。

「どうした！？」

戸を閉めたまま瀑？は兵に問う。

「成軍が丘に布陣していた高策將軍に夜襲を仕掛けました！！」

「して、高將軍は！？」

「乱戦の中で討ち取られ、兵は散り散りに離散したとのこと！！！そして成軍は川を越え、丘を占拠。麓は成の旗と松明で埋め尽くされております！！」

瀑？はそれを聞くと、ゆっくりと首を伏せ、大きく溜息を吐いた。

「あの場所が取られたと……！！」

そう言うと、何かに引張られるようにすくと立ち上がり、戸を殴る様に開け放って、麓が見渡せる望櫓に向かつていった。不騎らも動揺した様子で、慌てて瀑？の後を追う。

上座に取り残された子琳も、しばらくどうしようか悩んだあと、なんだか様子を見てみたくなり、層楼の二階へと伸びる小さな梯子を慌てて登った。そして、わずかに届く手摺に顎を乗せて眼下に広がる薄暗い平野を俯瞰した。

見渡す限りの地平線に杳取られた空一面には、綺羅星が光彩陸離と輝き、地では廟の芳しい焼香の香りが山風に乗って広がる。秋の冷たい風が音を出して空を切り、子琳の白紅の頬に当たった。層楼の真下には望楼から平野を呆然と眺める瀑？が見える。その下には、先ほどいた兵舎が見える。さらにその下には一条の路が平野へ伸び、そのもつと下には川を背にし土肌が露わになった小高い丘がある。

そこには、幾つもの松明の火が整然と並び、闇に浮かぶ旗をくつきりと際立たせていた。

あの丘で……。

あの小高い丘で、戦闘があつた。そんなに遠くない、あの丘で。そう思うと、恐怖で背筋がゾクゾクした。あの時、あの山から見ていた建恭という城は対岸の火事でいられた。傍観者でいられた。だが、今は違う。目の前に敵が来ている。同じただ眺めているだけなのに、こつも違うものかと思つた。と同時に、建恭に籠っていた人々の心境が痛いほどわかつた。

やがて、子琳は火照つた頬を冷ますように小さく溜めた息を吐いた。

飛龍乗雲 〈?〉（後書き）

剣璽：剣と玉璽。いずれも国の宝物。玉璽は勅命を出す際などに使用される。

丞相：官の最高位。今で言う総理大臣に当たるが、国によって役職名や職務、権限が異なる。

登場人物（ ）内は字

子琳

陸炎（瀑？）

瓊凜

趙駿（廉毅）

公孫良（不騎）

韓泰（麗其^{れき}）

匡鉄（公嘉）

羊華（衙夏）

董堅（蘇甲）

司馬鋼（周戟^{しゅうせん}）

東衛の火焰 西征の虎狼 〱〱〱

大王！。

「大王、なぜわたくしめを建恭の任から解かれたのか、お聞かせ願いたい！！」

「控えよ！！王の御前であるぞ。陸將軍、そなたが他国と通じておると宮中で噂となつてゐるのを存じて居るか」

玉座にちんと坐る顯竜王の側には丞相である司馬鋼が常にまとわりついている。腐臭のする権力に群がる蠅、瀑？はいつもそう捉えていた。腹と首元に纏つた脂肉を揺らし、窪んだ目をいつもぎよるぎよる動かして上から瀑？を^{にら}む。瀑？には非常にそれが不快で仕方なかった。

「存ぜぬ。我が陸氏は昂竜王（^{いっしゅうりゅう}彰の始祖）の時代から代々彰に仕え、その社稷を^{しゃしやく}支えてきた。国に忠を尽くし、武門の士として国難に殉ずる覚悟は生まれた時からとうにもつてゐる。それは武功として大王も知つておられる筈。それを他国と内通してゐるだのという噂を信ずるなど、王の近くに法螺吹きがゐるとしか思えませぬ」

瀑？殿。

司馬鋼は少し丁寧^{ていねい}に名を呼び、弛んだ腹を少し持ち上げた。

「功と忠は別だ。他国には一將軍の身分でありながら王を^{さんし}纂弒する為にと功を立て続け、ついには玉座を篡奪し王位に就いた者もいるというではないか。功で忠を示すのは、逆に言えば功で忠を見せかけられるという事だ。今の陸將軍とてそうでないとは言ひ切れないだろう、違うか」

「それでは功を立てれば疑われるということではないか。ならばどうやって国を^{まも}拡げ、衛るといふのでしょうか」

そういうことを言っておるのではない、と司馬鋼は三段も高い場所から瀑？を見下した。

「つまり陸將軍は、功を立て過ぎておるといふのだ」

そうか、と瀑？はこの偉そうな豚を心の中で家畜の如く侮蔑した。

「抜きんでた功は、王の威を霞め、周囲に疑念を持たせてしまうこともあるといふことだ。だからこんな貴君を妬むような噂が流れる。勿論、私は將軍が謀反をするなど思っておらんがね」

黄ばんだ齒をみせ王と瀑？を見比べてから不気味な笑みを浮かべた。
「余も周戰（司馬鋼の字）に同意である。そなたの忠節はよくよく聞き及んでいるが、そなたへの雑言も聞く。少しの暇と思つて此度は前線から外れてくれぬか」

瀑？にとつて煌びやかな玉座に坐るこの王はすでに木像傀儡に等しかった。奸臣司馬鋼に国内の政治をほとんど委ね、自身は後宮で遊興に耽つている。国を自身の遊樂で滅ぼそうとしているというのが酷く瀑？の怒りを呼び起こし、しかもそれに気付いていないと言うのがさらなる憎悪を抱かせることになった。この場で死を覚悟して諫言してもよいのだが、もっといい方法がある、と自分に言い聞かせることで激情を肚裏に詰め込んだ。

王が言ふのだ。拒否すれば反逆となる。臟腑が煮えたぎるような感情を押さえながらも、冷静さを取り戻そうと瀑？は必死に齒を食いしばった。

「……代わりは誰に」

怒りで言ふのが精一杯だった。

「呉乾殿をすでに向かわせた。相手は昨年陸將軍が壊滅させた成だ。將軍が出る幕もなからう」

呉乾？ 聞いたことがない。瀑？はそれが誰かを問うた。

「呉氏の長兄で文武両道の傑物だ。なに、陸炎殿もすぐに轡を並べることになるだろうて」

「莫迦な、呉氏は文官の家系だ。しかもつ、しかも呉氏は司馬氏と蜜月ではないか」

「黙れ！！疑いを不問にしてやるというのに、儼にあらぬことを言つて泥を塗る気か？もうよい、下がれ！！」

瀑？は熱い息を吐くと、怯える百官が居並ぶ朝堂を辞した。

建恭陥落寸前の急報はその三日後に王都に届き、急遽瀑？が援軍に向かうこととなった。それは籠る城民の事を思えば不幸中の幸いとも思えなかった。

瀑？の思考は、この眼下に広がる致命的な状況を見て、若干の停止を必要とした。

籠城とは、味方の援軍を期待して行つものである。強大な敵に囲まれ、兵力的に敵わない時に、城という物理的優位施設に籠り時間を稼ぐのだ。援軍が期待できない場合の籠城は味方の士気喪失へと繋がり、兵糧等の食糧問題も含めると、よほどの覚悟をもっていないと兵士の反乱、城民の離反が起こり、最終的には指揮者が殺され開城となるのが常である。

高鮮という砦は、山間にある為か関塞かんさいとも言える構造を有しており、人の往来もあることで城壁の内側には約3000戸の城民がそこに住んでいる。だが、砦から街へは山壁に造られた棧道のような城牆を伝っていくか、外の路を通るしか行けない特殊な構造をしていた。よって、戦時中の城民は外敵からの攻撃を砦が盾となって直接は受けない。この特殊な構造は、外敵に専念できるという点で瀑？の憂いからは消えた。

援軍は建恭への行路に陥落の報を受け、すでに使者を向かわせ要請してあった。あまりにも陥落が早いことによる成軍の強勢、さらに建恭と言つ重要な場所を奪われたことによる危機的状況を即座に

察知したからである。しかし、中央は派兵を渋っていた。瀑？には大方の予想がついている。保身の為に中央付近の兵を地方へ割きたくないのと、本意ながら任じた瀑？がこれ以上力をつけるのを恐れているということだ。外敵よりも眼前の権力にすりつくという愚行。だが、今の瀑？にはそんなことは頭から抜け、この状況を打開することしか考えることができなかった。

「高策殿が夜襲の警戒を怠ったとは思えません。構えも私が見た限りでは隙はなかったはずです」

冷静な不騎が珍しく動揺している。不騎の言う通りだと思った。高策は兵理に明るく、慎重な性格の男であり、そのような誤りをしてかす人間ではなかった。だから、余計に今回の成軍の不自然な強さが際立ち、成軍の全貌を不明瞭なものとしていた。

取られたこの段丘の名を、桂丘けいきゅうという。名の通り桂の木々が生い茂る小高い丘である。桂丘は、路から離れた場所にある。戦略的に籠城する側に余裕があれば、少し離れた争地そうち（孫子でいう先を取るに有利な地）等に陣を敷き、情報収集や敵が集中できないように兵力を分散させ、同時に威圧するという策戦がある。瀑？はそれを行い、成軍の出鼻を挫くつもりであったが、頓挫してしまった。

なぜこつも容易く敗れたのか。

瀑？の頭の中ではこの問いが反復を繰り返し、次第に混乱していた。原因がわからなければ手の打ちようがなく、情報戦においても不利とならざるを負えないのである。

そして、風向きが変わるような温い感触を瀑？は感じ取った。

「拙い、兵士に動揺が広がっている」

瀑？は、兵士の士気や高揚、動揺の些細な変化を直感的に感じとる

能力があつた。能力と言っても、それは経験による後天的なものであり、子琳の他者の感情を感じる能力とは別のものである。それに経験による予想と本能的な直感が付随し正確性が格段に向上した。それは将たるものとしては、類まれなる資質であると言えるだろう。その直感が、砦全体の雰囲気に変化したことを知らせた。

「殿!!」

望楼の真下から声がする。瀑？は何事かと問うた。

「逃げ戻ってきた高將軍の兵がこちらに参りました!!」

「桂丘で何があつた、申せ！」

兵士の背には痛々しく矢が刺さり、憔悴しきつた様子だった。

「も、申し上げます。敵軍に司臯しうさうがおります!! 臯術に翻弄され、仲間は皆殺されました」

東衛の火焰 西征の虎狼 〱〱〱

司臯。

その源流は方士ほうしであると云われる。

方士とは古代中国において神仙の術を体得した者、方術を行使する者のことを指し、道士とも云われていた。そして方士は長生きや不老不死の為に、神仙にまっ纏わるものを研究したり、魂を招くための祈祷を行ったり、仙薬などを作り用いたという。思想的には老荘の思想に近いようだ。

戦国時代から漢にかけて、現在の山東省や河北省などで方士といわれる職業集団があり、王やその他権力者に自らの不老不死の仙薬や術を売り込み、生活の営み、果てはその信賴を得て側近になったものもいた。権力者は不老長寿という言葉に弱かったのである。

金も名誉も地位も手に入れた権力者が最終的に渴望、盲信したのは不死の技術であつた。そういった権力者の慾望があつてか、真偽はさておき方士という職業が成り立っていたのである。かの現実主義者と言われていた始皇帝も晩年になるとある方士を信じて、金銀財宝を持たせて靈薬を探しにいかせたと史記にあるほどだ。

しかし、様々な経緯を経てか戴邦ではその名を変え、実際に方士が探求していた仙術のようなものを使うようになった。司臯こうとは臯つかさどを司ると読む。国によつては司臯は官職名であつたりし、国政軍事の重要な任に就いているところもある。また、司臯は臯士こうしとも呼ぶ。

戴邦という土壌は臯術を育んだ。それが何故だかはわからない。

土地のせいか、龍がいるからか。人々もそれが当たり前になつた今、その疑問の根底を浚うようなことはしなかったし、思いつきもしなかった。いつ生まれたのかわからない皐術は、時の中で河川のように本流から枝分かれを繰り返り広げ、あるいは諸子百家などの学派の思想と結びつき、また昇華され、無数の流派が生まれた。そしていろいろな分野に転用され、いつしか軍事に用いられるようになる。

龍も皐術を使う。身を守るためとも言われるがその理由は定かではない。ただ、龍はそのまま使えるが雛龍は戒指ゆびわを媒介にしないと皐術は使えない。しかし、皐術を行使できる人は媒介を必要としない。その不可思議な理ことわりを調べる学者は戴邦でも数多いが、雛龍に遭遇する確率があまりに低い為、調査のしようがなく、結局は伝聞による根拠が多いので真実性は薄い。一般的に皐士になるものは、天から授かる先天的なものか、修行や覚醒するなど後天的なものにわけられるのだが、それはまた後述する。

その『皐術』というものであるが、大きく分けた分野、種類がいくつもあり、総称として皐術と言われている。例えば軍事に用いられるのは、だいたいは精神高揚など人の心理に作用するものか、敵を攪乱する類のものが多く、稀に兵士の増強などの術がある。それらすべてを皐術と呼び、戴邦ではこの皐術を司る司皐が戦の勝敗を決することがよくあるのだ。

「詳しく申せ」

瀑？は望楼を降りると、片膝を折って兵士に向かい合った。兵士は言う。

「私は高將軍の身边を警護していました。高將軍は陣の守りを固め、いつでも事に挑めるよう配下と陣中を見回っていたのですが、その時突然東の方で火の手が上がり、成軍が背面の崖を越え雪崩れ込ん

できたのです」

「司臯は」

瀑？はそのことを聞きたいようだった。

「司臯本人は見えていません……。ですが、あ、あれは司臯の術です」
「あれとは何だ！？」

「敵が飛んでいたので」

「飛ぶ？」

「はい、白い煙を帯びた敵兵士が宙を歩いているのを見ました。仙人のようにです。そのあと崖から現れた兵士と共に天から火矢を射下ろされ、上と後ろを取られた味方は総崩れとなりまして、混戦の中將軍は敵の襲撃に遭い……」

酷く動揺しているのか、この兵士は呂律が悪く、ところどころ言が支離滅裂であった。

「確かに飛んでいたのだな」

「は、はい」

瀑？はそれを聞いて納得したのか、兵士に休息を取らせて宿舎に帰した。

「不騎、この話が真実だとすれば問題だな」

不騎はそうですね、と顎に手を添えた。

「これでは城壁、守備が全くの無意味ということです。そうなるとも警戒せねばなりませんので、我々にとつては不利になります。ですが、この奇策が通用するのは一度だけです。二度目はありません」

確かに、と瀑？は頷いた。

「敵が飛んでるのなら、鳥を狩るみたいに矢で射落としてしまえばいいじゃねえか」

匡鉄には何が問題だ、と言わんばかりのことであるようだった。

一里ある、が。

瀑？には何かが引っかかっているようだった。

「敵が司臯を従えているなどという情報は全くなかった。建恭の時もそのような情報は入っていない。捕虜に問いたとしても、司臯という言葉は一つも出なかった。何故だ」

「情報統制で隠していた……と？」

「奇襲の為に温存しておいたとは推測できるが、何故今司臯を出した？何故本陣でもない、弧壘こるいの夜襲に使った？もし、我々がこのまま知らなければここは陥落していたかもしれないのだぞ」

「そこまでして桂丘が欲しかった、か、あるいはまだ何かある……のでしょうか」

不騎は顎を押さえたまま考え込んだ。彼は考え事をするそのままの姿勢で無意識に没頭する癖があった。

瀑？は松明が星のように無数に輝く桂丘を俯瞰ふかんする。彰の為、大志の為、領内の民の為、自分の為、様々なことがこの一戦の勝敗に掛かっていた。どうしても勝たなくてはならない、という決意と共に湧き出た情熱が秋風で冷えた体を熱くしてゆく。それは他の諸将も同じであった。息は微かに白い。鎧の冷たさが体中を身震いさせる。それは武者震いと言っている。小さな振動が、大きな野望を震わせる。

聞け！

「直ちに城牆に弓兵を増員、弩を増配置し対空に備えよ。そして斥候を派遣し、敵陣の様子を探れ！韓泰、明日の夜は兵糧を少し多く兵士に配分してやってくれ。城民の慰労も忘れるな」

諸將は了解すると、散る様に各々の持ち場へ戻って行った。そして、瀑？は不騎だけ呼んだ。

「良（不騎の名）、もしもの時はわかっているな」

不騎は少し悲しそうな顔をしてから、こつくりと頷いた。

「雛龍は、必ず」

瀑？は楼から顔を出す子琳に気付いたのか、ちらりと見やった。子

琳は慌てて首を引つ込めて、手摺に頭をぶつけた。

「蝶蘭^{すまいたん}”も、頼む」

わかりました、ですが、と不騎は言う。

「そうならない為に私がいるのです。勝ちましょう、まだ殿にはやつてもらわなければならないことが山積しております。ここで死なれては困ります」

そうだな、と瀑？は小さく笑んだ。

しばらくして、城内の空気は火のような熱を帯び始めた。そして、相対する桂丘からは夜遅くまで成軍の歓呼の声が静かな闇に響いていた。

翌朝、甲冑を纏ったまま剣を携え寢所で仮眠をとっていた瀑？の耳に驚くべき情報が舞い込んだ。

「援軍が参りました！門前で待つておられます」

門前とは、彰領内側の門である。瀑？は素早く身を起こし、久々の朗報に安堵した。

「どなたが参られた」

「大司臯殿です」

「大司臯？」

少し頭が醒めていない瀑？は繰り返して尋ねてしまった。瀑？が何かの間違いかと思うのも

無理はない。大司臯とは中央の官職名であり、国内の司臯を束ねる長官である。国政に参与し、司臯として軍事にも関わるなど、その仕事は多岐に渡る。もちろん中央での仕事の主なので滅多に前線^{ひょうせん}へなどは出向かない。その彰の現在の大司臯の任に預かるのは、氷越^{ひょうえつ}という若い男であった。

東衛の火焰 西征の虎狼 〱

瀑^{ばく}？は簡単な身支度を整え、衛門^{がもん}の前で大司臯 氷越^{ひょうえつ}が入城するのを待った。

旭日^{あさひ}はまだ淡い靄^{もや}がかつた山の稜線に引つ掛かり完全には登り切っていない。その為、山間の城内には早朝の冷たい空気が立ち込め、そして谷間に差し込むほのかに温かい曙光が砦内の至る所で立ち昇る炊煙^{すいえん}に色をつけ浮かび上がらせる。

従者と共に黄土色の門前で待つ瀑？の表情は喜びから次第に不安の色を滲ませ始めた。

大司臯は瀑？の將軍職の階級よりも無論上位である。瀑？の現在の位は国の第三軍の大將。大司臯は中央の高級官位、それを上回るのは軍事の全権を預かる大將軍ぐらいとなる。ちなみに春秋戦国時代での一軍は12500人。当時の大国となれば大体三軍まで有することができ、三軍で動員できるのは最大でも45000ぐらいとなる。それ以上は難しかった。

この頃の軍団の巨大化ができなかったのは、当時の諸侯が宗主である周王朝を尊重しており、また国々の人口が大軍団を編成できるほどに達しておらず、武器に使用される鉄器が量産できなかった為と言われる。だが周が衰退し戦国時代になると、人口の増加、糧秣・輜重の生産・運搬率の向上、そして武器の量産が可能となり一戦で十万以上の軍を興すこともできるようになった。

しかし、戴邦においては少々異なる。戴邦の軍制は、三軍を基本にしている。と言っても基本に置いていただけであって人数自体は国によってまばらで決まりは特にない。だが、三軍をもてる国はそれだけでそれなりの軍事行動ができる国力があるとみなされるので

ある。最大は六軍まであり、これを統御できるものは天子、つまり覇者であると言われる。ちなみに、三軍とは国の上軍、中軍、下軍の三つの総称である。ちなみに彰国では、現在のところ右軍、中軍、左軍（第三軍）とそれぞれ名づけられている。

しかし、三軍というのはほとんどが職業軍人の正規兵で構成されているのが普通であるのだが、結局のところ軍人も人口もそんなにいるわけでもないため、合戦などでは農閑期などに自国の農民などを徴兵しての混雑した編成軍で戦うことが多い。しかも、戴邦は西嬴（中華）ほどの莫大な人口があるわけでもないので、十万以上の興軍は稀である。

彰は衰退していると言っても現在（辛うじて）三軍を有しており、そしてその将帥が三人いる。それは璃邦（戴四邦の一つ）の人口が豊ということでもあるが、彰という国が諸国に囲まれており、三つの独立した軍でないと守り切れないのである。よって三軍はそれぞれ各個、將軍の意思で動き柔軟な対応ができるように先々代の彰王が改めた。これは失った彰の版図回復、拡大、防衛に功を奏したが、反面動き回る毒蛇を好き勝手に這いまわらせていると言ってもよく、次代の王に懐疑心を持たせることに繋がった。

門には先に数十人の薄紫の刺繍が施された旌旗せいぎを持った従者が入り、左右に分かれて主の車を待ちかまえた。瀑？は路を塞ぐように立ち、その男の乗る屋根つきの馬車を見据える。高貴な身分の人間が乗っているとは思えぬほど質素な外装であった。飾りも何もなく、ただ、屋根があり木枠の窓があるだけである。車夫もそこで雇ったような出で立ちをしており、豪華なのは身の回りの従者だけであった。

瀑？が氷越に会うのは初めてではない。以前、現王の即位式の時、にたまたま宮中の廊下ですれ違ったことがある。その時の氷越はま

だ単なる一司臯という身分であつた。軽く社交辞令で挨拶をしたが、当時の瀑？の印象では大して取るに足らない人物である、という程度であつた。それが今では瀑？の上位に就き、援軍として頼りにしなければならぬのは少々の屈辱を覚えたが、そこは割り切つてあまり考えないよう努めることにした。懸念はもつと別にあつた。

「これはこれは、お久しぶりです。將軍。歓迎、痛み入ります」

「援軍に参じていただき、真に感謝いたします。大司臯殿」

車から降りた氷越は恭しく拱手する瀑？と挨拶を交わし、瀑？の後ろにいる部下にも労を労う言葉をかけた。氷越のまだあどけない笑顔にはなんの不快感も感じられず、時と場にあつた表情が的確に出来る人間であるようであつた。

氷越は字を子堯しやうという。出自はよくはわからないが、彰国の西隣の丹国の人という。まだ25と若く、その若さで大司臯の任に就いたのは異例中の異例であつた。しかし、司臯としての実力は相当なものようで、彼が出る戦には必ず大部分の影響を与え勝利をもたらした。そして着実に功を積み重ね、権力者である司馬鋼にも接近してその地位を確立してゆき、昨年遂に大司臯となつた。国民は外国の人間がそんな重要な職に就くのに最初不安を覚えたが、その卓越した手腕と政治力によつて次第に国民の心を掌握していった。

「武装での出迎え、戦時中ゆえお許しいただきたい」

「お氣になさらず。私も建恭のことを聞いてなるべく質素にして参りました。私にできることがありましたら、何なりと。私兵を二千ほど城外に待機させておりますので、戦列の端にでも加えてやってください」

瀑？が驚くほど子堯の口調、態度は丁寧であつた。

「私兵を？」

「ええ、中央の兵士は割けないとのことでしたので、私の麾下の兵

を連れてきました。お役に立てるかはわかりませんが、国の大事だと思ひまして急いで参つたのです」

子堯は厚手の水色の深衣を纏い、長髪を冠で結わず耳にかけ、紫色の羽根をあしらつた羽扇のようなものを手にもつていた。瀑？の武人らしい顔つきとは異なり、氷越は爽やかな美丈夫という風である。

瀑？は、この男を警戒していた。司馬鋼の威を借りて大司臯となつたこの男は勿論、司馬氏陣営の人間であらう。そのような男がわざわざ来たということは、無論理由があると思つたからである。だが、もつと違ふ何かを瀑？は最初に会つた時から感じていた。それが一番瀑？を不安に駆らせていた。

「大司臯殿の御厚意、感謝いたします。ですが、勝手な兵の行使は王の許可が必要では？」

「すでに王に進上してあります。符も是に」

「ほう。立ち話もなんですから、これから一緒に食事でも。朝食の準備ができております」

「ではお言葉に甘えましょう」

瀑？は桂丘一帯を見渡せる、小さな亭へ子堯を案内した。卓子の上には豆と穀物を煮た汁物と近隣で採れた栗などの果物が積んであるだけであつた。

子堯は少し嫌な顔をしたが、すぐに表情を取り繕ひ席に座つた。

東衛の火焰 西征の虎狼 へ？

「あれが成軍の軍容ですか。中々に難いですね」

子堯（氷越）はチラリと桂丘を見やつただけで言った。桂丘には昨日まで見受けられなかった柵が立ち並び、壮麗な成の国色である緑の旌旗が森のように林立している。山間の風に揺られ、旗は鮮やかな緑を射光に映えていた。

「居ますね。司臯が」

瀑？と不騎はわざと驚いた風に見合わせ、司臯が？と言った。子堯は軽く羽扇で首元を扇ぐ。

「もうご存じでしょう。あそこに臯旗が掲げられていますよ」

瀑？は苦笑してみせるふりをした。臯旗は司臯が軍中にいる時に、居場所として示す為の旗幟である。

「いやはや、気付きませんでしたな。先ほどまでなかったはずですが……」

子堯はキツと目つきを変え、瀑？をやんわり睨んだ。

「先ほど先行させておりました部下に聞きました。敵軍に司臯が従軍しているのに気付かず、その虚を突かれ守備をされていた高策殿は夜襲を受け、將軍は何もできずに桂丘を奪われたと」

言葉に詰まった。その通りである。隠すつもりはなかったが、この男の出方を見る為にあえて伏せておいた。当然、この敗戦は瀑？の落ち度である。

「……援けではなく責めに来られたのか？」

いえ、と子堯は含み笑いを持ちながら否定する。

「誤解していただきたくないのは、將軍を揶揄しておるわけではないということです。將軍は大王……いや、司馬鋼殿の帰還命令によ

つて、もとは万全の態勢で建恭の守備に就くはずだった、しかし急遽王都に召還されました。それでは敵軍にも司臯にも俊敏に対応出来かねましよう。仕方がなかった……ということです。高策殿も……建恭の城民には残念ですが」

瀑？の眉が深く、溝を造り、固まった。不騎が瀑？に冷静でいるよう目配せしたが、石造りの卓子^{つくえ}は振り落とされた拳で音をたてる。「……ならばなぜ、止めなかった。何故あんな小物を要衝の守備に就かせることに何も言わなかった！それで建恭は壊滅だ。大司臯ならば王にも諫言できる立場であらう！？」

子堯は、ふうと溜息を吐き、落ちついてください、と諭してもう一度桂丘を見る。瀑？も熱くなつたのを省み、軽く謝辞した。

「言えば、私の首が飛びます。ご存じでしょう、王宮で司馬鋼様に反論できるものなどいないのですよ。王ですら司馬鋼様に気を遣っておられる始末。その後援で今の地位に就いていられる私に何ができましようか」

(……こやつ)

瀑？は落胆すると同時に、少し安堵した。だが、その表情の所々に埋伏したものが見え隠れするのを微かに感じる。あれだけの機略によって戦勝を挙げた司臯が、司馬氏の権力にただただ怯えるのだろうか。この地位に辿り着くまでに謀略も使っただろう、政敵も排除しただろう。そうしなければこの年で他国からやってきた後ろ盾もない流浪臯士が大司臯などにはなれない。それらのことから、瀑？は子堯という男を非常に警戒していた。その程度、と思っただけでもその警戒は解かない。

それに、と子堯は雪のような白紅の頬を摩る。

「はつきり申しますれば、將軍が守備に就いておられて勝てたかどうかという、若干の疑問が残ります」

「……ほう、私よりも適任がいると申されるか」

「將軍の守備戦における指揮能力に関しては天下でも比類なき才であることは私もお認めしております。実際、建恭陥落の報を受けてから対成戦における総大将に強く瀑？殿を推したのもこの私です。私個人としても、將軍には以前から並々ならぬ敬意を抱いておりますし。ですが、此度の敵軍を見ていると、瀑？殿を相当研究なされた様子」

「……私を、研究？」

彼が答えるまでの一瞬の間のさなか、白衣の侍女が両者の飲器にうす濁りの酒を注ぐ。亭の前面にこじんまりと拵えられた庭園の小池には、幾羽かの小鳥が舞い降りて水浴びを愉しみ、懷疑に細まる瀑？の視界の端を小さく騒がした。

「敵総大将は確か、魏素（ぎそ）といいましたか。字は李讓（りじょう）。彼は元、彰の朗令（ろうれい）（城の門番。戴邦では一般にこの名で呼ばれる）の職に就いていた兵士でした。列記とした彰人です。謹嚴実直で朴訥（ぼくとつ）、全く問題もなく仕事に就いていたのですが、何かの悶着あつてか突然上司を殺害して逐電し、そのまま数年諸国を放浪したあと隣国の成に仕官したとのこと」

よくそんな情報を。

傍らに立つ不騎は聞こえぬよう小声で呟いたが、子堯は聞こえているふうであった。

「成に友人がいましてね。その方から手簡（てがみ）が参りました。もちろんそれなりの報酬は払いましたよ。時に情報はこの時代において百金にも勝るものです、でしょう不騎殿」

その通りです、と不騎は苦虫を噛み潰したような顔でこれに答える。それでは情報戦でも負ける、と言いたげな言動に不騎は少々の不快を覚えた。

「とは言ったものの、魏素の軍指揮傾向は未だよく分かりません。何しろ、理由不明の急な抜擢で戦場での出陣回数も数回程度。まあ、建恭を難なく落としていますので、間違いではないようですが。あとは、先の対成戦で副将の近衛をしていた程度です」

「いたのか、あの戦いに!？」

瀑？は戸惑いを孕んだ様子で口を挟んだ。

「ええ。生存しているところを見ると主戦場にはいなかったようですね。……あれは死人の多い戦でしたから」

「……」

「建恭での塵殺ちんころはやはり……その戦の怨恨でしょうね。子堯殿が司臯を務められた、あの」

「そのようです」

言うのも憚られるように述べる不騎とは対照的に、子堯は意にも介さぬという非常に清々とした表情をしている。

「敵もこの首が欲しくて堪らないでしょう。何せ……私の術で成軍二万が屍となりましたから」

齒を見せ微笑する子堯は、その戦で大司臯への地位を確立した。

4年前、彰は強大となりつつあった成を討伐するため、連合軍の盟主となって兵馬三万を成国境へ進軍させた。総大將は丞相、司馬鋼の子しはけん司馬肩しはけん。司臯に当時名を広めつつあった子堯が任命された。

成軍は丁圃ていほという当時成の三名将と呼ばれていた老将に精鋭約二万五千を預けこれに当たさせたが、子堯の臯術によって成軍は壊乱し、ほとんどが戦場で死亡。彰軍はそのまま進軍し城を三個奪う大勝を挙げたが、ほどなく連合軍の内部亀裂によって連合は崩壊、さらに司馬肩と子堯も別の戦場へと移っていて駐留軍に不在であったため、その機に乗じた丁圃の反抗によって取った城は悉く奪われてしまい、

逆に国境を押し上げられる結果となった。

その後、丁圍は多数の死者を出した敗戦の責を負って自殺。そしてこの戦は成人に深い憎しみを植え付ける形となる。そして、成は数年の富国強兵策で勢力を盛り返し、今、五万以上の大軍をもって東璃の平定に乗り出した。ちなみに瀑？はこの戦には別方面の国境守備をしており参戦はしていない。

「ならば、子堯殿が研究されるはずではないのか」

「無論されていらっしやるでしょうが、瀑？殿は特に」

「何故だ」

「……噂ではありますが、魏素は瀑？殿に何やら特別な感情……言うなれば“憧憬”を抱いているらしいのです」

「憧憬？」

「私も半信半疑でしたが、建恭での成軍の攻城隊形と、かの軍容を見て悟りました。魏素は瀑？殿を知りぬいております」

先にも述べた通り、瀑？の彰国内での功績は目を見張るものがあった。主に防衛戦でその能力を発揮し、領土と領民の盾となつて幾度も外敵を防いだ。その為、国民からの人気も高く、内密に他国からの誘いも何度かあつた。

普通、繁栄した国家が衰退を始めた時は歯止めが効かないものだが、この国は政府中枢が腐敗しても稀有な事に有能な武官が存在しその外殻を辛うじて守つていたのである。歴史を見ても、自分よりも才能・人気のある臣下はその上に立つ権力を握るものにとって、よく恐怖と嫉妬を生むことになった。

瀑？はそのような利己的な政治を嫌つて考えないようにして、目上に対し貢物や遜^{へりくだ}るようなことを一切しなかつたため司馬氏などの勢力に疎まれることになるのだが、現在の窮乏した国内情勢は遂に国土である瀑？に壮烈な怒りと将来への焦燥を抱かせることになる。そして苦心の末導き出した答えが、王とその取り巻きを排除する為の謀反だつた。

会つて一刻（約30分）も経たぬ男に不快からくる苛立ちを覚えていた。何かに見透かされたようなその言い口は、瀑？の自尊心を素手で撫でまわしているかのようである。

そして子堯は、恐縮とは言わないまでも、袖を整え身を正した。

「故に、私は無理を押してここに参つたのでございます。このままでは瀑？殿が“敗北”すると見越しましたので」

なるべく冷静に構えていた瀑？も、険しい面持ちを隠せなくなつた。確かに、援軍を恃むほど困窮する状況であるのは事実であり、

自らの足りなさも自覚するものであるのだが、面と向かって敗北すると言われるほど自分が敵に及ばないなどとは思っていない。

「まだ負けると決まったわけではないのに、どうしてそのような事を言うのか」

瀑？の睨みは一層厳しくなる。

「先ず、將軍は政治的に不利な立場にございます。国の第一権力である司馬氏と犬猿の仲ですから、援軍の期待は望み薄です。さらに王都周辺の守備兵もそれゆえ割かれません。そして、周辺の徴発できる兵員もわずかで、その内わけを見ましても成人にもなっていない子供と老兵ばかりとか。そこで、成との間で兵力差が生まれます。城を盾にしているとはいえ大きな不利の要素です」

「それならば、なぜ子堯殿が国の危機と言って進言しなかったのだ」
「先ほども申しました通り、不甲斐なくも私にそこまでの力がございません。建恭陥落を受け瀑？殿以外ではこの国は滅びると申し上げてようやく通ったわけですから」

「ほう……敗北する者を推した、と？」

「ええ。ですがこのままでは、と申しました通り、今は違います」
「何が違う」

子堯は破顔した。

「私がおります。これは完全に敵の想定外です。敵には私の首を家族を質に入れても欲しい輩もいますが、同時に自分を質に入れても私に遭いたくないと思っている輩もいます」

確かに。と側の不騎が呟く。

「いずれ成軍にも氷大司臯の情報は届くでしょう。その時敵が思うことは圧倒的に畏怖であると思います。何せ……」

「そうですね、私は成の領内でその名を出せば子供も泣き止み、大の男も妻を残して逃げ出すという噂もあるほどですから」

子堯にとっては非常に面白いことなのだろう、周りも顧みずにそのまま高い声で笑い出し、それが止むと女性のような小さい咳払いを

した。

「さて、軍の指揮権は依然陸將軍にあります故、私は指示があればその通りに動きましよう。私兵もどうぞお使いください。頼みの援軍は恐らく半月以上かかると思いますが、敵も短期決着をお望みのようですので、その間に決着はついてしまうでしょうから、現在の兵力が最大とお考え下さい」

「なに……！？この場所の重要性が分かっていないのか！？」

高鮮が落ちれば、後は平野と河川が広がる広大な彰の領内へと雪崩れ込まれることは地理に少しでも精通していれば明白であった。しかも、城民と揉めている城邑も付近にあり、それと迎合されればたちまち戦火は内部に広がり国家は瓦解する。謂わば、建恭と高鮮は彰という国の最終防衛線なのである。

「分かっておいででしょうが、遠い場所での危機より目先の損得を考えるお方ばかりですから……。今あの方たちが一番恐れているのは外敵よりも味方の反乱なのです。全く、愚かときかいいようがありません」

その言葉を聞いて瀑？の目の色が少し変わった。

「大司臯殿は国を憂いておられるのか」

そうですね、と子堯は空を見つめる。

「憂う、とは違いかもしれません。私はこの国で生まれたわけではありませんので、かつてのこの国がどうだったかなどは伝聞や史料などでしか存じ上げません。私が来た時からこのような状況でしたから、特にそのような感情はございませんし。しかし」

「しかし？」

「丞相には私をここまでの地位まで推してくださった大恩があります。ですが、この地位を得てから少々客観的に物事を見ることができるようになったと思います」

瀑？はそれを子堯の心が揺らいでいると捉えた。

「それでは將軍の軍務に障りますので、私はこれで　ああそうでした、もう一つ。敵軍が攻めよせるのは明日の明朝でしょう。今夜の夜襲はないと思いますよ」

今回の敵軍を見るに、その行軍は神速であつた。僅か四日で建恭へ押し寄せ、七日で落とし、その翌々日に高鮮へと先鋒を差し向け桂丘を占拠した。ならば、今回も相手が体勢を整える前に迅速をもつて攻めるのが普通と考える。なので、瀑？はそれを見越して兵士に少し多めの飯と弩などの装備を施した。

「理由は？」

「……司臯としての、勘です。耳触りでしたら、お忘れください」
そうして、子堯は従者と共に悠々と木門から出ていった。

東衛の火焰 西征の虎狼 〈?〉

桂丘の崖岸^{がいがん}から、緑の山間に聳える暗灰色の砦を澄んだ目で見つめる男がいた。

太い腕を組み、生やしっぱなしの髭を手に絡ませて何かに耽^{たふ}っている。足元には高の字が書かれた旌旗^{せいき}が踏みつけられて散乱し、燃え残った人体の一部が処理されずに土に埋もれていたが、彼の視界には入っていない。背後には代わりに魏の一字が入った旌旗が林立している。

「李讓^{りじやう}、ここにおったか」

杖をついた老人が男の広い背中に呼び掛けた。彫りこまれた皺の一つ一つが伸縮し表情を作っているが、そこからは笑んでいるのかはわからない。

「おい、李讓」

その李讓は背中を杖で突かれてようやく後ろの人物に気付いた。

「また奴のことを考えておったのか」

「いや……それは」

「凶星じゃな」

「……」

李讓は何かを言おうとしてやめ、口元から顎を大きく摩った。

「奴はすでに過去の人物じゃ。今はお前の躍進の踏み台に過ぎん」

「……そうかもしれませんが、元老^{げんろう}」

この70近い割に背の張った老人の名を玄順^{げんじゆん}という。李讓はこの老人に敬意を込めて元老と呼んでいた。李讓の参謀であり司臯である。

「国から国へ漂っていた無名のお前と出会ってから早五年、ようやくここまで来たのだ。儂の目に狂いはなかった。お前は稀代の才能

を持つておる。今更何を躊躇う必要がある」

今にも飛び出しそうな目をさらに大きくして、玄順は勇壮な眉を垂らす男を叱咤した。

「このような私をここまで教え、補佐していただいたことは、非常に感謝しております。ですが……」

何やら引けた様子の李讓を前にし、見よ、と玄順は杖で桂の木を指した。

「彰の国姓は桂、そしてお前が奪い踏みしめておる地の名も桂（丘）じゃ。偶然か？今や彰もこの老いた桂の樹皮のように縦に割け、様々な箇所で皮が剥離しておる。これを切り倒し、新たな大木を植えるのが我々の天命じゃ」

指した桂の樹は初冬の為その葉を黄茶にしており、地面に落葉した葉からは独特の甘い香りがした。

「儂はお前に残りの人生を賭したのだ。初めて会って儂に師事したと言ったときお前は言った。あんなみすばらしい姿で自分に賭けてくれ、と。一笑で付するところであつたが、お前の目は誰よりも澄んで野望に盛っていた。もう一度あの目を見せてくれんか。枯れそうになつていた儂にもう一度野心を灯したあの目をな」

李讓は自分を思い出すかのように深く頷いた。

玄順は、縦横家の思想に昏倒したことがあつた。自らの弁舌と能力を最大限に駆使して諸国を渡り歩き、天下を大きく動かすのである。小人である自らが人物を補佐して出世させ、自らの理想の世界を実現するために巨大な天下を揺り動かすことに最高の悦楽を感じ、その為なら殉じても構わないという人々である。

司臯でもある玄順はかつて他国に身を置いていたが、司臯としての役目しか与えられず、作戦立案に口出しはさせてもらえなかった。少ない俸禄で自らの才能を生かしきれない鬱々とした日々を嘆きな

がら生き、野心に満ち満ちていた若いころに買い込んだ書物を読んでは市井で私塾を開いて軍談や講義を行って年月を過ごした。そして、老いを悟り、もう野心の火種も燃えつきかけていたところへ、見ず知らずの若い男がいきなり転がり込んできたのである。

「玄老、この大役を完遂することは我々の将来の為、推して下さった人の為、通らねばいけない道であることは承知しております。しかし、書生しよせいとして過ごし将来官吏になるつもりでいた私が、数万の兵士を従え今ここに立っているのは、朗令ろうれいの頃見た勇壮な陸將軍がいてこそであり、今もあの方に恐れ畏怖し目標としてきたのです。今こうして矛先を向けあっている……、それだけで私の目標の半分は達したようなものですが……」

辺りには山間から吹く風に乗って、微かに旨そうな炊煙の臭いが立ち込めた。

「どうしたのだ」

「ここへ来て思うのです。あの方を超えたときの自分がどうなるか、想像が付かず、たまらなく恐ろしくなります。士気を高めるためには一時的勝利の愉悦に浸り、建恭の民を塵おち（皆殺しに）しました。その時の自分がいずれ全てを支配して歯止めが効かなくなりそうで酷く怖いのです」

玄順は皺苦茶の顔を強張らせた。臆病者め、と内心罵ったが、それは言わなかった。

「阿呆！畜生に堕ちるとでもいうのか？まだ勝ってもおらんのに、勝った後の心配をしておるなど、愚者のすることじゃ。儂は負けるとは思っておらんがこのままで勝てるなどとも思っておらん。現に、お前に伝えねばならんことがあるから来たのだ」

「……」

李讓は幾重にも折曲がった文書を血管が浮き出た老人の手から受け取りその場で広げた。

「内通者から報告があつた。氷越があの砦におる」

玄順は李讓がそれを聞いて驚くかと思つたが、この巨軀きよくの持ち主はそのまま表情も変えず首だけを上げると、ぽつりと玄順に呟いた。

「攻めるのは明日の朝にしましょう」

瑕疵 〈？〉

茫洋とした人の海原をふわふわと漂っているような不思議な感覚をずっと覚えていた。相いれないものの上で、静かに漂う。いつも天から見下ろしていたその蠢く人間達の海原は、今、蒸気を噴き出すかのような熱を運び、渦を作って、世外の生き物である雛龍を大きな口をあけ呑み込もうとしている。

子琳にとってそれは、自分の好きな綺麗なものでもなんでもない、欲望と激情に満ちた禍々しい世界であった。だが、一瞬の刹那の中に時折儚いまでの美しさを、この下界の人々は演出する。その魅力にこの幼い龍は、ひどく心を惹かれた。と、同時に知りたがった。今こうして、ふわふわと漂っているのもある意味いいかもしれない。なにか素敵なものが見られるかもしれない。いつも、嘶のなかしか覗けなかったこの宇内に……。

子琳は人々の歓声でその目を覚ました。

昨日と同じで、眠ったはずなのにどこか疲れが取れない身体を、寝心地の悪い筵からいやいや起こし、寝起きでぼやけた視界を手の甲で擦って木窓から外の様子を眺めた。龍の力の源である腕輪がない為かどうも疲労の回復が遅い。

見ると、人だかりが高台の方にできている。何事かと、寢床横にある木窓から首を出して覗こうとしたところで、入口の木戸が鈍く軋んだ音を立てて開いた。

「起きたか」

陽気な声で飯の入った碗を二つ両手に持ちながら入ってきたのは廉

毅だった。

「まったく、あんなところで寝てたら風邪ひいちゃうぞ。瀑？様が見つけてわざわざここまで運んで下さったんだ。後で会ったら礼ぐらい言っておけよ」

はつと頭を掻きながら辺りを見回した。昨夜はあの景色を見ながら堂の上階で疲れて寝てしまった……ようだ。眠ったかどうかの記憶がほとんどない。あの男がわざわざここまで運んでくれたのか、と一瞬信じようか考えた。

「で、昨日のはなんの話だったんだ？」

素手で飯をつまみながら言う廉毅の表情は疲れているのか少し曇っている。曇っているのに声が陽気調なのは廉毅の人物を表しているように思えた。どういえばいいのか戸惑っていると、

「やっぱり俺なんかが聞いちゃいけない話だよなあ。わかってるわかってる、言わなくてもいいさ」

そついうわけじゃ、と小声で否定する。やはり他言はしてはいけないことなのだろう。でも、なぜ巻き込まれた自分がそんな遠慮をしなくちゃいけないのかと、内心反問した。廉毅はいい人だと思う。昨日会ったばかりではあるが、それは子琳の感性がそう言っているのと、なんでも聞けば機密じゃない限り気さくに答えてくれる素直さからだった。でも、子琳の心のうちには薄い境界線が未だ引かれたままであり、なんとなく龍として踏み込んではいけない気がした。

すると、また外で歓声が沸き起こった。歓呼三声、三回ほど大きな声が上がった。がしゃがしゃと金属音もする。

「廉毅さん、外が騒がしいんですけど何かあったんですか？」

「ああ、援軍に大司臯が来なさったらしい」

「大司臯？」

子琳は首を小さく傾げた。

「国の一番偉い司臯だ。本当なら前線なんか顔出すような人じゃ

ないんだが、国の大事と私兵を率いて援けにきたらしい。今その前を通って行ってるんで、みんな集まって歓迎してるってわけさ。おかげで今の士気はあちらさんと変わらんぐらいに盛り上がってるよ」

「じゃあ、勝てるんですか？」

子琳には軍事のことはよくわからない。司臯というものは臯土と同じものだというのは知っていたが、大司臯という役職があるということまでは知らなかった。でも、今までの話を聞いているとこちらの状況が芳しくないことはわかる。

「勝てるかって言われると、正直微妙だな。これで五分くらいだろう」

廉毅は喋りながらばくばくと口へ飯を運ぶ。

「敵は精強、兵力もあつちが勝ってるし、なにより要衝を落としたばかりつてのが大きい。勢いに乗ってる。対してこっちは負けたばつかで、^{じいじい}微慌に結果的に助けられたとはいえ、援軍もこれ以上は期待できないし不利な状況は変わっていないな。まあ、俺にも知らん複雑な状況が絡み合ってるみたいだから、これからどうなるかは俺には想像がつかないな」

寝惚けた頭を動かす為に、子琳は瞬きを多くして、廉毅の言ってることを理解しようとした。

「難しいか？」

少し考え、細い首を左右に揺らした。

「でも、そんな不利な戦況なのに、その大司臯さんが来たら一気に五分になるってすごいですね」

廉毅は、ああと飯の手を止めると、確かにそうだな、と飯粒のついた手を衣服にのじって子琳と同じように首を傾げた。

「お前も彰人ならわかると思うが、あの方は別格なんだよ。^{ひょい}氷越つていうんだが、出た戦のほとんどに勝ってる。言うなれば常勝司臯だな。対成戦なら数年前に、うん、まあいいか。氷越が司臯として従軍した成との戦で大勝してな、だいたい二万くらいの成兵を

討ち取ったんだ。成は未だにその戦の傷を抱えたままで、国内の奴のほとんどが氷越を恐れてるんだよ。憎んでる奴もいるがそれ以上に恐れてる奴が多い。俺は瀑？様に就いてたから見てないが、そりゃあ凄惨だったらしい。だから建恭で憂さ晴らしに彰人が虐殺されたんだろう。国境近辺だから他国や自国民も混ざってたろうに」

司臯も龍も臯術を行使する。もし、臯術で二万もの人間を殺められるならば、龍もそれができてしまうということだろう。一体どんな術を使ったのだろうか、と子琳は無垢な好奇心を抱いた。

「その氷越って司臯は、何をしたんですか？」
廉毅の手が再び動く。

「司臯の術ってのは戦に深く関わるから対外的に秘匿扱いを受けててな、詳細はよく知らんが術を受けた奴に話を聞いたことがある」

子琳は藁をどかして聞く姿勢をとった。

「ま、言っても大丈夫か。どうやら、良心を打ち消す術らしい」

「良心を……打ち消す？」

「うーん、なんというか、人を冷酷にするんだそうだ。血を見ても仲間が倒れても動じず、ただ前の敵を冷徹に殺したくなるんだつてよ。そいつ自身、我に帰った後で心を病んで里に帰っちまったけどな」

廉毅は柄杓を使って碗をじゃぶじゃぶ洗いながら、空に放り投げるように呟く。

「大抵 俺もそうだが、敵とも言えどもたまに情が移ることがある。性善説を唱えてるやつがいるが、そういうものなんだろう。まだ戦場を経験してないからわかんないだろうが、積極的に相手を殺そうなんて思う奴なんてほとんどいない。だいたいは消極的な殺しだ、と俺は思う。幾つかの修羅場は潜ってきたつもりだが、どうもその辺りがまだ割り切れてないんだ。でも、その術にかかっちゃうと、単なる野卑な虎狼になっちゃうって、そこらへんの部分を考えなくないって積極的に殺せるんだろうぜ。その話を聞いて俺はなんだか、氷

越つて奴が怖くなった」

「どうして？」

子琳の疑問はすぐ言葉に直結する。

「どうしてって……、人を畜生同然に変えちまつて好き放題殺させるんだ。たがが外れた人間が一番強くて怖いんだよ。確かに、軍にとってそれは非常に有用な術なんだろうが、そんなものの積み重ねの上に胡坐をかいて座れるなんて、俺には無理だ。単に俺が小心者ってだけなんだがな。ある意味尊敬するよ」

そう言う廉毅の顔は、少し自嘲を込めているのか若干にやついている。洗い終わると、さあ、と言って立ちあがって子琳に、

「ちよつと喋りすぎちまつた。今日は攻撃を恐れて城内が騒がしいからここから出るなよ、いいな。邪魔になるだけだからな。飯はそこに置いとくからちゃんと食って碗も洗つとけよ」

そう言うと、廉毅はもう一度出るなということのを念を押して外に出ていった。

子琳は湯気の立っている飯をぼんやりとみたまま、ちいさく俯き加減になった。

ただここで待っているわけにはいかなかった。逃げてしまいたいが、彼等を見届けてみたくなってきた。気持ちの上では、下界を天上から見ているような感じなのだが、実際はその渦中におり、成り行きによつては被害を受ける。しかし、この渦の中に何か自分のものを見出せそうな気がする。情が移る、そういうものなのだろうか。

その時、窓枠をコツコツと叩く音がして振り返ると、綺麗な茶の瞳が外から覗いていた。

「ねえ、子琳。昨日の妖獣見にいつてみない？」

瓊凜の喜々とした表情がそこにあった。

瑕疵 〈？〉

子琳と瓊凜の二人は周囲にばれない様に、ひっそりと兵舎を抜けだした。外敵への見張りに人員が多く割かれ、みな大司臯を見に行っている為か、小さい子供の二人は案外誰にも見つからずにすんわりと抜け出すことができた。

廉毅の言いつけをこんなに簡単に破ってしまつて大丈夫なのだろうかと一瞬思つたが、ふしぎといつの間にかどうでもよくなつてしまった。

「子琳も興味あるでしょ、私間近で妖獣^{ようじゆう}なんて見たことないの。いつも危ないからつて近づかせてもらえないのよ」

瓊凜の目はいつにも増して眩しくきらめいていた。櫓から見えないよう、崖の影になる道を跳ねるようにして歩く彼女についてゆくのは、疲労の取れない子琳には辛いものだが、何故かそこまで嫌だとは感じない。

実のところ、あの妖獣^{ようじゆう}についてはずっと気になっていた。人が儼獣を飼ひ馴らすというのはどこかでちらりと聞いた事があるが、実際に見たことはない。だが、少し市中を探せば妖獣の売買を生業にしている輩なんていうのは巷にごろごろいる。稀有な妖獣は高値で売り買いされ、騎乗用、嗜好用となるとその値は一気に高くなる。堕ちた人間の売り買いもしているのだから、言い換えれば人身売買と言ふに近い。敗戦国の人民を奴隷として売り買いしていた国など珍しくないこの時代であれば、その辺の倫理観はあまりないと言つていいだろう。人身売買など日常茶飯事であるということだ。しかし、奴隷という制度は人の自立性を失う野蛮な習俗であると唱える一派もあり、最近では奴隷階級を設けていない国もちらほら現れている。

正直なところ、子琳にとって妖獣・魔獣などなんの珍しさもないのだが、あの堅物そうな瀑？が獣などを手懐けているというのは、興味の琴線に触れるに十分であった。

肩幅ほどの崖沿いの小道を抜け、なんとか妖獣が居ると言っていた高台にある厩舎きうしやの裏手に辿り着いた。崖からは砦の裏手にある高鮮の街巷がいこうを綺麗に俯瞰することができ、至る所で炊煙が立ち上り、慌ただしく人々が城の中心である街衝がいしょう（街の中心街）を往来しており、戦中であるのを一瞬忘れさせた。

よくこんな裏道を知っているなと感心していると、突然瓊凜が振り返って子琳の口を小さな手で押さえた。

「あれね」

瓊凜が静かに指さす方向を見ると、厩舎の中の暗がりには何か馬ではない大きな緑色の影がいる。しかも二頭だ。

「入って近くで見てみない」

奥の小屋に厩丁きゆうてい（厩の世話係）が入って行くのを見計らって、二人はその大きな緑色の影に近づいた。

厩舎の中には馬はいなかった。さすがに妖獣と一緒にするとよくないのか、それが連れて行かれたのだろうか。物陰に隠れて覗くと、積まれた秣まぐをはみ出して何かかもぞもぞ動いている。

「まあ！！」

その妖獣を目の当たりにして瓊凜の眼はその輝きをさらに増した。

そこにいたのは、馬と虎を足したような形態をし、子琳の身長の三倍ぐらいの高さで、体中にびっしりと生え揃う緑と黒の美しい毛並み、そして背には光の当たり具合によってきらめく潤美な翼を持つ凛々しい獣だった。

片方は紅の鬣たてがみを、もう片方は緑の鬣をもっており、鋭い曲剣のような牙が口元から見え隠れする。

「す、すごいわ……一体なんて言うのかしら」

瓊凜は導かれるようにこの妖獣の前に出た。二頭の妖獣はこの突然の来客など意に介さぬような落ちついた様子で、格子の外を眺めたり、お互いの毛繕いよくすいをしている。お互い仲が良いようだ。

「確か、翼翠よくすい」

子琳の記憶のどこかにこの妖獣の名前があつた。非常に美しい妖獣で、子琳も一度見たきりだった。これが元、人である儚獣ならばとても稀なことであり、地方によつては逆にめでたいとまで言われるほどである。なぜ翼翠になるのかはよくわかっていない。

「へえー翼翠っていうんだ、よく知っているわね」

「い、いや……画書でちよつと見たことがあるだけで……」

「へえ……」

瓊凜の興味はすでにこの妖獣にしかなかった。翼翠の些細な動きも、まるで猿の芸でも見ているように手を叩いてはしゃいでいる。恐れなど微塵も感じていないようだ。

「私、こんな綺麗な生き物初めて見たわ。すごい、すごい、こんな生き物を手に入れるなんてやっぱり瀑？様はすごい人なのよ。廉毅って奴は嘘つきね、こんなにおとなしいじゃない、喰われるなんて言いすぎよね」

興奮で火照つた頬が赤く染まる瓊凜を横目に子琳は少し浮かない表情をした。子琳には触れるよりも容易にわかつた、この翼翠は人であつたということが。

しかも二頭ともである。素人目に人だったか元からの獣かなど見分けはつかない。専門的な知識さえあれば外部の差異などで判別はある程度可能であるが龍には直感的にわかるのである。一説には心を失つた痕跡が見えるからだという。

「瓊凜、この翼翠は……人だ」

瓊凜はきょとんとして、子琳の顔を見つめた。

「どうしてそんなことがわかるの」

「……それは」

また余計なことを言ってしまったとやや後悔した。思ったことをすぐ口に出してしまう癖だ。

「なんとなく……そう、なんとなく」

「ふーん、でも人がこんな美しい生き物になれるのなら、それもいいかもしれないわね。なんだか憧れちゃうわ」

そう言っただけ微笑む瓊凜の目は妙な寂しさを秘めていた。それを見てふっと、この醜い現実からの逃避を望んでいるのだろうか、そう心のどこかで思った子琳は、この活発な少女の身上を思っただけ同情を感じざるを負えなかった。そして、瓊凜はしゃがみ込んで地面の土を指で遊び始める。

「翼翠もいいけど、私龍になりたい。雛龍に」

「ど、どうして……？」

子琳は少しどきりとした。地面に龍と描いて瓊凜は溜息を吐く。

「だって、自由じゃない。美しい龍宮で何不自由なく過ごして、卑劣を使って、飛んでいろんなところへ行けるし、綺麗な絹の衣を着れるし王族が身につけるような宝飾ももってるし、何よりずっと楽しくそう。そう思わない？」

子琳はとりあえず頷くしかなかった。確かに、雛龍は下界の人々の大半が持っていないものを持っているし、龍宮では非常に丁寧に扱われ護られている。人々が憧れて止まない生活を過ごしているわけであるが、その大半の人にあるものがない上、制約、そして責任も多い。今もこうして拘束状態にあるのだから、正直心から楽しいとは言えない。子琳にはむしろ下界の人々の生活のほうがいい思っている節があった。

「でも、無理……。私みたいな醜い心を持った子供なんて仙帝から召されるはずもないもの。雛龍は純粋で無垢、私は親の仇に凶悪な復讐心を燃やしてる。ほんっと……どうして……」

瓊凜はぼろぼろと涙を零していた。鼻水をすすっては腕で拭い鳴咽のような声をあげて泣き声を我慢している。子琳にはどうしていいかわからなかった。どうすることもできない。この哀れな少女を救う手立ては今の子琳になどなかった。雛龍である自分は純粹で無垢などとは思ったことはないから、そこまで気落ちすることもないとも言えないし、仙帝に瓊凜を召すよう奏上することもできるわけがない。またいつの間にか複雑な心境の狭間で板挟みになっていた。案外龍は無力なのである。

すると、突然二頭の翼翠がいきなり唸り声をあげて厩舎の外に威嚇している。みると、外に幌ぼろをつけた車馬が止まっていた。幌とは乗用車につける日よけの幕のことである。この時代、車は身分のあるものしか乗ることを許されなかった。御者が御す二頭から四頭の馬に車体の部分曳かせ、乗る人がその車体に立ったり座ったりして乗るのである。位のある人物を乗せる御者には官位が与えられたというから、その時代の車の重要性がうかがえる。

「誰か来た」

慌てて俯く瓊凜の濡れた腕を掴んで、物陰になる秣の裏へ隠れた。馬に乗る武装した男が二人降り大きく何かを呼ぶように声を上げ、次いで車に乗っていた男が下車すると厩丁が転がる様に小屋から出てきて平服した。そしてその水色の深衣を纏う高貴そうな男は厩丁に何かを告げると、二人の男を引き連れ厩舎に向かってきた。

（大変だ……）

厩舎の入り口は一つしかない。そこから出れば見つかってしまう。廉毅を怒らせたくなかった子琳はどうやってこの状況を脱しようか慌てて考えた。

「見つかったら、さすがに叱られるだけじゃ済まないわね」

瓊凜もなんとか落ちついて、辺りを見回し逃げられないかと考えるが、

格子にはすべて木棒がはめられ、子供といえども抜け出せる大きさではない。

そうこう思案している内に、三人組の男が厩舎の中に足を踏み入れた。中に入るなり脇の武装した男二人が声を上げて驚く。

「これは……！！翼翠」

「子堯様、この妖獣は」

（子堯様……？確かこの国の大司臯の名じゃない。どうしてこんなところに）

瓊凜は訝しそくに隙間からこの男達を観察した。子堯は不敵な笑みを浮かべると、木簡と筆を取り出し、さらさらと何かを書いた。

「この翼翠はおそらく儚獣、元人です。私の推測が正しければの話ですけどね。ですが、正しければ瀑？殿はとんでもない隠し玉を持っているということになります……。しかし二頭とは、少々推測とずれが生じますね」

「どういうことです……子堯様」

「あなた方の俸禄には見合わないことです。知れば身を滅ぼしますよ」

子堯の声はとても冷たい。声色なのか口調なのかわからないが、ひどく冷徹なものを感じる。子琳は廉毅の言っていたことを照らし合わせながらこの男を見た。人の激情と凶暴さの上に胡坐をかいて坐る人物、その割にはとても品のある清廉な顔をしている。だが、子琳には彼から感情とは程遠いものしか感じなかった。温もりなどなく、ただ氷のように冷たい。それだけで子琳には彼に対し畏怖を持たざるを得なかった。

「構いませぬ」

二人はそう言い切った。子堯はふうと息を吐きだし二人に目も合わせず、木簡に筆を滑らせている。

「この翼翠は襄王（先代の王）の太子です」

瑕疵 〈？〉

厩舎きゆうしゃに一瞬の間が生まれた。従者である二人の男はこの言葉の意味の重大さに間を置いて気付いたようであった。

「殿、事が大きすぎます」

「大王と丞相じやうちやうが処刑じゆけいなされた太子がなぜ瀑？のもとに……？」

（太子……？）

子琳は首を傾げた。なぜか、この言葉の意味が記憶から欠落していた。そのときは、この言葉の意味よりもむしろ、なぜ自分が瞬時に思い出せないのかが強い違和感を覚えていたわけであるが。

瓊凜けいりんが察したのか、微かな声で子琳の耳元に呟く。

「王様のお世継ぎのことよ」

ああ、そういえば。と合点がいったのと同時に、頭がずしりと少し重くなったような感触を覚えた。このときはまだ、彼は些細な体調の変化としか捉えるにすぎなかった。

子堯は周りを一瞥した。

「蜘蛛糸を手繰るような憶測ですが、半年ほど前、生前に太子の所持しておられた印と剣が宮中の国庫から持ち出されたという噂をたまたま親しい官吏に聞きました。これが私に噛み合わせのよろしくない事実として頭に植え付けられましてね。若い現王に未だお世継ぎはなく、空席の彰国太子の印璽など今はなんの意味を持たないのです。それでは何故盗人は嚴重な警備の敷かれた宮中から、わざわざなんの効力もない印と剣だけを盗んだのか。国庫には創国の頃よりの名剣や金銀玉器があつたはずですが、なぜそれらなのか。襄王

の三人の太子はみな殺されたか他国で庶民におとされているのにも関わらず、です」

喋りながら子堯の顔から笑みがこぼれた。

「太子がまだ存命であると……？」

「可能性は高いですね。そうならばどうなるか……」

まだ幼い子琳と瓊凜には難解な話に聞こえた。しかし、その重大さが子堯の話ぶりと側近の顔色や国という単語で多少は分かる。彰という国の明暗を分かつような規模の秘密の話。ということは、聞けば子供でも見つければ容赦はない。そのことを本能的に察知し、縮こませた身体をさらに恐縮させた。

その時、外から砂利道の轍わだちと車輪が擦りあう音と何頭かの蹄の音が聞こえた。

音が聞こえるや否や、子堯は簡をさつと懷にしまつと小さく舌打ちをし、側近に告げた。

「勿論、この事は他言無用です。まあ言つたところで誰も信じはしないでしょうが」

そう言つと、翼翠よくすいに一瞥を向ける。これが、太子ならば　もう一頭は　。

そのとき、たまたま視界に厩舎の湿った地面が映つた。何かが描かれている。それは文字だった。

雛龍

（雛龍……！？）

子堯の表情が一瞬強張つた。

「どうされました」

「……いや、なんでもない」

子堯は地面の文字を足で消すと、袖を翻して外へ出ていった。

瓊凜は藁の隙間から子堯達が見えない位置に行ったこと確認すると、子琳の手を握った。不思議なことに彼は汗をかいていなかった。「今しかないわ。早く逃げましょう」

手を引かれながら子琳はもう一度、この美しい翼翠を見る。そして、想った。綺麗だ、と。

「そうか、大司皐が」

瀑？は幕営で布帛ふはくの陣図を眺めがらその報告を受けた。

「……知れたか」

「殺すべきです」

韓泰かんたい 麗其れきの発言にその場にいた他の三人が同意した。事実を知っているのはここにいるもののみである。

「奴は危険です。ここに來たのも我々の秘密を内偵をするために違いありません」

「ならば、知れているということになる。私は真っ先に將軍の任を解かれていますはずだ。それに」

瀑？は布帛に描かれた桂丘の文字を指でこつこつと叩いた。

「大司皐なしでどうこの窮地を乗り切る。これ以上の援軍も恃めない、後方では火種、前面には城壁を乗り越える奴がいるときた。司皐なくしては勝てんだろう」

「確かにそうですが、外敵よりも内敵の方が恐ろしいとよくいわれております。後顧の憂いを断つ為にも、ここは「明察を」

蘇甲が声を押して意見を述べた。これに対して、瀑？は面を伏せ、少し口を曲げた。

子堯のあの冷静な顔が脳裏に浮かぶ。奴が何を考えているのかなど見当がつかない。だが、彼が完全に敵だとは思えなかった、と同時に、同じ志を遂げられる者だとも思えなかった。各々の異なった思惑がこの件に関してだけ交差した、というような感じである。

「良（不騎）はどう思う」

不騎は間をあえて作った。瀑？が望む答え、それを考えた。客観的な天秤にかければ、それは自明である。

「今は、国を寸分でも守ることが、懸命かと」

この答えを聞き瀑？の面持ちが少しばかり明るくなった。

「そうだな。大義の為、毒を制す為に毒を服することも致し方なし、か」

この瀑？の言葉に集まった者達は何かを含みながらも渋々頷いた。だが瀑？に疑念は抱いていない、状況を見れば飲まねばならぬ毒であつた。

「毒は少量であれば薬ですが、量を誤れば致死。毒が体に回りきる前に処方をしなければなりませんまい」

「そうだな、と瀑？は頷く。」

「奴を龍には近づかせぬことだな」

瑕疵 〈？〉

成という国は戴四邦のうちの璃州（東璃）の東南に位置する。

西を彰と国境を接し、東に海を有する。首都は渟都^{ていと}。ここから渟^{てい}ともいわれる。土地は戴邦のほぼ中央。嵩邦^{すうほう}の神山から流れる五仙河のうちの一つ、芳川^{ほうせん}の支流が平原を潤し肥沃、海運業も盛んで他国との交易も頻繁に行い、他文化の摂取も比較的良好に行われた。その為か諸国と比べても、特に外国の者に寛容であった。これが、容易く他国の人間である魏素の將軍拔擢が行えた遠因ともいえる。実力があるのならば、それを素直に認めるといふ風潮が根底にあった。と言っても、戴邦では人材の流動などは日常茶飯事のことである。

五国と国境を接することから、外敵の侵入を防ぐべく軍備の増強が度々行われた。そのため、幾度もの戦闘で兵士は精強であり、史に名を残す名將がたびたび出現する所以^{ゆえん}となった。しかし、それも数年前を境に下降を辿ることとなる。

現成王の名を、秀^{しゅう}という。王位に就いたのが弱冠15であったが、すでに齡60近く、長年玉座を温め続けた。彰や他国との争いを有能な臣下の尽力で乗り切り、国内の政治に人生の大半を捧げ続け、ついには璃州一の国力を持つと、一時は璃州の約半分を版図におさめた。

だが、これ以上の勢力拡大を恐れた周辺国は彰を盟主に連合を結成、成の国境へと流れ込み、悉く城を奪った。中国の戦国時代に燕の楽毅^{がくぎ}が連合軍の盟主として当時強大であった斉を滅亡寸前にまで陥れたのと似ていた為、一時総大将であった司馬肩は楽毅に準えら

れたが、結局は各国軍の内部軋轢により楽毅の偉業には到底達しなかった。結果は前述の通りである。土地は荒れ名だたる名将や数万の士卒を失った成王秀は酷く心を病み、いつしかこの老王は国民の怨念を一手に引き受けたかのように璃邦の征服に執着する。

そして、ここ数年で成の官民の結束もあつてか、付け焼刃ながら軍備を再び整え璃邦の平定に乗り出した。国の運命を賭したといつていい総力戦である。

「疵はどこか」

魏素はふらふらと川辺に出て、ひび割れた珪石の丸石を手に取った。「いくら完璧な玉と謂えども、疵があればそこから割れる。ならば、金城湯池の砦も同じであり、鉄のような結束の集団も然り」

玄順は魏素を見上げつつこっくりと頷いた。

「玉の細かな疵は凝らして見ねばわからぬぞ」

確かに、と魏素は丸石を掲げ片目でこの丸石を覗きこんだ。白いが表面がざらついている。陽に透け、所々淡い光を帯びている。

疵はどこか。魏素は団子のような鼻を摩ると、また独り言のようにつづる。

「嫌な予感がします」

独り言は玄順の朽木の節のような大きな耳に届いた。

「氷越か？」

「ああ……いや、それもあるかもしれませんが、もっと気がかりなのは……」

「……天、微恍か」

玄順の皮張った喉が唸った。

「はい。少し、この戦で不可解なことが起きすぎているような気がします。情報では幾人かの将が微恍のさなか、高鮮への逃走路とは

逆の場所で目撃されている。彼等が何をしていたのかが非常に気になります」

魏素は掌で石をぎゅっと掴むとその長い腕を振り被って川の反対側へ思い切り投げた。石は、砦の周りに張り巡らされた柵に当たるとそのまま砕け散った。

「それはこの戦の勝敗を左右するものか、李讓。確かに微恍は我々の進軍を阻んだ。おかげで予定よりも行軍が多少遅くなったが、いずれは奪らねばならぬ場所。あれは天意かもしれないが偶然かもしれない。もしくは邑民が呼び寄せたのかもしれない。少なくともやつらが天の力をどうこうすることはできん。龍でも味方におらん限りな。そこまで心配するほどのことでもなかるう」

龍でもいれば、魏素はもう一つ小石を掴もうとした手を一瞬止めた。そして、何かに気付いたかのように振り返って側に居た部下に叫んだ。

「間者からの報告で瀑？殿が建恭から逃げた子供を助けたらしいという情報があったな」

魏素は入りこんでくるどんな情報でも聞き、そして目を通した。城内の兵士の流行りごとから、将の性癖までありとあらゆることを頭に入れていた。側近のものはそれを確かめると、魏素に告げた。

「しかし、噂でしかなく不明確であるとのことだ」

それを聞くと首を軽く捻ってから、最優先で調べると言って、すぐに側近を遣わせた。

「ちと早急すぎはせんかね」

玄順は所々白く縮れた髭をしごいてたしなめた。

「例えば子供を助けたとして、それが龍である証拠がどこにある。奴等は人の形をしておるそうではないか。本当にただ子供を助けたのかもしれん」

「そうでしょうか」

魏素は齒が見えるような笑みを含めながら兜を外し、近くの幕営へとずんずんと歩を進めた。そして諸将に参集せよと呼び掛けると、奥の座で腰を下ろした。

「敗北し、命からがら敵中から逃げる将が、どうして活路とは違う全く別の方向へ行つたのか。ずっと引つかかっていました。それは、どうしてもそこへ行かねばならぬ理由があつたから。しかも、軍を担う将らが自ら動いたとなると、よほど秘したいとみえる。そこまでして助けねばならぬ子供。そんなものは王の太子か家の嫡男が、そうでないとすると　雛龍か」

「莫迦な」

玄順は杖を振り落とした。

「どうかしてしまつたか、李讓（魏素）よ。そんな都合よく、龍が降邦しているなど……！！ほとんどが推論を重ねただけの憶測ではないのか！？」

「ならばなぜ、瀑？殿はあえて死中へ入つたのでしょうか。慎重なあの方がそんな危険を冒すなど、説明ができない」

玄順は皺が伸びるような呆れた顔で言った。魏素は何かと何かが多少歪な填まり方をしていても気にしない性であつた。要は、少しぐらい見栄えが悪くとも填まればいいのである。この件であれば、瀑？という男と雛龍という組み合わせは、歪ながらこのうえなく合致の感触がよい。これはこの実直な男の欠点でもあり、才能でもあつた。それが的外れであれば、単なる凡庸な将であるが、図らずも的に当てていることが、この男をここまで伸ばしてきた所以なのだろう。玄順はそこを承知してはいるが、あらゆる可能性を考慮せねばならない参謀として、理を詰めねばならない。

「よいか、龍が誰かに与するなど、滅多にないことじゃ。だいたい龍が陸炎（瀑？）に与してなんの利がある」

だが魏素の耳には届いていない。

「そうか、そういうことか……!!」

魏素は童が珍しい虫でも見つけたかのようににはしゃぐ。

「白虹日を貫く、というわけか」

瑕疵 〈？〉

玄順げんじゆんは思った。

こやつは瀑？はくの心が透けてみえておるのやもしれん、と。

魏素ぎその陸炎りくえん（瀑？）に対する憧憬は並大抵のものではない。成にいとくも、大枚を叩いて間者を放ち、陸炎の戦況を逐一事細かに報せた。行軍速度、兵の統御方法、部将の器量、輜重管理しじちじ、政治的立場、あらゆることを仕入れた。そして取り込もうとした、と同時に瀑？という人間を自身に会得しようとしたのだった。やがて部屋の中で収集した瀑？の戦場での思考を反復するうちに自分に瀑？が宿る気がした。

それが自らの憧憬の完成であり、体现であると思った。だが、憧憬に抱かれている心地よさは、母の腕の中でうたた寝するかの如く安らかであった。それを乗り越えられない魏素は、建恭で瀑？不在を聞いて安著したことだろう。臆病というのは違った引けがあった。

魏素も内心驚いただろう。確たる根拠もないのに、彼の考えていることがわかるのである。戦争といういわば極限的な状況が魏素にある種的能力をもたらしたというのなら、それはあまりに瀑？にとつて不運ということになるであろう。だが、玄順にとっては必ずしも芳しいことではなかった。

「主君を討つというのか」

その言葉には、翳りが含まれていた。魏素は濡れた布で顔をこしこ

しと拭いてから、目を一点において言った。

「近年の彰の政治は目に余るものと聞いております。丞相が実権を握り王は傀儡、しかもその王はその専横を見て見ぬふりをし、毎晩酒色に更けていると。あの剛直な陸將軍がそれを許しておられるはずがない。建恭の任を急に解かれたのも王や近臣と確執があるからと考えるのが自然。だが、彰の功臣の家系である陸將軍が彰そのものの篡奪など考えづらい。そもそも、あの方に限ってあり得ない。ならば龍を旗頭に」

「根拠は、あるのか？」

突然言葉を遮った。

「お前は、陸炎を知りすぎて、勝手に奴と自分を重ね合わせているのではないのか」

玄順の問いに魏素は口を開けたまま次の言葉が出ずに黙り込んだ。

「仮に。仮に奴がその企てを目論んでいたとして、この戦にどう結び付く。結局奴はこの戦いに勝たねば謀反すら出来ずに斃れるだろう。ならば、その前に我々が勝てばいいだけのこと。雛龍など関係ない。今、こうやっているときも、如何に我が軍の損害を少なくしてあの砦を落とすかを考えねばならぬのではないのか」

「だからこそです」

魏素の瞳に何か熱いものが宿る。

「あの方の守備に疵などほとんどありません。編みこまれた鎖帷子に指を差し込むが如きです。私の概算ではあの砦を落とすのに千から二千の死傷者を出し、千ほどの武器を損失するでしょう。しかし、もし雛龍がいたとしたら、もっと容易くかの城は落とせる」

玄順は、なおも信用していなかった。いや、信じたくなかった。それには理由があった。

魏素は最初であり最後の弟子である。その人間性は会った時からと

ても気に入っていた。必ずやこの芽生えたばかりの才能の塊を世に知らしめ、優秀な帷幄の臣として天下に埋没しかけた我が名を轟かせようと、この老人は決意していた。しかし、玄順に残された時間は少ない。

魏素の陸炎への昏倒ぶりは最近過剰になっていた。自らが陸炎にでもなつたかのように振舞い始めた。崇拜と憧憬の狭間、模倣と言っている。だが、陸炎の跡をなぞろうというのは、出世への道を閉ざすだろう。あの国土は、自らが王になり変わろうなど考えようともしない。永遠に王佐で満足するだろう。魏素にそうなってもらっては困るのである。

玄順が欲しいのは躍進、栄達、権力、を導いた賢臣の地位。あの老いた成王が死んだとき、必ず内紛が起きる。いや起こす。その為に策謀を巡らしてきた。その政争に参戦する地位、政治的発言力を得る為にこの戦いに勝つ必要がある。国の為の謀反などではなく、私欲の為の謀反、篡奪。しかし、このままでは下らない義憤に駆られ魏素はそれを洩る可能性があり、機を逃しかねない。残された時間は僅かである。

「ではどうする、その可能性に賭ける価値ありか」
魏素は卓上の駒を一つぱつと掴んで握った。

「その子供を捕らえ、質子ちしにします。例え雛龍ちりゅうでないにしても、将二人を犠牲にして守った子供、交渉の種ぐらいにはなりましょう」
「それで相手から何を引き出す？」

「そうですね……」
そつと空くうを見た。

「大司臯を殺してもらいましょうか」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0241/>

戴邦物語

2011年11月17日19時01分発行